代表　藤吉　裕二

NGO　MIRAI～魅来（みらい）

（埼玉県川口市）

埼玉県川口市のボランティア団体として、月2回ボランティアバスを運行。土日には4歳から70歳と幅の広いボランティアも加わり、自分にできることをしようと、花を植えたり、勉強や遊び相手になるなどの活動を続けられています。

●推薦者　社会福祉法人　川口市社会福祉協議会●

2011年3月11日の東日本大震災以後、近所の人、仕事仲間、友人、親族等に声をかけ、宮城県石巻市内避難所の様子を伝え、支援物資を集い3月18日に石巻市内の避難所に届けに来た時に、あまりの震災の被害の大きさを目の当たりにして、とにかくこの瓦礫を撤去し道を通れるように、早急にしなければ…と思い、瓦礫撤去を始めました。

すると、病院からの依頼で、1階の厨房が津波で被害を受けたため、入院患者にお粥も出せないので、「院の敷地内の瓦礫を撤去し、大型のキッチンカーを設置したい」という話を受け、病院の瓦礫撤去に向かった。が、瓦礫の数も物凄く、夜真っ暗な中、電気をつけて夜遅くまでかけて片付けた。その時思ったのが、全体的にボランティアの数がこの震災の規模に比べて少なすぎる…ということでした。

地元埼玉県に戻り、バスを出して人を募ろう！と仲間に声をかけ、チラシやポスターを作り、駅やお店などいろいろな所に配り、2011年4月27日に復興支援チーム「笑顔届け隊」として第一陣のバスを出しました。

そこから2週間に一度、第二・第四の週末にバスを出し続け、その時々の被災地のニーズに合った支援をしてきました。

色も無く真っ暗な避難所を明るくしたいと、埼玉から花と土をもって来て、避難所の周りの泥を取り除き、花を植えたり、ボランティアの参加者の中に特技がある方は、その技を活かし、マッサージをしてあげたり、マジックや腹話術、落語に踊り、乗って行ったバスを開放して、カラオケバスと題して大きな声を出して発散してもらったり、更衣室のない避難所に更衣室を作ったり、あらゆる事をしてきました。これと言って特技等は無いので力仕事をと言う方には、瓦礫撤去や泥出しなどで活躍していただきました。

暑くなってくるとハエが大量発生しました。その発生源の一つとして、側溝に溜まったヘドロに蛆がわきハエが増えていると知ると、「側溝掃除部隊」を募り、側溝掃除に励みました。避難所にはエアコンが無いどころか網戸すらなく、蒸し暑い中、夜は寝苦しいが蚊にくわれるので窓を閉めて過ごしていると知ると、行政に掛け合い「網戸取り付け隊」を募り、たくさんの避難所に網戸を取り付けました。

石巻市長からお礼状もいただいたのですが、何よりうれしかったのが避難所の方々が「これで今日から窓を開けて眠れるのですね。ありがとうございます」と最高の笑顔を見られたことでした。

その後、避難生活から仮設住宅移ると、抽選で決まっていくので、知らない人同士が隣り合わせで暮らしていて、一人暮らしの方などは一日一度も声を発していない人もいると知り、孤独死などを防ぐため、コミュニティーを作ろう！と各仮設住宅でバーベキューを開きました。住民の方々を外へ出し、手伝ってもらいみんなで楽しいバーベキューが終わり、私たちが帰る時、仮設住宅の方々が「久しぶりに今日は楽しくさせてもらい、こんなに笑ったのも震災以来初めてです」とか、「今日はありがとうございました。これで明日から近所の人とご挨拶ができます」など、最高の笑顔を見ることができました。

そして一年が過ぎ、私は石巻に住まいを移し、こちらの方々の「福幸建創」という名の会社を立ち上げ、雇用を作りながら、私の特技である建築という分野で技術を伝えながら、1秒でも早く皆さんが元の生活に戻れる様に励んでいます。

まだまだ被災地では瓦礫が散乱している所など手つかずの所もあります。

週末の休日には、ボランティアも集まり、瓦礫撤去を今でもしています。まだまだボランティアは必要です。そしてボランティアで被災地に来ることが、風化を防ぐ事と思っています。ボランティアの派遣にご協力を宜しくお願い致します。

また、建築などの技術者はどんどん被災地に来て、その技術を伝えに来ていただきたいので、併せてご協力をお願い致します。

NGO MIRAI ～魅来
代表　藤吉　裕二

女川町

女川町

平成２３年４月２４日　住吉中学校にて

万石浦中学校避難所

ボランティアバス

埼玉から運んだ花

渡波中学校避難所

渡波中学校で救護物資を配布

会長　小森　敏一

埼玉はすだ支援隊

（埼玉県蓮田市）

蓮田市と白岡町の建設業者により組織されたボランティアグループで、延べ40日に亘り孤立していた地域へ支援物資、建設資材、重機を持参し、新たな避難所の建設、側溝の清掃や炊き出し等の支援をされました。

●推薦者　社会福祉法人　蓮田市社会福祉協議会　会長　佐藤　正春●

この度は、当団体に栄えある賞を頂き、身に余る光栄だと思っております。今回の賞は、埼玉はすだ支援隊のメンバーと、ご協力・応援してくださった全員で受賞したと思っております。

埼玉はすだ支援隊は、3.11に発生した東日本大震災の状況をテレビなどのメディアで、甚大な被害を知った数人が、私たち建設業者の技術や経験、機材などを使った支援が何かできないだろうか？と、建設組合や仕事仲間や友人に呼びかけたのが団体立ち上げのきっかけです。メンバー構成は、埼玉県蓮田市と白岡町の建設業者が中心となっていますが、他の地域の方や建設業以外の職種の方もメンバーとなっています。

支援活動は、宮城県本吉郡南三陸町歌津馬場中山地区を中心に活動していますが、宮城県石巻市雄勝地区や新潟県小千谷市若栃地区に雪かきのボランティア活動など、小さな支援ながら活動をしてまいりました。

私達の活動は、主に建築関係になりますが、大きく分けて二つのチームに分かれて活動しています。建物の建設や補修する「大工チーム」と、瓦礫の撤去や道路の建設・補修、道路側溝の清掃、草刈り等の「土木チーム」に分かれて、メンバーの職種や技術を生かしたチームになっています。

南三陸町歌津馬場中山地区では、地域の方々と連絡を取り合いながら、状況に合った支援を心がけてきました。

最初の支援活動では、避難所である公民館が狭く、全員が寝る事ができず車の中や倉庫などで寝ている状況でしたので、資材を他の支援団体さんに提供してもらい、避難所を私達の大工チームと地域の方にも手伝ってもらい建てる事になりました。

土木チームは、砕石と重機・特殊車両を現地に持ち込み、避難所までの仮設道路の建設や周辺道路の補修や、瓦礫の撤去作業などの活動をしました。

一回あたりの活動は、短期間での活動ですが定期的に活動し、港近くに漁師の休憩小屋の建設や避難所などの防寒工事などの大工チームの活動と、周辺道路の補修や道路側溝の清掃などの土木チームの活動になっていますが、一番大きな活動になったのが、地域の方達から「未来道」と呼ばれている避難道の建設になります。

南三陸町歌津馬場中山地区では、震災時に海沿いの道が全て壊れて、それ以外の道はなく1週間、完全に孤立したそうです。そこで海沿いを通らなくても、内陸に行くことができる道を、山の中を切り開いて作る事になりました。全長は1．3km　幅員6mの道路です。測量や山の木の伐採・造成などは、他の支援団体と連携しながらの活動となりましたが、仕上げの砕石舗装は、私達の活動となりました。砕石を地元宮城県の建材屋から150㎥を購入して、運搬、敷き均し、転圧の道路工事です。ダンプ3台、重機2台を持ち込み、他にも現地の重機3台を使った大規模な活動となりました。

瓦礫撤去

道路側溝清掃

未来道建設仕上げ

建築関係の活動以外にも、支援物資の運搬や配布、炊き出しなどの活動もしてきました。

現在までに十数回の支援活動や打ち合わせ、現地調査、地域のイベントなどの参加で、南三陸町歌津馬場中山地区に行っています。いつも私達の地元のお酒を持って行き、地域の方達とのいい交流となっていますが、最初は震災直後だった事もあり、信頼関係も何もなく、お酒を出していいものかも分からずにいましたが、地域の方から誘っていただいたのが、印象的でした。

支援活動をして、お酒を飲んで交流してと回を重ねるごとに、お互いにうち解けて良い関係を築くことができていると感じています。

最近では、馬場中山地区には支援活動に行くというよりも、友人の家に手伝いに行く様な、田舎に帰る様な、とても不思議な感覚です。それは、馬場中山地区の方々の優しさや、温かさや、もてなしの心がそう思わせているのだと思います。

震災から1年以上が経ちますが、完全な復興まではまだ長い時間がかかると思います。「埼玉はすだ支援隊」は、私達のできる事を、できる範囲で、微力ではありますが支援活動を続けていきたいと思っています。

今まで、「埼玉はすだ支援隊」にご協力・ご支援いただいた皆様、本当に有り難うございました。

これからも、よろしくお願いいたします。

埼玉はすだ支援隊
会長　小森　敏一

集合！

活動前のミーティング

漁師番屋建設

未来道建設

お疲れ様です

避難所建設

監査　小田　恒雄

特定非営利活動法人
川口市民防災ボランティアネットワーク
（埼玉県川口市）

川口市が開設した避難所で会場の整備等取り仕切り、さいたまスーパーアリーナへの支援とともに、被災地へのボランティア派遣も積極的にされています。

●推薦者　社会福祉法人　川口市社会福祉協議会●

東日本大震災における活動について

当会は、阪神淡路大震災の教訓から、埼玉南部地域に想定される大地震に備え、平成11年より川口市の有志が集い活動を開始し幾度の変遷を経て、平成19年4月にNPO法人としての認証を得ました。

埼玉県南部地域での防災に「特化」したNPO法人として、普通の市民感覚で「防災」を捉え考察し、自分達の街を自分達で守りたい。それには何をすべきなのか、何が出来るのか、を常に課題として活動して来ました。

普通の市民が「地震・洪水」の巨大なエネルギーに立ち向かうには、自然に対する敬虔なる思いを持ちながら、人的な被害の低減と、そこから立ち上がり「復興」する意志を、活きた訓練・体験・学習する事で「醸成」し続ける必要があります。

今般の震災において、被災現地への支援・遠く川口に避難された方々へ私達が出来ることは、「援助」する事で「寄り添い、支え合う」事でした。川口市内の避難所に於いても、被災現地に於いても、私達だけではない普通の市民の皆さんが同じ目線で活動を致しました。私達に特別な者はいない。

被災地での活動も行った

川口での受入れ風景

会員一人一人が、それぞれの立場・職域・わが街への想いを持って、埼玉南部を含めた関東地域に切迫している大災害に対応したいと思います。

防災の戦力とは弱者・強者の区分けをする事ではなく、全ての「市民力」を最大限に「活かす事」にあるのということを念頭に、市民意識の啓発と想像力を実際の場面で「積み重ね」て行きたいと思います。

被災現場や川口に避難された被災者の皆さんから、私達は学び・励まされていたと感じています。周囲の普通の市民達に伝えていく事。これは、同じ市民だからこそ出来る事だと思います。

少しづつでも良い。確かな積み重ねが、地域防災力として結実する事。この表彰を励みに、その一翼を私達が担う事が出来る様にして行きたいと思っています。

今回の表彰は、関連した「全ての市民の活動」が評価されたものとして、受け取らせて戴きます。

代表理事　大羽賀　秀夫

打ち合せの様子

福島からの避難者を受け入れたスポーツセンター

会長　吉田　純一

全国オートバイ協同組合連合会

（東京都港区）

組合の加盟店を中心にバイク部隊を結成し、オートバイの機動性を活かし、医薬品を含めた物資の搬送や孤立避難所の情報収集を支援。また各組合では復興支援ツーリングのイベントも開催されています。

●推薦者　松島　裕●

今回の東日本大震災において、被災されました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

私どもは、この未曽有の災害に対しオートバイの機動性や低燃費といった特徴を生かした支援活動を実施いたしました。

活動は、宮城県の石巻地区、女川町地区、牡鹿地区、雄勝町地区において、3月28日から4月24日の約1カ月間、関東地区を中心にした、延べ70名の組合員が参加いたしました。

活動内容は、孤立した自主避難所への救援物資や医薬品、災害本部からの情報伝達回覧板の輸送や自宅避難者に対する情報伝達と声かけ、救援物資集積所における物資の仕分け作業、自動車やオートバイ、発電機の修理等多岐にわたりました。

特に当初は、自主避難所や自宅避難の被災者の方に対しては、災害本部も状況把握が出来ないため、何の情報も救援物資も届かない状況でした。

オートバイの持つ機動性により、そのような被災者の方の情報を収集し災害本部に連絡をしたり、被災者の方の話し相手になるような細かなネットワークを行いました。

このように、災害発生初期におけるオートバイの機動性は、特筆すべきものであります。

今回の私どもの活動をマスコミ関係者が新聞、テレビ、ラジオ等で取り上げて頂きましたことにより、行政におきましても、災害初期の支援にオートバイを利用した活動を組み込もうとする動きが増えてまいりました。

石巻市役所にて、参加した組合員メンバー

女川町にて整備中

雄勝町にて打合せ

また、震災復興には、被災地に足を運んでもらうのが第一であります。

そこで10月8日と9日に東京の組合が「福島復興ツーリング」を開催致しました。ライダーにオートバイに乗って被災地に行ってもらい、地元にお金を落とすイベントを大規模なものではなくても、継続的に各地で開催することにより、復興の一助になればと考えております。

今年は、このような「復興ツーリング」を関東地区の組合を中心に、継続的に開催していきたいと考えております。また、様々な災害に対してオートバイを利用した初期救援の仕組みを官民で構築し、上手にオートバイを利用して頂き社会に貢献できるようにしたいと思っております。

最後になりましたが、このような表彰を頂き感謝いたしております。この表彰は、オートバイボランティアに参加した、組合員の献身の賜物であると思っております。

これを機にオートバイと云う乗り物が、社会に役立つものであることが、皆様方にご理解をして頂ければ幸いであります。

全国オートバイ協同組合連合会
会長　吉田　純一

雄勝町出発前の様子

代表　押田　一秀

リスマイルプロジェクト

（東京都港区）

震災直後から、被災地にエンターテイナーを派遣。被災者に笑顔を取り戻す活動で、昨年末までに50か所以上で250回を超える公演を開催。他にも復興に向けて支援マッチングやコミュニティー創出等の分野でも活動されています。

●推薦者　NPO法人　相馬はらがま朝市クラブ●

震災直後、日本の東半分から笑顔が消えた。子供たちは自由に遊ぶことはおろか、笑うことにすら躊躇する異常な状況が東北を覆っていた。“楽しむこと”に罪悪感すら覚え、暗澹とする親の顔色を窺いながら独り遊びに没頭している子供たちの姿は痛々しかった。

2011年3月14日、数人のパフォーマーとともに「リスマイルプロジェクト」が立ち上がり、笑顔復興のため、被災地でのパフォーマンス活動をスタートさせた。炊き出し会場、避難所、学校、保育所、公園、イベント…　人が集まる場所に笑顔を届け、震災より1年間で350回を超える被災地パフォーマンスを実施し、約150組のスマイルアーティストが東北に足を運んでいる。

さらに、エンターテイメントを切り口としたコミュニティ支援に力を入れ、そこに集う人々が生きる歓びを得るための活動を展開。自殺をはじめとする震災関連死・孤独死を防ぎ、住民同士での結束を強めるための手段となることを目的に活動を続けている。

震災より1年が経過し、支援も次のフェーズへ。「ヒト・モノ・カネ」の支援から「ヒト・コト・シクミ」の支援が重要となる時期に移行したと考え、リスマイルプロジェクトでは、コミュニティを構築する活動から運営をする活動へ、必要な物資を集める活動から生産するための基盤を作る活動へ、ボランティアスタッフを派遣する活動から雇用を創出する仕組みを作る活動へと、ニーズに合わせて支援の幅を広げてきた。

福島県相馬市には復興拠点とすべく「復興支援センターＭＩＲＡＩ」を設置し、復興に関する市民相談窓口を運営。相双エリアを中心に原発被害に苦しむ人々に対する安全な飲料水の確保や、その土地に残る子供たちの遊び場を提供するなど、より地域に密着した支援を実施している。

同時に、被災地の現状を全国に発信すべく啓蒙イベントを開催し、風化の防止に努めている。

コミュニティ支援の活動は今後さらにニーズが高まるものだと確信している。時間とともに活動を緩めるのではなく、より真摯に被災地住民と向き合い、心からの笑顔が行き交うまで何十年でも必要な支援を続けていく決意である。

最後に、リスマイルプロジェクトを支えてくれている多くの方々にこの場を借りて御礼を申し上げます。スマイルアーティストとして被災地に通い続けてくれているアーティスト・パフォーマーの皆さん、献身的に協力してくれているボランティアの皆さん、活動を支えてくれている全国の協力者の皆さん、本当に有難うございます。コミュニティ支援はこれからが本番となり、リスマイルプロジェクトは東北復興に必要な“笑顔”を生み出す活動を続けてまいります。今後とも変わらぬご協力をお願いいたします。

リスマイルプロジェクト
代表　押田　一秀

バルーンアートはいかが？

エンターテイメントを切り口にコミュニティ支援に力を入れる

パフォーマンスに笑顔を見せる被災地の子どもたち

代表　藤本　武

地域ネットワーク推進会議
たかつ災害ボラネット
（神奈川県川崎市高津区）

神奈川県立高津養護学校の教職員などが、特別支援学校の職員であるという専門性を活かし、白石市や名取市の福祉施設で、延べ30日181名のボランティアと共に、スポーツイベントや療育キャンプでサポート活動などをされました。

●推薦者　公益財団法人　かわさき市民活動センター●

「東日本大震災被災地障がい児者支援活動をおこなって」

平成23年の夏休みを利用し、宮城県内障がい児者施設（利府町NPO法人「さわおとの森」、名取市の社会福祉法人みのり会「るばーと」、白石市の社会福祉法人白石陽光園「ポレポレ」）や手をつなぐ育成会「みやぎ手をつなぐ夏祭り」のスポーツイベントや音楽会、48回目という伝統ある「仙南7町身障者スポーツ大会」、宮城県重症心身障害児（者）を「守る会」療育キャンプでの障がい児者支援活動等に参加させていただきました。

この活動は、3月19日に神奈川県川崎市にある神奈川県立高津養護学校の教職員が、川崎市とどろきアリーナに開設された「避難所」のボランティアをおこなったことをきっかけに、5月の陸前高田市での「思いで探し」ボランティア、6月の東松島市での「泥だし」ボランティアと取り組む中で、特別支援学校の教職員として、その専門性が生かされるような障がい児者支援活動ができたら、という願いからはじまりました。

なお、この活動に際し、宮城県教育委員会特別支援教育室、宮城県重症心身障害児（者）を守る会秋元会長、社会福祉法人白石陽光園ポレポレの菅原所長から多大なご協力とご支援をいただきましたことを報告し、感謝いたします。

活動は7月25日（月）のさわおとの森での活動を初めとし、白石陽光園さんのご好意により、白石あけぼの園の宿泊施設を拠点として、8月23日（火）まで延べ30日間181名の参加者で取り組み、更にはこの冬の年末年始には石巻市でも支援活動に取り組みました。

一日の活動を終えて反省会

みんなで大きな絵を描く

気仙沼支援学校で太鼓づくり

利府町のさわおとの森の子どもたちと

活動に参加させていただいた神奈川県立高津養護学校及び県内特別支援学校教職員を初めとし、作業療法士や大学生、元社長さん等、17歳の高校生から還暦を過ぎた方まで様々な経歴と思いを持つ方々が、学生時代の合宿生活のように語りあい、震災についての思いを吐露してくれました。この思いは震災復興まで続くものと確信しました。

また、日々の活動の終わりには、必ず被災地を見学させていただきました。名取市の仙台空港周辺や亘理町荒浜海岸、山元町の坂元駅周辺など、余りマスコミが報告しない地域の被災状況に、愕然とする思いしか抱けませんでした。

この地で生活し、活動する皆様のご苦労やお体にどうぞ安穏がいち早く訪れますよう、また是非、多少のお手伝いをさせていただける機会がきますよう、ともに活動できたらと願ってやみません。

今回の活動に参加し、宮城県内の障がい児者支援にたずさわる多くの方々の想いと実践が、被災された障がいのある方々のいち早い回復と、平穏な生活維持につながっていると実感しました。この災渦からの復興がすみやかにすすむことをこころより願っています。

今回の社会貢献者表彰の受賞を心より感謝申し上げるとともに、今後の活動の心強い応援として、これからも障がい児者支援活動に取り組む所存です。

たかつ災害ボラネット
代表　藤本　武

思いで探し

重症心身障害児を守る会

東松島で泥出し

代表　高田　昭彦

復興ボランティアタスクフォース

（神奈川県川崎市麻生区）

川崎市で設立された災害支援ボランティアで、中越地震の際災害ボランティアのノウハウを市民に伝えてきた経験を活かし、被災地のボランティアセンターを支援されました。

●推薦者　公益財団法人　かわさき市民活動センター●

3月11日その日私は、帰宅困難者であった。翌日に予定していた災害ボランティア訓練の講師の方から、宮城県を出られない、山形のNPOの仲間が山形県庁に参集した、などと情報が入ってくる。

一方、夜になっても電車再開のニュースは無い。ビルの窓からは、徒歩帰宅者の人波が見える。私はここで何を待っているのだろうか？こんなところで無為に時間を過ごしてはいけない。

決意した私は、4時間を費やし徒歩帰宅した。翌3月12日、寝袋、ガソリン携行缶などを積み、念のため訓練予定場所に向かい、関係ボランティアセンターに行き打ち合わせに参加したあと、「現地に向かいます」と告げ、希望者2人を乗せて関越道→新潟→磐越→猪苗代→米沢へと向かった。

東北道の通行止めが解除されないため、老舗とされる神戸や新潟の災害NPOも山形に一旦立ち寄り、宮城、岩手へと向かったという追加情報も得ていたためである。

山形のNPOの一部隊として、翌日3月13日は宮城方面の情報収集に行くこととなった。仙台市内では、インフラ途絶による炊き出しや買い出しのための長蛇の列があちこちにあったが、さらに東進した。

仙台東部道路を超えたところで風景が一変した。クルマが押しつぶされ、道路には泥、流木もあり行く手を阻む。避難所の医療班の方に少しお話をうかがうも、「急性期の外傷患者は少ない、残念ながらお亡くなりになっている」とのこと。国道45号でヒッチハイクする人を乗せ、多賀城へ向かう。平日日中の被災であり、学校職員も、行政職員も居るが、いつ来るかわからない救援物資を待ち続けるしかない。

電話をかけ続け、発電機のガソリンも尽きそうとのことで、携行缶の20リットルを寄贈する。山形県庁に戻って報告するが、北部沿岸部に向かった隊の報告ではもっと酷い状況であった。被災したクルマからガソリンを抜き取られていたり、最後は泥の中を歩いて避難所に到達したという。

深夜、神奈川の自宅に帰宅すると、計画停電で電車が止まるとのこと。3月14日に出社すると欠席者が多い。無理をして出社しなくて良いとのことで、休暇をいただく。放射能の恐怖が頭をよぎったが再度北へ向かい、1週間を山形の仲間とともに過ごし、その後は、毎週末のように被災地に通った。

1年を過ぎ、現地ニーズもボランティア気質も大きく変わってきたように思う。

今後の災害においても私の活動は、続くであろう。経験がモノを言う災害ボランティアの世界だが、ボランティア経験者を非常勤の行政職員や、社協職員として派遣する青年海外協力隊のようなシステムができればと思うものである。

復興ボランティアタスクフォース
代表　高田　昭彦

気仙沼市大島にて

気仙沼本吉町　竹林の瓦礫撤去

気仙沼小泉浜にて

山形県米沢市福島避難者施設の雪下ろし

石巻市渡波にて床あげ泥かき

仙台市若林区七郷小学校避難所

会長　梅澤　弘

移送奉仕団体「移送さいわい」

（神奈川県川崎市幸区）

福島県からの避難者を川崎市が受け入れたことから、避難者への対応や、支援物資の整理等にあたられ、避難者の力になられました。

●推薦者　公益財団法人　かわさき市民活動センター●

車椅子利用者の車両移動の運転ボランティアを「移送さいわい」として12年、災害時における車椅子利用者への援助の必要を感じ、川崎市に所在する団体が参加している「川崎防災ボランティアネットワーク」（かわさき市民活動センター内）に参加して10年、そんな中、平成23年3月11日、東日本大震災が勃発、私も何かボランティアを行いたいが、年齢からして現地での肉体労働は周りの足手まといになると思い、現地に行かないまでも何かないか思案に暮れていました。

そこへ原発の被害から、川崎市に緊急避難してきた被災者受入の手伝いを、川崎市社会福祉協議会から、「川崎防災ボランティアネットワーク」に依頼され、我が「移送さいわい」としても、3月19日から避難所が閉鎖された7月31日まで（20日間延べ35人）、川崎市体育館や等々力アリーナで避難者との会話や避難生活場所の整頓、避難者に対する支援物資の整理等の協力をさせていただきました。

原発施設から近い住民の避難者が多く、中には原発関連事業に勤めていた人もいて、親・子・孫と三世代の家族もいました。

子どもの健康を考え、母子での避難者や川崎市在住の親族を頼ってきたが、建物が狭く居住不可能で避難してきた家族等々、最大100名を超える避難者が生活していました。

ボランティアの日数が重なるうち、避難者の方々も我々を受け入れてくださり会話も弾んできました。また支援物資の整理では、特に女性物の区分けに苦労し、女性避難者の手を借りたこともありました。

避難所が閉鎖になる直前には別れを惜しんで、避難者とボランティアとの昼食会が開かれ、楽しいひとときを過ごしました。またの再会を願いながら避難所は閉鎖されました。

福島に帰る人、神奈川県内の公営住宅に居住する人、避難所近辺の民間住宅に居住する人など様々でした。

その後、日常のボランティア活動を行っていたところ、「川崎防災ボランティアネットワーク」から「公益財団法人社会貢献支援財団」の表彰に推薦するとの連絡を受け、10月初めに必要書類を作成し送付しました。

年が変わって3月3日同財団から表彰該当団体に選ばれたとの通知が届き驚きました。

表彰は5月1日帝国ホテル（千代田区内幸町）とのこと、当日は会長（梅澤弘）以下2名が表彰式に出席し、立派な表彰を受けた上、多大な副賞も戴いてきました。

これは、「できる人が・できる時に・負担とならない活動」を行ったことに対してなされたものと認識し、この表彰に大変感謝し、副賞は被災地見学ツアーの費用の一部に充てる等、当会の活動に有効に活用させていただきます。

移送奉仕団体「移送さいわい」
会長　梅澤　弘

支援物資を整理中

福島からの被災者を受け入れた等々力アリーナ

代表　東角　操

災害ボランティア・チームふくい

（福井県福井市）

被災した陸前高田市の社協に代わり、ボランティアセンターを支え、受け入れ体制を整えました。またバスを仕立て福井県から1,200人のボランティアを輸送し、道路の確保や瓦礫の撤去、医療福祉の活動を実施。また高田の松原の松を回収し、その幹から数珠等を現地の人が製作するシステムを作り、販売で復興に役立てています。

●推薦者　陸前高田市　米崎町　地竹沢公民館●

東日本大震災における受賞について

1. 活動内容

今回の大震災発生にあたり、今までの取り組みを活かし、要請待ちではなく、発災後速やかにかつ積極的に先遣隊を派遣し、災害地での情報収集にあたり、大きな被害を被った救援活動として福井県内の自衛隊・消防・警察・赤十字関係者の多くが向かった陸前高田市をカウンターパートに継続・集中的に支援することにした。被災地で行なってきた活動内容及び現在も継続中の活動は、以下のとおりです。

1. 平成23年3月18日～

陸前高田市災害ボランティアセンターの立ち上げ支援。

2. 平成23年3月下旬～8月下旬　＝福井県からボラバスの運行＝

高齢者などの要援護者宅への訪問介護、看護・入浴介助・見守り活動・福祉避難所での介護活動支援及び現地機関復旧に伴う要援護者情報の移行。

3. 平成23年4月上旬～8月下旬　＝福井県からボラバスの運行＝

被災者宅（敷地）・農地・区道・農道・都市及び農業水路などのガレキ撤去。

4. 平成23年4月下旬～継続中（回収は終了）　数珠の加工販売は今後も継続する。

名勝陸前高田の松原の流木（倒木）松の回収（1万本）及び薪、数珠や木製グッズなどの加工製作・販売を行う再利活用事業による収益金の寄付。

5. 平成23年5月～8月下旬

福井県内の伝統品　越前焼きの食器1万点を仮設住宅居住者に配る。

保育園児に対しての和紙を使った折り紙教室など。

高田の松原の流木松の回収

要援護者の入浴介助

瓦礫の片付け

陸前高田ボランティアセンター立ち上げ　3月19日

6. 平成23年5月上旬～継続中

定期的に訪問し、炊出し、もちつき大会、お楽しみ会の開催を行いながら、傾聴ボランティアや寄り添い、見守り・健康チェックなどの活動を行う。

7. 平成23年9月～継続中

りんごを一括大量購入輸送し、復興りんごと名付けて福井県で販売すると共に販路拡大を行う。

8. 平成23年5月～平成23年12月

津波で大工道具を流された方に対しての大工道具の提供（流木松の再利活用プロジェクトのため）

9. 平成23年5月～継続中

気仙朝市への福井ブース出店（福井県産品の格安販売）

24年度は、仮設商店街への出店と商店街復興のための支援。

10.平成23年4月～継続中

時間と共に変わる被災者のニーズに即した、物資支援を行う。

「チームふくい」の総称の元、上記の様な活動を陸前高田市に的を絞り、継続的・集中的に行なってきた。ボラバスでのボランティア派遣を含み、約1,200名のボランティア派遣を行なってきた。

福井県から継続的に支援を行ってきたことにより、被災者（行政・市民）も「ああ、ふくいさんですね」と心を開き、安心して関わることが出来たと感じている。

今後は、単に人的・物的支援だけでなく、被災地が復興へつながる、被災地の産品の販路拡大による経済自立ができるようお手伝いをしていきたいと考えている。

そして、陸前高田市と福井県の交流がいろんなレベルで盛んになり、お互いどんなときも助け合える関係になるよう頑張っていきたいと思っています。

災害ボランティア・チームふくい　理事長
チームふくい　代表　東角　操

復興りんごを福井で販売

ふくいからクリスマスサンタ派遣

代表　菅原　由美

全国訪問ボランティアナースの会　キャンナス

（神奈川県藤沢市）

藤沢市に本部を置き、地域で高齢者の介護事業などを行っているキャンナスは、震災翌日には全国の会員に支援を要請。1800名いる気仙沼の避難所などで、医療チームのコーディネーターを務め、高齢者や乳幼児の世話などを行い、延べ4千人の看護師を石巻や気仙沼市に派遣されました。

●推薦者　キャンナス名古屋　代表　冨士　恵美子●

（＊）介護者の休養

看護師が介護に入ると、家族はとても安心できるという家族の看取りから得た事実を大事にしたいと考え、家族のレスパイト(＊)を目的としたボランティア団体「キャンナス」を立ち上げました。キャンナスの名前は、「できるcanことをできる範囲でするナースnurse」との思いを込めて名付けました。

1997年の設立時には思いもよりませんでしたが、「自分の地域にキャンナスが必要」と立ち上がる看護師が大勢あらわれ、現在、全国に約50の支部があります。高齢者の介護から、結婚式などの付き添い、町ぐるみの外出支援、難病の方の付き添い、旅行など各自が各地域のニーズに寄り添っています。

東日本大震災においては、3月20日に入った宮城県の気仙沼市、そして石巻市を中心に活動しております。生活視点を持った訪問看護師として、避難所では「本番」となる夜間のケアのために寝泊まりをしながら長期滞在支援に入り、環境改善を中心に取り組みながら、緊急搬送の人数を減らす効果を出し、また避難所内の災害対策本部の方のレスパイトに努めました。

現在、仮設住宅に移られた中でも、不安な生活は続いています。私たちは、引き続き集会所での「お茶っこ」や戸別訪問などを、一部、市からの委託を受けながら、またボランティアとしても支援活動を続けております。

看護師が自主的に行ってきた支援は、一冊の本『ドキュメントボランティアナースが綴る東日本大震災』（三省堂）としてまとめることができました。

被災地においては、急激に増えた医療ニーズに対して供給が追い付かない状態が顕著ですが、過疎化・医療不足の東北エリアの現状は、日本の未来でもあると考えています。すきま支援であるボランティアのみの活動では、課題解決は困難でしょう。

早急に公的な活動に結び付くようにと、被災地特例で認められたように介護保険制度の下、看護師がひとりでも訪問看護サービスを提供できるよう活動しております。結果、1月には福島市で第一号が誕生したことはうれしい話題でしたが、3月には提供が止められるなど、市民のニーズの本質にマッチしたスムーズな運用が叶っておりません。

規制仕分けで決められた通り、訪問看護ステーションの人員基準2.5人が廃され、看護師がより積極的に地域に貢献できること、市民がどんな看護を受けるか選べるチャンスが公平にあることを願って止みません。安心して暮らせる未来のため、皆様、何卒お力添えを賜れますようお願いを申し上げます。

全国訪問ボランティアナースの会
キャンナス　代表　菅原　由美

ダイソン社の寄付による掃除機で

志津川で診察補助

避難所で健康観察

石巻でトイレ掃除

避難所で健康管理

石巻にて簡易トイレ作り

石巻にて

理事長　宮下　俊哉

特定非営利活動法人　ほこほコネクト

（長野県上田市）

長野県上田市に寄せられた支援物資を被災地に運び、釜石市のボランティアセンターの運営支援を３月から12月まで続けられました。

●推薦者　社会福祉法人　上田市社会福祉協議会●

私共のNPOは、地方の小さな地域のボランティアサークルであり、出来ることも大変に限られております。この度、私共のような小さな団体が受賞させていただくことに、大変恐縮しております。

今回の支援では、支援者と被災者という立場でなく、伴走者として影からの応援というスタンスが中心でもありました。また、私共が頑張ったのではなく、協働、協力させていただくことでもございました。これは、推薦いただきました、上田市社会福祉協議会様が、地味な活動をお支え下さった、お力によるものでもございます。

3月17日から市民の方の有志とともに、現地の寺院の青年会の現地調整により福島へ物資支援を始めたのが最初でした。その後、宮城などにも支援させていただき、5月からは、理事長が災害ボランティア活動支援プロジェクト会議から、釜石社協の災害支援ボランティアセンターの運営支援へ派遣され、現在まで、断続的な関わりを続けさせていただいております。

活動は、主に支援者への支援や調整といった活動となりました。協力させていただく中で、フェーズ毎に刻一刻と変わる現地。地域の様々な違いは、これまでの経験や画一的な支援は、住民の方の為になっていないことなど、考えさせられました。

特に被災地では、行政などの対応批判も聞かれますが、行政等も被災者であり、批判するのでなく、共に考えていくことの大切さを感じました。同時に、支援を効果的にするには支援者、行政、社協、地元など様々な人の連携の大切さを実感しました。

また、当方の地元では、震災のから学んだこととして、地域の自治会のまつりを防災視点を入れたものに提案させていただき、実施いたしました。これは、地域の人の老若男女の人の繋がりの大切さを実感したことからでもあります。

メッセージカードも添えられた文具の支援セット

救援物資を輸送

今後、復興期における生活支援が大切ですが、被災地の問題は、普段の問題が、震災により大きく露呈した部分もあります。また、被災された方、そうでない方、同じ地域でも温度差があったり、人により生活能力にも差があります。

“してあげる”援助でなく、“共に歩む中でそっと支えていける”“寄り添っていける”援助が大切なのではと感じます。

これからは地元の方が、お互いを認め合い、支え合い、あたたかい心がかよう 地域へ、地元の方が中心になっていくことができるお手伝いができないかと感じております。

これからも、私どもは影の伴走者としての援助プランを検討させていただきたいと思っております。また、大切なこととして、震災の経験から、多くの犠牲になられた方の いのちを受け継ぐ者として、私どもは、地域に根差した活動を地味で小さくても、少しづつ続けてまいります。

真田山長谷寺副住職
全国曹洞宗青年会災害復興支援部
アドバイザー
特定非営利活動法人ほこほコネクト
理事長　宮下　俊哉

物資を運ぶトラック

ほこほこコネクトの活動を紹介したパネル展示

被災地への手づくりうちわ

釜石にてボランティアセンターの運営支援を行った

啓発活動として自治会のまつりでチャリティーコンサート

委員長　浜田　恭弘

埼玉県赤十字災害救援奉仕団

（埼玉県さいたま市浦和区）

埼玉県在住の赤十字防災ボランティアで構成される団体で総計323名が、ボランティアを送る調整作業や、医療救護班の派遣支援、救援物資搬送の準備などの他、いわき市や南三陸町で瓦礫の撤去作業等に従事されました。

●推薦者　日本赤十字社　埼玉県支部●

私たち埼玉県赤十字災害救援奉仕団は、赤十字の基本原則（人道、公平、中立、独立、奉仕、単一、世界性）に賛同し、日本赤十字社（以下日赤）と協力しながら活動するボランティア組織（奉仕団）です。

阪神・淡路大震災の発生した1995年に創立され、日赤埼玉県支部が実施する防災ボランティア養成セミナーを受講し、防災ボランティアとして登録した人の中から、普段より災害や防災にかかわる活動をしたいとの志を持った仲間が集まって活動をしています。このように災害での活動を主とした奉仕団は全国的に珍しいものです。

創立から今日まで、幸いにも埼玉県内では大規模災害は発生していませんが、近県で発生した那須水害（1998年）、新潟水害（2004年、2011年）、新潟中越地震（2004年）、中越沖地震（2007年）などで現地活動や後方支援活動を行ってきました。

また、普段は防災啓蒙活動として、各種防災訓練の支援や講話、赤十字普及活動に協力などをさせていただいています。こうした経験を活かし、今回の震災では発生後数分のうちに団員間の連絡メールが発信され、活動を開始しました。最初は、日赤埼玉県支部における災害救護活動への支援活動です。

その後、今回の東日本大震災では、被災の規模も内容も従来の災害とは比べ物にならないことから、全国の赤十字ボランティアと被災した現地とを繋ぐ橋渡し役となるため、日赤本社ボランティアセンターを立ち上げました。センター運営は、他の支部の仲間と協同で行いました。

また、東北3県における日赤の様々な活動の支援とともに、奉仕団独自で福島県いわき市での瓦礫撤去作業、宮城県南三陸町での漁業支援活動など、地元社会福祉協議会が開設したボランティアセンター経由で活動したり、現場へ行けないメンバーとともに、街頭募金活動を行ったりしています。

全国の赤十字ボランティアと被災した現地とを繋ぐ橋渡し役となるボランティアセンターを立ち上げた

私たち災害や防災にかかわるボランティア団体の特徴として、災害時の活動ではメンバーの士気も高く、充実感もある一方、災害の起こらない平時にどれだけメンバーの士気を維持するのかが課題となってきました。今回このように私たちの活動を評価していただけたことで、これからの活動に大変よき励みとなりました。

最後に赤十字にはこんな言葉があります。

この言葉を大事にしながら、これからも東日本大震災に関する活動を続けるとともに、次に起こる災害に備えていきたいと思います。

『わたしたちの決意』

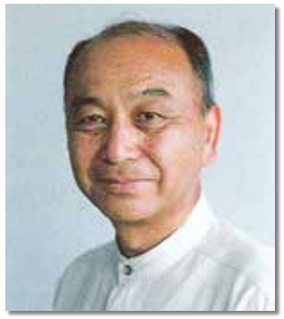
わたしたちは赤十字運動の担い手として、人道の実現のために、利己心と闘い、無関心に陥ることなく、人の痛みや苦しみに目を向け、常に想像力をもって行動します。

埼玉県赤十字災害救援奉仕団
委員長　浜田　恭弘

打ち合せ風景

情報を整理

日赤の活動を後方支援するボランティア



会長　田中　新正

特定非営利活動法人　碧い海の会

（大分県大分市）

大分県のボランティア団体で、石巻の墓地の瓦礫撤去を手作業で行った他、環境に優れた東北再生に向けて、被災地の土壌改良や廃材の有効利用の為に、竹炭を作る技術を伝える活動をされています。

●推薦者　社会福祉法人　大分市社会福祉協議会●

「私たちの決断」

多くの人々を一瞬にして悲しみと苦労のどん底に突き落とした津波の映像を見て、無力感を感じていたとき、仲間の年長者である三浦さんが「東北に行きましょう」と口を開きました。三浦さんは活動の先頭を走り出し、半年間被災地に留まって、私たちをリードしてきました。続いて足立さん、秋山さん、そして私、古城も短期間ではありますが、東北の仲間になりました。

「私たちの活動」

三浦さんの仙台での宿泊先がお寺さんだったこともあって、5月から7月まで石巻市で墓地のガレキ撤去に携わりました。すべてが、炎天下での手作業でした。8月から10月までは、宮城県女川町の個人ボランティア『だいじょうぶ屋』のテント村に宿泊して、出島という定期便の途絶えた島に渡り、ここでも墓石の復元などに努めました。お墓との付き合いの多い活動でありましたが、そのほか、無料お風呂屋さんの改築や個人住宅の泥出しなどの活動にも従事しました。

「復興を目指す炭焼き」

三浦さんは、去る2月再び東北に出発しました。今回は、今まで以上に『復興』を意識した活動にするため、『炭焼き』に取り組むことになりました。私たちの活動のノウハウを生かし、ガレキや枯死した木を原料に炭を作って熱源、脱臭、土壌改良などに利用しようという試みです。かつて東北の森は、世界に誇れる素晴らしい森でした。その森は、日本の伝統的な技術である炭焼きによって守られてきました。東北の方々とともに炭焼きに取り組み、東北にすばらしい環境を取り戻したい、と願っています。

このたびの受賞によって、私たちは今後の活動に向けて大きな勇気をいただきました。深く感謝申し上げます。

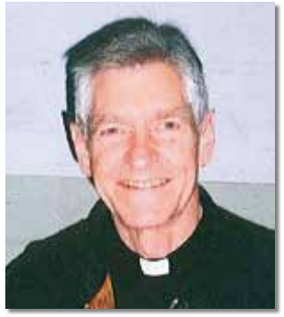
特定非営利活動法人　碧い海の会
事務局長　古城　修一

竹炭を作る炭焼き小屋

お墓の復元作業

出島での作業

墓地の瓦礫撤去を行った


理事長　ジョン・シーランド

特定非営利活動法人　セカンドハーベスト名古屋

（愛知県名古屋市東区）

規格外や賞味期限の近い商品を生活困窮者に贈る活動をしていましたが、震災後、公的支援のなくなった仮設住宅へ、名古屋市民から味噌・しょうゆ等の調味料を寄付してもらい箱詰めし、「ごはん応援箱」と名付け1600世帯に届けました。

●推薦者　のわみ相談所●

震災直後の緊急支援が一段落した4月下旬、現地と今後の活動の在り方について相談した。強く指摘された事は、被災者が仮設住宅に入居した後の支援の必要性であった。一切の財産を失っている被災者が避難所を出て仮設住宅に入れば自立を迫られる。生計の目途が立たない彼等に、寄り添うような物心両面の支援が必要との意見を受けて「ごはん応援箱」の企画が生まれた。

しかし、何処でどうやって配るかの問題が発生した。仮設住宅は行政側の管理下にあり、勝手に配る事はできない。また、配るにしても公平の原則から全戸数に配る事が求められた。

名古屋からのオペレーションで、そういう問題を解決するのは難しく、調べた結果、宮城県亘理郡山元町では、震災以前からNPO法人亘理山元まちおこし振興会が活動しており、仮設住宅全1030世帯への配布を引き受けてもらえることができた。

〔支援活動内容〕

①仮設住宅入居者1世帯に一箱、入居後の生活に必要な食品を10kg相当詰め合わせる。

②「ごはん応援箱」には、箱毎に寄贈者の名前が記入されていて、事務局は何処の仮設住宅に何時配布されたか記録する。

しかし、名古屋で誰に呼びかけるか全く当てがなかった。まず、他のNPO団体等に呼びかけて、「なごや食卓応援隊」を結成し、推進母体とした。

そして、6月10日にNHKのTV番組に出演する事ができ、この放送を見て、120箱相当分の寄付を申し出られた方が現れ、第1回目の発送が可能となった。　8月9月と時間が経過すると共に、市民や団体などの提供者が増えて、当初の予定をはるかに上回る1601箱集まり、山元町の仮設住宅だけでなく、福島県新地町等にも贈ることができた。

受領された被災者が喜ばれたことに加えて、個人として支援出来なくなっていた、名古屋市民の方へプレゼントする機会を提供できた意味は大きい。

そして、生活に必用な食品を提供するという面に加えて、被災者の方に心の支援をするのが大きな役割になっている事がわかった。

新年からは「ごはん応援箱（おやつでいっぷく）」を始めた。心の支援を食べ物に託して贈る意味合いで、また被災者の方がくつろぐ機会を提供したいという思いを込めて、お茶とお菓子の詰合せとした。3月11日の1週間前に第1便を贈ることができた。

愛知県では、大きな規模で支援されている団体がいくつもある中で、ささやかな我々の活動を評価してくださったのは、望外の喜びです。心から感謝申し上げます。

特定非営利活動法人セカンドハーベスト名古屋
理事　事務局長　本岡　俊郎

山元町での配布

山元町で受けとった人の笑顔

生活に必要な食品を詰め合わせた「ごはん応援箱」を前に

寄贈者の名前の入ったごはん応援箱を手に

名古屋での箱詰め作業

代表　鈴木　邦和

UT-Aid　東大－東北復興エイド

（東京都目黒区）

東大OBら社会人からの資金的援助をもとに、大学生が1,000円で参加できるボランティアプログラムを実施。東大生を中心とした合計1,000名以上を毎週末石巻、気仙沼などに派遣し、現地で瓦礫撤去やヘドロの除去作業や支援物資の仕分けに従事しました。また被災地の中高生の学習支援ボランティアなども行っています。

●推薦者　東京大学教養学部　高橋　喜博●

UT-Aidは、「大学生に対して、金銭面でも日程面でもハードルの低いボランティアを提供する」ということをコンセプトに、東京大学の学生を中心に結成された団体です。

運営は学生が中心となって、プログラム設計からまだ混乱が続く現地の受け入れ先との交渉、移動手段の確保、そして、部隊長として毎週の現地訪問などの活動をして来ました。

また、そんな学生の思いを支援して下さる社会人や企業の方々が、バス代などの資金援助や活動に対するアドバイスを下さっています。

これによりUT-Aidは、参加費1,000円の金曜日夜発翌日土曜日夜帰りのボランティアを2011年6月末から2012年3月現在までほぼ毎週末実施し、総計で1,000名以上の学生ボランティアが現地で瓦礫撤去、ヘドロ除去、生業復興支援などを行ってきました。

現地の方々からは、「毎週末東京の学生がくるのを楽しみにしている」「東京の若い人たちに被災地の実情を少しでも知ってもらいたい」と言っていただいています。

また、参加した学生からは、「日程や費用的にもとても参加しやすく、自分の中でのきっかけになった」、「テレビで見た被災地と実際に見た被災地では全然違う。震災についてしっかり考えるきっかけになった」、「被災者の方々の復興に向けた力強い眼差しを見て、いい意味でショックを受けた。自分に出来ることがないのか、探していきたい」という声が聞かれました。

側溝のヘドロ除去作業

総計で1,000名以上の学生ボランティアが参加した

学習支援も行った

今後は、単純労働力としての派遣だけでなく、細かく分かれていく被災地のニーズにも応えていきたいと考えています。具体的には、学生の手によって東北の食材をプロデュースするプロジェクトを被災地の農家の方と連携して進めたり、首都圏の大学生による被災地学生への継続した添削指導を行うプロジェクトも進めたりしています。

世間では、「ボランティアの需要はもう存在しない」、「被災者の自立を妨げる」という声を聞く時もあります。確かに上記の通り全体的に見ればボランティアの需要は減っているのが事実ですが、私たちが毎週現地に行って目にしている石巻や気仙沼、そこで接している方々は毎週のボランティアを確かに必要としています。それは「被災地」という「全体」の議論では決して語られないと思います。

今後も、被災地の方々が一日でも早く仕事を開始できるようにUT-Aidではボランティアを派遣し続けます。そして、参加した東京の学生が実際に現地に行って被災地の状況を自分の目で見る事で、少しでも多くの若い世代が、今回の震災を「自分事」として捉えて、問題意識を持ってもらえれば幸いです。

UT-Aid　代表　鈴木　邦和

復興支援　清掃活動

理事長　西岡　正

災害復興支援コーディネーター　蓮笑
（宮城県多賀城市）

復興支援団体として多賀城、東松島、石巻で避難所の運営支援やボランティアのサポートをしました。また被災者8000人に対して、物資支援のコーディネーション等多岐にわたる活動を展開されています。

●推薦者　永沢　正輝●

この度、公益財団法人社会貢献支援財団様より平成24年度「東日本大震災における貢献者表彰」を前身団体である災害復興支援コーディネーター蓮笑として、受賞させて頂いたことに恥じぬよう活動を継続し社会貢献を通じ、より良い未来の実現に邁進していきたいと思います。

私は東日本大震災発生後2011年3月24日に宮城県塩釜市へ一般ボランティアとして2週間の予定で現地入りし、津波到達地域のヘドロ出しや瓦礫の撤去作業を行っていました、その後多賀城市へ活動場所を移し、同じ志を持つ仲間と出会い任意団体を発足し、必要な支援を必要な場所へ出来る限り行うことを心に決めました。

当初多賀城市での活動は、指定避難所の多賀城市文化センター宿泊ボランティアとして、館内ボランティアの組織づくり、水・食料及び生活必要物資調達、自転車修理や避難所・応急仮設住宅のメンタルケア支援、遠方からの支援コーディネートを行いながら他の被災地域で活動をする団体と連絡を取り合い情報の共有を図りました。

被災地域の場所場所で必要とされる支援は異なり、どの地域にも共通していたことが避難所に支援が偏っていたことです。その中で石巻市の自宅で、避難を余儀なくされている被災者へ支援が行き届いておらず今日、明日の食糧や水の調達が出来ない地区があり、緊急性が有ると判断し、物資支援に力を入れ述べ約水200ｔ、約25,000食の食糧の支援コーディネートを行い、その他生活必要品を全国に呼びかけ物資調達配送の支援を行ってきました。

企業のCSR活動のコーディネートを行う

調達したゲーム機をプレゼント

生命を維持するための支援はもちろんのこと、人と人の触れ合いから生まれてくる安心感は笑顔を生むこと、そしてこのような状態で他者からの支援を受けることで、次に何か災害等起こった時には、「いまは支援を貰っている私たちが、支援を返したい気持ちになっている」と殆どの方が口を揃えて言ってくれ、想いは伝わっているのだと感じました。

2012年7月現在も東日本大震災被災地では精神的ダメージのケア、産業・雇用の創出、地域社会コミュニティー再構築・活性化、若者の人口流出による高齢化問題等、多くの支援・政策が必要とされていています。

私たちＮＰＯ法人蓮笑は、いままで「必要な物資や支援を必要としている人や地域に適切な方法で届ける」を心がけ、支援者の想いを伝えることで笑顔になってもらうことを目的として活動してきました、今後も支援ニーズに合わせ、「物質的な豊かさよりも心の豊かさ」を求め活動を行い次世代へ社会貢献活動の啓発を行えればと思います。

NPO法人蓮笑
理事長　西岡　正

被災地へ届ける車を受領した時の様子

避難所の子どもたちとイベント参加

物資配布

理事長　川端　秀明

一般社団法人　みんなのとしょかん

（栃木県足利市）

支援物資を届けた被災地から、本がほしいという要望に応えるため「みんなのとしょかん」を立ち上げ、企業などの協力を得て、石巻や亘理町などの仮設住宅やコミュニティなどに仮設の図書館を設立する活動をされています。

●推薦者　株式会社　プランニングインターナショナル●

この度はこのような賞をいただくことが出来て、本当にありがたく思っております。自分たちの活動を誰かに知っていただいた上に、評価して頂けることはやはり嬉しいものです。とは言え、活動はまだ道半ばですので、これを励みに更に努力していきたいと思っております。

今回の東日本大震災が起こった際、支援に役立つ技術を持っているわけでもなく、特に資金に余裕があるわけでもない私でしたが、とにかく支援がしたいとの思いだけで、ろくな計画も立てず、預金を引き出し、食料などの支援物資を購入し、被災地に向かいました。

しかしながら、無計画になけなしの預金で購入した物資は、ものの2分も経たないうちにすべて配り終えてしまい、自分の無力さをただ痛感させられただけでした。

その際に被災者の方から「街を見ていても気が滅入ってしまう。何か気分転換になるものがあれば」との声を聞き、はじめたのが被災地に図書館を作る、このプロジェクトでした。ただ、本を支援するだけではあっという間に無くなってしまいます。

そこで図書館での貸し出し、という形式をとることで限られた数量の本を効率よく支援できる仕組みを構築するとともに、必要となる本棚や管理備品も提供することで避難されている方が無理なく、自分たちで管理できるようにさせて頂きました。

当初は被災者の気分転換ということを主な目的として活動していましたが、時期がたつにつれ仮設住宅に移り住んだものの、隣近所とのコミュニケーションも取りづらい中で、図書館という公共性のあるツールを使うことで「避難されている地域の皆様のコミュニティを醸成する」ことが加わってきました。

中には、自治会の発足もままならない状況の中、図書館を管理するために結成したチームが、いつしかその仮設住宅エリアの住民の中心的なチームとなり、自主的に住民名簿なども作成し、コミュニケーションの充足を図るだけでなく、そこで暮らす住民が自主的に地域事業を企画し、多くの方に参加していただけるまでに発展した地域もできました。

現在は宮城県石巻市や東松島市、岩手県大船渡市などに計10か所の図書館を設置することが出来ました。2年目となる3月12日には、石巻の中心市街地に地域のコミュニティの醸成を支援するための図書館も設置することが出来ました。また東松島市などの図書館では地域の自立支援の推進のため、パソコン教室や創業支援セミナーなども開催しています。

被災地を取り巻く状況は厳しく、地域の活性化もままならない状況ではありますが、今後も地域の方と共に必要とされる居場所づくりを進めていきたいと思います。

一般社団法人みんなのとしょかん
理事長　川端　秀明

一角には子どもが遊べるスペースも

石巻センター館

公民館に設置したとしょかん　石巻市河北

明るい外観

代表取締役社長　井上　雅博

ヤフー株式会社

（東京都港区赤坂）

震災直後から現在まで、インターネットサービスを活用した緊急支援や復興支援、募金サイトの開設などを実施。また被災地の情報提供に加え、安否確認や避難場所、炊き出しマップ等の情報を地域ごとに掲載する他、ボランティアの方への情報提供を行う等により復興に貢献されました。

●推薦者　山田　泰久●

東日本再震災で、被災された方、そのご家族・親戚・友人の方などが大きな災害にあわれてしまった方々に、あらためてお見舞い申し上げます。

復旧や復興に継続的に関わっている方々を、Yahoo! JAPANとしては引き続き応援していきたいと考えています。

Yahoo! JAPANでは3月11日の震災発生後すぐにプロジェクトを立ち上げました。被災者や被災地の情報を必要としている方々のために、とにかくできることをどんどんやっていこうと、セミナールームを1つ潰してテレビ、ラジオ、PC端末を持ち込み、24時間体制の作業が続きました。

まず被災状況などを集約するページの立ち上げとインターネット募金を開始しました。募金は2004年の新潟県中越地震をきっかけにネット募金の仕組みを作っていましたので、その日のうちに緊急募金を実施、1週間で10億円にのぼる寄付が皆様から寄せられました。

また、復興支援情報や避難所やライフラインの情報をまとめた被災地別支援情報のページを設けたり、電力需給の不安が高まれば、ひと目で電力状況がわかる「電気予報」を作り、節電要請が出ている間はトップページに表示するなど、正確な情報を伝えることに注力しました。

また一方でインフラ面の取り組みもありました。被災県の自治体などのウェブサイトの多くがアクセスし難い状況にありましたので、ネットワーク技術を活用して、緊急避難的にキャッシュサイトを作り、各自治体が発信する情報を必要としている方々が、ちゃんと閲覧できるようにしました。インターネットポータル事業者としてのネットワーク環境や技術が活かせたところです。

未曾有の震災で、Yahoo! JAPANとしても手探りで必要とされている情報を見極めながら、インターネットだからこそできることがきっとあると信じ、全力で取り組んできました。

その結果として、3月の震災を契機に、インターネットのメディアとしての信頼度や価値が飛躍的に高まったという調査報告も出ています。震災を機に、インターネットの使い方が変わったというような人も多いと聞きます。これは個人としても非常に嬉しいことでした。普段あまりインターネットを使わない方などにとっても、こういう時に頼りになるんだな、役に立つんだな、などと感じていただくことができたのだとしたら嬉しく思います。

震災から1年。復興には長い月日がかかりますが、インターネットを活用した産業復興と今後の防災に役立つことを軸にこれからも全力で取り組んでまいります。

ヤフー株式会社
代表取締役社長　井上　雅博

復興支援のページ

震災タスクフォース作業風景

地震直後、トピックスの青空更新を試みる

阿部　久
（64歳／青森県青森市）

阿部　恵美
（57歳／青森県青森市）

石巻の出身で、青森で鮮魚卸の会社を営む中途失明者の久さんは、震災後、恵美さんと共に石巻市の10か所以上への避難物資を届けられるとともに、漁船を流された漁師へ大小合わせて40隻余りの中古船を斡旋。故郷の復興を願い支援を続けられました。

●推薦者　川野　楠己●

昼食後のコーヒータイムに突然の大地震。揺れが収まると同時に、息子のとっさの判断で、津波警報を聞く前に、妻の実家のある高台へすぐさま非難しました。

その時は、まさか自分の家が、会社が、町が津波に呑み込まれるとは思いもしませんでした。盲目の私にも、これはただ事ではないなと感じました。

翌朝、被害が甚大であることに愕然としました。余震が続く中、携帯も繋がらず、食料もなく、車中でただただ寒さに震え、なす術がありませんでした。

しかし、せっかく生かされた命、このままで終わってしまってたまるか！このまま終わらせたくはありませんでした。

とにかく、このまま石巻にいてもどうしようもないと思い、本社のある青森に行くことにしました。山形方面へ行けば携帯は通じるだろう。ガソリンも無く山の中は雪が降り続いており、三人の心が折れそうだった中、読みは当たりました。古川から鳴子へ抜け山形をめがけ車を走らせている途中、携帯の音が鳴り響き、気持ちは一変して気力がわきあがりました。

ガス欠寸前で、新庄のホテルで一泊することにしました。四日ぶりの温かい食事と暖かい部屋、温かい風呂。今までは、これが当たり前だと思っていました。当たり前だと思っていた生活が当たり前ではなくなった。涙があふれ自分たちだけが、これでよいのだろうか？自問自答し、何とかしなければいけないと思いました。

石巻の状況

青森へ到着後、まずは思いつくまま、少しでも早く石巻へ水や食料を届けたいと思い、さまざまな物資を積み込み4tトラックと大型トラックを走らせました。やっとの苦労で衛星電話を2台確保し、石巻の状況把握や避難所との連絡に大活躍しました。

大きな避難所には、物資が届きつつありましたが、まだ物資が行き届いていない地区もあったので、家に取り残され孤立した家々を周り食料を届けました。

私にできる当たり前の事をしたと思っています。

あれから一年も過ぎたというのに復旧復興とはなんぞや！恨みを言う訳ではありませんが、情報がすべての世の中で、やはりどう頑張ってみても目が見えないということがハンデになり、勉強不足もありますが、皆より一歩も二歩も出遅れる為、助成金や補助金を上手に取り入れることができず、とてもやるせない気持ちでした。

しかし、こんな私に勇気を与えて下さった、社会貢献支援財団の方々、推薦者である川野氏には、感謝の気持ちでいっぱいです。

この受賞を糧に少しでも復興の励みになるよう努力します。目は見えずとも明日に向かって前進あるのみです。ありがとうございました。

阿部　久

黒岩　和穂（61歳／高知県安芸市）

高知県の自衛隊OBが集う隊友会から被災地に石巻や気仙沼、岩沼でのボランティア活動に参加し、全国から集まった自衛隊OBによるボランティア活動の指導的役割を果たしました。また鎮魂のため四国巡礼し、ご朱印掛け軸を気仙沼と石巻の市役所に寄贈されました。

●推薦者　公益社団法人　隊友会●

私は、常日頃から『生かされて生きる』を座右の銘の根本とし、人生の糧としております。この事から“自分が今あるのは、自衛隊及び社会（国民）のお陰である何時かそのご恩に報いる活動を行いたい”と心に留めていました。

この度の東日本大震災に際し、隊友会がいずれ防災ボランティア活動を行なうとの思いでその準備状況の推移を見守るとともに、私自身の活動できる期間を3ヶ月としておりましたので、食料、水、衣類、ガスコンロ、LPG,等々準備しておりました。

そして、隊友会から五月連休明けから活動を行うとの情報を得、早い時期から、活動の全期間に参加したいとの希望を告げておりましたところ、隊友会本部から希望どおり意志をとおして頂き、全期間に亘る参加が出来ました。

隊友会としての組織的活動は、約2ヶ月に亘り組織的活動終了以降は、個人で17日間支援活動をしました。

現地でのボランティア活動は勿論、全国各地から参集する新たな隊友会ボランティアグループからの問い合わせに等に対し、現地生活やボランティア活動上の準備や心構えなどを、説明する等効果的に活動出来るよう努めてきました。

また、隊友会としての組織的活動が終了した後も、17日間自ら気仙沼市に残り、ボランティアセンターの一員として資材の整備、貸し出し、それまでの現場経験を生かし、ボランティアの方々への指導、人員輸送に従事させて頂きました。

また、宮城県でのボランティア活動を終了後は、郷里高知県に戻り、四国霊場を巡り震災で亡くなられた方々へご供養のため巡礼を行い、御朱印掛け軸を寄贈させて頂きました。

（活動の内容）

1.　現地での隊友会組織としてのボランティア活動

5月9日（月）～24日（火）までの間石巻地区、5月26日（木）～6月10日（金）までの間気仙沼地区及び6月12日（日）～27日（月）までの間岩沼地区において、民家内外の泥土の排除、家具の搬出、後片付け、瓦礫の撤去等一般住宅での活動の他、旅館での約3,000枚に及ぶ皿の泥落し、ビニールハウスの損壊に伴う散逸したビニールの回収、畑地表面土層の排除、アルバム等記念物品の清掃、更には漁協コンテナの撤去等広範囲に及ぶ活動を連続して行ないました。

2.　隊友会組織活動後のボランティア活動

6月29日（水）～7月15日（金）までの間気仙沼ボランティアセンターにおいて、センターの一員として資材版にて資材の整備、貸し出し、オリエンテーション時ボランティアの方々への指導、ボランティアの人員輸送等の支援。

義援金支援（7月17日（火）気仙沼社協から感謝状受領）

3.　震災で亡くなられた方々へのボランティア活動（供養の巡礼）

8月22日（月）～9月13日（火）四国八十八カ所及び高野山奥の院巡礼

9月29日（木）～10月11日（火）岩沼復興状況視察、石巻市、気仙沼市へ御朱印掛け軸寄贈、気仙沼市ボランティアセンターへ激励ボランティア、地元市民の気仙沼魚市場での復興イベント。

この経験から、いずれは私どもの県にも地震災害が発生するであろう事から、生きているうちに発生したならば多いに役立てると考えております。

ボランティア活動終了後同郷の友人から、自分達の代わりに行ってくれたと感謝されております。また、彼等に活動当時の悲惨な状況や経験を語り継いでおります。

今後の展望という事ではありませんが、「過去となられた方（被災して亡くなられた）」「現在の方（被災され助かった方）」は、この度のボランティアに於いて僅かですが恩返しできたのではと考えています。しかし「未来の方（未来を背負って生きていく少年や少女）」にはまだ終わってなく、これから支援できる事はないか思案中です。

その中であの陸前高田の一本松の勇姿を残せないものかと願っています。

この町を必死になって守ろうとしたあの松の勇姿に、鳥肌が立つ程の感動を覚えている昨今です。

私は、命のボーダーラインを70歳として、それまでは何らかの形で世の中に役立てていこうと考えております。その一環として、現在地元で高知県の出先機関福祉保健所の保健師と調整しながら、肝炎患者の方々へ役に立てるよう奉仕活動に努めています。

宮城県岩沼市での活動状況を平成23年6月26日サンケイスポーツに掲載して頂きました。この時の写真が下記ＵＲＬで見る事が出来ます。（左一番手前が私です）。紙面上では白黒でした。

http://www.sanspo.com/shakai/photos/110626/shc1106261119000-p1.htm

最後になりましたが、この賞へ推薦して頂いた隊友会本部は勿論ですが、愚輩のような者を取り上げて下さいました社会貢献支援財団の方々に心から感謝致しますとともに、心からお礼を申し上げます。

これを機に、自信を持って益々奉仕活動につとめる所存で居ります。

また、副賞につきましては、全ての金額を現在奉仕活動しております高知県の出先機関福祉保健所と、安芸市役所等々市民のために使って頂くよう考えております。

ほんとに有り難う御座いました。

チリのボランティアと共に

震災で亡くなられた方のために四国を巡礼

岩沼市での作業

大谷　哲範（51歳／山形県山形市）

ミュージシャンでカウンセラーでもある大谷さんは、石巻や亘理町等で炊き出しや物資の支援を継続的に行う他、子供達へクリスマスプレゼントを贈るプロジェクトや、被災者やボランティアへのカウンセリング等の支援も続けられています。

●推薦者　松島　裕●

日々の活動を振り返ることはあっても、このように改まってこの一年への想いを文章で表現するのは初めてです。この機会を与えていただいたことに感謝します。

私達は、カウンセラー、セラピストが中心となり、山形地域の対人援助、コミュニティーの再生を目的に活動をしてきました。その基盤があったからこそ、震災当日から現在までの活動が可能であったと自負しております。

でも、こんなに継続が大変なことだとは！

初心を忘れずに現在を生きることに、こんなにエネルギーをつかうものだとは！

すれ違う思いを持つ人々と、時を共に過ごすことが、こんなにつらいとは！

「震災当日はどうでしたか？」と、都会からやってきたボランティア。

「さあ語ってください。あなたの心の内側を」と、優しい笑みを浮かべたカウンセラー。

「もしよろしければ、ご家族を亡くされた時のお気持ちを」後ろにカメラを控えた、マイクを持った手が語りかける。

温度差という簡単な言葉で括られた、見えないベールの両側を行き来する現場での日々。

それは、虚無という内側と、風化という外側の現在進行。

決して埋まらないかのように思われる二項対立の隙間。

山元町ではライブも行った

山形というHOTで静かな「準被災地」は、14,000人の避難者と、継続不可欠な隣県津波災害地への支援が叫ばれる中、低迷する経済状況による息切れと、無関心が混在しています。

政治的解決に、まだ期待をよせますか？

失望に色濃く被われた東北地方の一次、二次被災地に本当に必要なのは物質文明、拝金主義に基づいた「論理的手法」などではないのでしょう。

「俺達は、戦後あの焼跡で、リンゴの唄をくちずさみながら元気だったよ。新しい世の中を作ろうという、俺達が作るしかない、という希望に燃えていたんだ」

もうすぐ90歳になる父の言葉です。

活動の合間に

大谷さんはカウンセラーとして活躍している

物資支援を行った

石見　喜三郎（69歳／東京都立川市）

中越地震でのボランティアの経験を活かし、いわき市や石巻市でボランティアとして支援活動に参加。牡鹿半島を支援する会を立ち上げ、被災者の要望を聞きながら物資の調達をされ、被災者へお餅などを220世帯に届けられました。

●推薦者　柴崎　治生●

牡鹿半島と関わって10ヶ月

この度、柴崎治生氏にご推薦を頂き貴財団の「東日本大震災における貢献者表彰」を受賞するが出来ましたことは、この上ない喜びであると同時に皆様方に感謝の気持ちで一杯です。

私は、昨年の4月末から一人で北茨城市、いわき市、石巻市をヒヤリングした結果、支援先を石巻市に決め、5月は石巻市街地で2、30代の若いボランティアの仲間と一緒に、瓦礫の処理のお手伝いをしました。

6月からは、牡鹿半島へ通っていましたが、7月末、数人の知人から一緒に支援活動をしようとの申し出が有りました。現在、仲間は十数人に増え、私の牡鹿半島での滞在日数は、延べで110日位になります。

私が牡鹿半島へ入った当初は、津波の傷跡が生々しく、瓦礫があちこちに置き去りにされていました。一方、被災をされた人からは、将来の展望等を語れるような余裕は、全く感じ取れませんでした。焚き火を囲みながら、よもやま話をしていました。住まいや生活の糧の漁船、養殖設備の全てを津波に浚われ、この先、如何したら良いものかと不安が一杯の毎日だったのだろうと思いました。

私が支援先に選んだ牡鹿半島は、市の中心地から離れていて支援の手の届き辛い地域です。この地の復興状況を見れば、宮城県の復興の速度が、判るはずだと思いました。

我々はこの地で顔の見える、心の温かみの伝わる支援をしようと立ち上がりました。

これまでの、主な活動を列記いたします。

1.　2011.7.15.牡鹿臨時保育所の開所にあたり、園児（35）にお土産を贈呈（マグカップ、巾着袋、レジャーシート、アンパンマンのお菓子）

2.　2011.10.1.親子紙飛行機大会、大原小学校（生徒、父兄で60名）

紙飛行機キット、昼食弁当

２ｔトラックに積まれたお米や野菜

「お歳暮」を贈った時の様子

サヨリ捕獲網の修理作業

小渕浜のワカメの養殖作業

小渕浜の漁師　牡蠣の原版投入

給分浜の牡蠣養殖の共同作業

3.　2011.12.4,5仮設の方々（220名）に正月用のお歳暮贈呈（米（旧川口町武道窪の農家の支援）、餅、立川産野菜）

4.　2012.1.11.牡鹿半島の保、小、中の子供にお年玉を届ける（210名）

我々の会は、個人の方々からの寄付金と募金活動で頂いたお金で運営されています。

最新のニュースを書きます。

其の1.　牡鹿半島の小渕浜は今、ワカメの収穫で賑わい出しています。震災後、初めての大きな収入源です。漁師は、朝早くから沖へ出てワカメを舟一杯に積んで来ます。陸では、男性に混じって多くの女性が、後処理を手伝います。この作業は4月下中まで続きます。このようにして一歩一歩復興が、進むことと思います。

其の2.　立川市には、宮城県から9世帯14人の方々避難されて来ています。個人情報保護法の壁の厚さの為、中々連絡の取れなかったかた其の方の三人とやっと連絡が取れました。

偶々、私が牡鹿半島にいる時（3/2、3）、其の中のお二人から電話を頂きました。今日、市役所から我々の会からの手紙が届いたので嬉しくて電話したとのことです。其の方は南三陸町で被災し79才のご主人は未だ行方不明だそうです。早速、私は南三陸町へ行き地元のワカメとめかぶを送り、住んでいた周りの写真を一杯撮って来ました。近いうちに其の方に届けようと思っています。

私はこの電話を受けた時、活動をして来て良かったと思い、又、一つ新たな人との絆が出来たと嬉しくなりました。現地の支援と同じ位、立川市に居る避難者の支援が大事である事を改めて感じました。

其の3.　4、5月には家族の記念写真を撮って額に入れて差し上げようと用意を始めました。多くの家族が津波で大事にしていた家族の写真を流されてしまいました。

頂いたお金は、今後の支援活動に有難く使わせて頂き、被災者と共に感謝いたしたいと思います。

親子紙飛行機大会

石巻市市街地　溜った砂礫を土のうに詰める

地元立川産の野菜を被災地へ

Hendrik Hubert Maria Goncalo Lindelauf

（30歳／東京都東村山市）

ブラジル出身の東京学芸大学の留学生で、震災後、両親から帰国を勧められましたが日本に留まり、岩手県の大槌町で「ブラジル忍者」と名乗り、子供達に親しまれながらボランティア活動をされました。

●推薦者　母と学生の会時習学舎　関根　福子●

被災地の経験と感想

3月11日に東日本大震災が起きた時、私の人生も含め、全国の国民の人生が変わった。

特に当時、日本にいた外国人の人々が、原発に関する正しい情報を把握していなかったため、皆の心は辛い不安で染められた。

日本の政府が市民を安心させるため、わざと原子力発電力所の緊急事態と恐ろしい状況を隠しているではないだろうかという噂まで流れていた。

一方私の国を含め、大げさなニュースが、世界中でたくさん報道された。

そんな状況下で、多くの外国人は、自分自身が非難するためもしくは、自分の家族を安心させるために、帰国してしまった。

私も、酷いジレンマと闘った。私の父親、母親そして、姉が毎日連絡をくれ、その度に三人ともが泣きながら「帰って来い！」といつも頼んできた。そして、航空券まで買ってくれた。

私の母は、あまりのストレスと心配で一週間以上、一睡も眠れなかった。いつも電話で、「私の可愛い息子！帰ってください！」と言ってきた。生まれてから31年間、あそこまで切に「私の可愛い息子」と呼ばれたのは、初めてだと思う！！！（笑）。

酷いニュースが流れる度に、母の健康状態が悪化したので、母を落ち着かせるために、一時帰るかどうか、大変悩んだ。

しかし、私を快く歓迎してくれたこの国には、私がいつも困った時に、支えてくれた日本人の友達がいるし、なにより私は、子供のころからずっと日本のことが大好きなのだ。

だから、日本が一番救助を求めているときに、私が帰ったら、多分一生、自分を許せなくて後悔すると思った。だから、なにかせざるにはいられないと思い、被災地に入るのを決心した。

高い航空券を買ってくれたことは申し訳ないが、帰るのを断って、母に「この国と友達に、恩返しを出来る時期がやっと来た」と言った。

おそらく神様のおかげかもしれないが、私の家族が大変落ち着いて、私の気持ちを理解してくれた。

次の日、母がメールで「ヘンドリッキ、お母さんの我侭を許して下さい。今は逃げるときじゃない！自分の大好きな人達と、大好きな国のために戦ってくれ！！！何があっても、いつまでもあなたは我々（お父さんとお母さん）の誇りだ！」と励ましてくれた。

そうして、私も安心して、3月30日に津波の被害を大きく受けた、岩手県の大槌町に入った。

活動は、主にいくつかの避難所にいた子ども達に対応するものだったが、炊き出し、力仕事なども行った。

私はもともと子どもが好きで、時々近所の子ども達と遊んだりもし、また保育園で暫くバイトしたこともあるので、子ども達のために力を貸したかった。

子どもを支援する団体と被災地に入った時、避難所の人々は、ピリピリしていたが、予め心構えをしていた。被災地に入ったら、ストレスがたまっている人達に、きついことをいわれることも覚悟もしていた。

しかし、すぐに子ども達と仲良くして、いつも抱っこしていた。避難所の人々は「ごくろうさん！ありがとうございました！」といつも優しく挨拶をしてくれたので、非常に感動した。

さらに、炊き出し、物資分配のときに、皆は暴れずにちゃんと並んだり、必要な物資だけを貰ったりし、また学年の上子どもが下の子ども達に譲ったり、世話したりするのは、いまだに私の心に残っている素晴らしい光景だった。それだけ、団結力はとても凄まじかった。

私の活動は基本的に“人間を扱う”活動だったので、被災地にいればいるほど、少しずつ地元の人と絆を築いてきた。

四月ごろ、まだ自衛隊が逞しく頑張っていたが、周りの風景はやっぱり言葉で説明出来ないほど、壊滅的な風景だった。正に戦争の跡の風景だった。

余震はまだ暫く続いていた。余震が起きると、何人かの子どもに、異変があるのに気づいた。ただ、普通の子どもが持っている地震に対しての怖さだけではなく、神経質でトラウマが残っている反応であった。

私は長く被災地にいたので、積極的にコミュニティーに受け入れてもらえた結果、私はコミュニティーの一員という気持ちが、私の中から溢れてきた。

時々、用事のため一時的に東京に帰ったりしていたが、皆と別れたら、寂しさに負けて、すぐ被災地に戻った。

時間が経って、被災者が普段の生活に少しずつ戻るとともに、私と仲良くしていた子どもたちと地元の人が、津波のときの物語を各々打ち明けたりしてくれた。勿論、私も色々な事を、仲良くした人達に打ち明けた。

外国での経験があまりない日本人は多分、復興が物凄く遅いと思っているかもしれないが、私が被災地に入ってから、僅か3、4ヶ月だけで、あんなに早く変わったのは流石、日本だと思う。

自分の国と比較すると復興が物凄く早い。ブラジルにいる友達に、4月ごろ被災に遭った町の写真と7月ごろの同じ場所の写真を送ると、皆がびっくりして「ありえない！被災に遭った町がこんな早く復興するのはありえない！」と言われた。

私の父はオランダ人で、彼によると「オランダでのニュースも復興に関して、褒め言葉が多かった」と言った。そういう意味で日本はとても模範的な国だと思う。

でも、経済、復興の話などを別にして、今回の被災は、（良い意味で）皆のいい勉強になった。

電気の節約、困難な時の決断力、会ったこともない人達とお互いに励ます気持ち等。

嬉しい時に一緒に笑ったり、辛い時に一緒に泣いたりするのは、大事な勉強でそれぞれが人間として大きく成長したと思う。

勿論、私にとっても今までの人生で、一番大事でありがたい勉強になった。被災地へ行く前に、私は個人的な問題やジレンマなどで凄く悩んで、落ち込んだりしていた。頑張る気も段々なくなっていたが、被災地で家または大事な親戚などが流された人など、そもそも私より1,000倍ぐらい悩むはずの人々が沢山いて、私自身物凄く反省した。なぜなら、あれだけの状況にあっても、頑張りながら希望などを失っていなかった人達と沢山出会ったからだ。

今回の受賞を喜んで受けるが、正直に言えば、私が助けるよりも、子どもから大人至るまで、皆にパワーを貰って、私が助けられたと思う。被災者に「ヘンちゃん、頑張れ！！！」と励ましてもらった時、説明できないぐらいの感動と嬉しさのミックスが心に溢れた。

長い間「何で日本が好き？」と周りの人に聞かれたとき、私はちょっと迷って、実際に自分自身も何でこんなにこの国が好きか分からなかった。しかし、長く被災地にいて大槌町の人達と暮らしていたら、やはりこの国が好きというよりも、『この国にいる人達が好きだ』とやっと分かった。

皆は今も仮設住宅に入っているし、課題はまだ多い。皆はもとの生活に戻りつつあるが、時間が津波が残した傷を癒してくれる。多分、残るのはあの時の希望、絆、そして、どんな辛い時でも支え合う気持ちかもしれない。それは私の心からの願い。私は死ぬまで被災地の経験を忘れない。忘れたくもない。素晴らしい経験としていつまでも思い出す。

今年の夏にまた大槌町に行きたい。色々笑いながら、皆に暖かくハグしたいと思う。私の心には、皆がいつも一緒にいる。

感謝！！！感謝！！！感謝！！！

Muito obrigado a todos por tudo!!!

お祭りにも参加

ヘンちゃんに負けない！

頑張るぞ！

主に子どもたちのために活動した

折紙しています

大槌の様子に言葉を失った

日本男児に変身

松永　鎌矢（22歳／大分県中津市）

一年間大学を休学して大分県からボランティア活動のため宮城県の七ヶ浜町へ出向き、イベントを企画する等、被災地を活性化させる活動を半年間行い、現在も交流を続けています。

●推薦者　社会福祉法人　大分市社会福祉協議会●

私は大学を一年休学し、2011年6月から年末までの約半年間、宮城県七ヶ浜にて被災地支援活動を行ってきました。

現地では、名古屋のNPO法人レスキューストックヤードと共に活動をし、がれき撤去や喫茶店でのお茶出しや足湯を行っていました。

主な活動として、被災者のニーズを聞き、それを基にイベントの企画を運営しました。被災者とボランティアの交流を目的とした「バーベキュー大会」、在宅避難者への支援「芋煮会」、「クリスマスパーティー」、七ヶ浜町の漁師さんと共に「ボッケ祭り」などを行いました。

私自身、被災地でのボランティアは、初めての経験でした。普通の大学生をしていた私になにができるかわかりませんでしたが、なにか力になれないかと大分市社会福祉協議会に相談をして、ボランティア団体（NPO法人レスキューストックヤード）を紹介して頂き、団体のボランティアバスに応募してボランティアに行くことができました。

被災地のボランティアといえば、がれき撤去のイメージが強くありましたが、たくさんのニーズがありそれに応じた仕事があります。がれきの撤去だけでなく、遺留品の整理、仮設住宅集会場でのお茶出し、足湯などニーズや時間の経過によって仕事が変わっていきます。そのため力作業だけでなく、様々な仕事があり誰でもボランティアはできます。

七ヶ浜町のボランティアセンター

復興を願う花火

七ヶ浜　海岸の清掃

バーベキュー大会の企画もした

しかしニーズがあってのボランティアということは忘れてはいけないと思いました。これがしたいという事があっても、被災地に、そのニーズがなければ意味がありません。だからこそ被災地に、現在どのようなニーズがあるのか、しっかり調べてボランティアを行う必要があると感じました。

現地にて半年間支援活動を行う中で、たくさんの“支援のカタチ”を見てきました。

私と同じく現地という最前線で、支援活動を行う方がいます。その後方支援で、ボランティアが現地で活動するための車を送る方、ボランティアバスの運行資金を街頭で募る方、要するにボランティアのボランティアです。「現地にはいけないけど…」と物資や義援金を募って東北に届けている方などたくさんの“支援のカタチ”がありました。

3月11日で、東日本大震災から一年が経ちました。本当にみんなで助け合い、支え合った一年になったと思います。そして本当に大事なのは、ここからです。一年経ったとはいえ区切りがついたわけではありません。まだまだこれからも支援が必要です。1人1人ができることを、継続してやっていくことが大事だと感じました。

そして、七ヶ浜町でボランティア活動を行うことができたのも、家族、地元大分の友達、大分市社会福祉協議会さん、NPO法人レスキューストックヤードさん、活動中に出会ったボランティアさん、そして私を受け入れてくれた七ヶ浜町民の方々のお陰です。本当にありがとうございました。

クリスマスパーティーを進行中

七ヶ浜町への応援メッセージ

ピース！

ボランティアの方々とともに

岩井　慶次 （56歳／岐阜県恵那市）

防災士の資格を持ち、アマチュア無線にも精通していたことから、その技能を石巻市や大槌町でボランティアとして発揮しました。現在は地元の岐阜県恵那市で経験を活かした防災の仕組みづくりに取組まれています。

●推薦者　社会福祉法人　恵那市社会福祉協議会●

栄えある社会貢献者表彰の授与に際し、心より感謝を申し上げます。受賞を誇りに、防災士として培ってきた知識・技能と経験を活かし、「災害時死者0人の協働社会づくりを目指して」行政・社会福祉協議会・災害ボランティアの方々との連携を密に、生涯を通して「あせらず、あわてず・あきらめず」の精神で一歩づつ、防災アドバイザーとしての活動を探求していきたいと思っております。更に、災害時に救援側にまわれるような人づくりを目指し精進してまいる所存です。

ボランティア活動をしている仲間の励ましや、私のボランティア活動に理解と温かく見守ってくれた家内や子供達の協力があったからこそと感謝し、この栄ある受賞を共に慶びを分かち合いたいと思っています。

2005年「恵那市防災研究会」を結成。「地域防災ネット中部」の会長に就任。2011年3月11日の東日本大震災以前から、いつ起こるかわからない災害に備えるために、発生時の対応方法を研究し市民で知識や情報を共有できるよう恵那市防災研究会や「地域防災ネット中部」の会長として活動しています。

趣味のアマチュア無線を生かし、行政と災害応援協定を終結し、災害時の情報収集や市民への情報伝達を任務とし研鑽しています。

東日本大震災では、災害直後、地域防災ネット中部の会員とともに、宮城県石巻市へ向かい、多くのボランティアが必要と感じ、ボランティア希望者が被災地へ円滑に行けるよう、県に働きかけるなど尽力致しました。

石巻市でシャンプーのボランティア

また恵那市においても、市・社会福祉協議会、防災研究会と連携し、「市災害支援ボランティアセンター」を立ちあげ、多くの近隣ボランティアを被災地に送り出すことができた事は、日頃からの活動や顔の見える関係づくりによるものでした。

自身も、県災害ボランティア隊のボランティアリーダーとして岩手県大槌町や七ヶ浜町に向かい、被災した家屋の泥だし作業など、ボランティア活動を積極的に行い、被災地に寄り添うボランティア活躍をしてきました。

「災害時にボランティアセンターをいち早く立ち上げ、効率的、円滑的に運営するにはどうすればよいのか。災害が発生した時、どこで何を必要としているのかをしっかり把握し、そこにボランティアを派遣する仕組みを作っておくことが必要。日頃から各団体がネットワークを築いておくことが備えになる」と実感し、現地で得た教訓をもとに、さっそく、防災研究会で報告会を開き、住民に説明するなど行政とともに啓発活動を行ってきました。

・6月31日恵那市防災会議にて現地の模様を報告。

市が被災したときにどのように支援できるかなど課題の提議もしました。

防災士会岐阜県支部スキルアップ講座

・7月17日 恵那市自治連合会自治会長研修会にて災害時の自治会長の役割をテーマにパネルディスカッションのコーディネーターとして務めました。

・9月13日恵那市ボランティア連絡会　災害支援講演会にてパネルディスカッションのコーディネーターとして務めました。

その他、県域の活動として、各委員会に出向されています。

岐阜県地震防災フォーラムにパネリストとして参加し、活動内容の報告と今後に取り組みについて対談しました。

岐阜県自助実践200万人運動推進会議　委員

岐阜県震災対策検証委員会（東日本大震災）委員

岐阜県保育所等防災体制強化事業委託業務プロポーザル審査会　審査委員

岐阜県災害要援護者避難支援避難対策に関する補償制度検討委員会　委員

県内社会福祉協議会との共催による防災講演会。

また小中学校や地域防災団体等に東日本大震災の課題と教訓を広く講演活動をおこなっています。

・10月29日には岐阜市東長良中学校にてキャリアワークショップが開催され防災士の役割や被災地の模様を講話し、減災についてワークショップを実施しました。

災害に負けないためには、日頃の地域の絆づくりが大切と訴え、災害支援ボランティアの役割や継続的な支援と地元でできる後方支援、災害時における地域の連携とボランティアとしてできることなど、被災地へのボランティア活動を今後に役立てていけるよう多くの人々に伝えています。

また、会長を務める防災研究会では恵那市と協働事業を主催し、災害に対する正しい知識や技能を取得し、平時において地域の防災訓練・研修で活躍し救援救護活動を担う「恵那市防災リーダー」の養成を目的とした防災アカデミーを開催し多くの防災リーダーを育て、防災士の育成にもつなげてきました。

災害支援に関する住民の意識を継続し、広げていくための啓発活動を日々、意欲的に続けています。活動してきた行動がやがて防災文化の醸成になることを念願してやみません。

七ヶ浜町で瓦礫撤去

宮城県七ヶ浜町きずな館前恵那災害救援隊

岐阜県防災フェアーでの岩井さん

藤野　裕（44歳／広島県尾道市）

広島から自家用車で相馬市に入り、ボランティアグループと合流。その後は得意のＤＩＹのノウハウを活かし、山元町でボランティアセンターへの協力や住宅の汚泥撤去や修復にむけての活動に従事されました。

●推薦者　社会福祉法人　尾道市社会福祉協議会●

東日本大震災が発生したのは、私がスタッフとして勤務していた専門学校の学科再編成で受け持っていた学科がなくなり、営業部門への移動を告げられた直後で、社内での自分の存在理由が見いだせなくなっていた時だった。

テレビやネットで流れるめちゃめちゃになった家やビニールハウスなどの映像を見ているうちに、自分が現地に行って体を動かして片付けをすることで、自分自身の存在価値を再認識したかったのだと今になって思っている。

会社に休暇願いを提出したものの、経営陣に却下されたのをきっかけに退職することにした。

両親と息子の４人家族で生活していたが、急な退職と、被災地へどれだけの期間か決めずに行くことを、一番不安に感じていたのは中学２年生の息子だったと思う。「被災地へ片付けをしに行く」という大義名分はあるけれど、両親にも心配をさせ、不安になっている息子の面倒を押し付けてしまった。

結局１ヶ月余りの間、相馬市ではライフセーバーの方々が中心となって活動していたグループに混ぜてもらい、山元町では社会福祉協議会のボランティアセンターに、登録しての活動となった。

帰ってから就職活動を始めたけれど、年齢、社会情勢、能力、好みなどからスパッと決めることができず、何年か前からなんとなく考えていた父の生家で、焼き鳥屋を開くことを具体化させることにした。

全くの異業種への挑戦で悪戦苦闘していた時、ボランティアに行こうとしたとき相談をさせてもらった尾道市の社会福祉協議会からこの度の表彰への推薦を頂いた。

それまではボランティアに行ったこと、活動をしてきたことが、どこか「大義名分に包み込んだ自分探し」といった後ろめたさが強かったけれど、社会的に評価されたという事実で、少しだけ気持ちの整理ができてきたように思う。受賞が決まった時には嬉しかった。

今は自分の存在理由とか存在価値とか考えることなく、うまい焼き鳥で楽しい時を過ごしてもらうためのお店にする目標に真っ向から挑戦している。

自己完結で自分のことは自分でできる装備や物資を一通り車に積み込んで、ボランティアに向かったが、被災した現地の人たちから支えてもらったから１ヶ月過ごすことができた。

この受賞で貰った副賞の一部で、その恩返しができたらいいなと思う。

藤野さんが見た被災地の様子

広瀬　敏通（61歳／東京都荒川区）

自然学校のネットワークや災害救援活動での実績をもとに、震災後はRQ市民災害救援センターを組織、支援の届きにくい地域への緊急援助や総勢37,000人のボランティアの受け入れ体制の擁立や支援活動のマネジメントを行い、現在は災害教育センターを設立し活動されています。

●推薦者　東京農工大学　客員教授　福井　隆／東京農工大学　教授　千賀　裕太郎●

RQと私の取り組み

3.11直後に日本エコツーリズムセンターによって結成されたRQ市民災害救援センターは、昨年末までに延べ4万5千人のボランティアが宮城県北を中心に、8ヵ所のボランティアセンターなどの拠点で、約70におよぶ支援活動チームを作って多彩な活動を行ってきた。現在私はそれぞれの拠点が、長期的な支援をおこなうための地域団体化に移行しつつある中でそれらを支える一般社団法人RQ災害教育センターと日本エコツーリズムセンターの代表を務めている。

私は20代の十年間をアジア各地で、子どもを支援する個人NGOとして活動して来た。南インドで障害児孤児の自立を目指した村を何もない荒野の段階から開拓したのが最初で、1979年から80年に掛けてカンボジア難民を救援する国際ボランティアとして現地で働き、その後日本政府が現地に開設したJapan Medical Centerの運営を派遣専門家として、担当してきたのが最後の海外生活だった。このときの医師らとともに1982年に結成したのが「国際緊急援助隊」だ。私個人は同時に富士山麓でホールアース自然学校という活動を始め、それは現在、日本国内に3,700も生まれた自然学校の最初の1校となった。自分の組織を持つことで、阪神淡路大震災以降、国内海外の災害地でいち早く救援活動を行うチームを率いることが出来るようになった。活動に不可欠な資金は、自然学校の売り上げの一部を「ホールアース自然基金」として積み上げて毎回、100万から数百万円を支出して賄ってきた。

わが国は災害大国とも言われ、毎年のように悲惨な気象災害や地震災害が多発している。にもかかわらず、多くの人々は災害の実態に目を向けずにニュース映像でしか接しようとしない。

宮城大学生への調査では、実に被災地を災害後にボランティアやその他で見た学生は16％に過ぎない。この数字は私自身が、被災地に隣接した地域で調べた数字とも共通している。災害から学ぶ事のない人々の国がこの日本だ。

その一方で私は災害現場に立つことで多くの学びが生まれ、自身が成長する事実に着目している。災害現場に立った経験を持つ人は、後に遭遇する災害でも行動的で前向きな支援活動などに参加することが多い。こうした人々によって、災害に対してヒューマンで力強い社会にしていくことが出来ると思っている。

今回の受賞はこうした活動に活かさせていただくのと同時に、子どもや若者たちが災害から目を背ける事のないよう、今後もチャレンジを続けていきたい。

被災地での広瀬さん

牡蠣の株分け作業

写真洗浄のボランティア

撤去作業

撤去作業

避難所横での足場

折尾　仁（34歳／東京都目黒区）

多賀城市と石巻市に震災後すぐに支援物資をもって現地入りし、東京に戻りJin's Projectを設立。仮設住宅居住者のために様々な物資と心の支援を続けられています。

●推薦者　石巻商工会議所　佐藤　洋一●

「5月26日の事」

瓦礫撤去の為、宮城県石巻にいました。まだ自衛隊も、行方不明者の捜索をしていなかった場所で、作業をしていた時の事です。泥の中から、背中が見えました。

掘っていくと、うずくまったままの女性のご遺体ということが、分かりました。

仲間のひとりが「またでてきたな…」と呟きながら、ご遺体を引き上げたとき、そこにいた5人の空気が変わりました。女性の腕には子供が抱き抱えられていました。

「またでてきたな…」と言うぐらい、慣れてしまっている人たちでも、空気が変わってしまった理由とは…子供が震災後2ヶ月以上経ったとは思えない程、生きているような状態だったからです。

女性は波に流され、瓦礫にも、泥にも、もまれたにも関わらず、ボロボロになりながら、必死になって、子供を守ろうとした事が、容易に想像がつきます。

行政上、やむを得ず、二人を離さなければなりません。

でも、離そうとしても、母親は白骨化した腕で、子供を離しません。

人は、死んだら動かないという事ではなく、「死しても尚、子供を守っている」かのようでした。

僕はまだ分からない…そこにいた人たちが、どんな気持ちなのか?

痛みを感じることさえできない。

でも、色々と考えた結果、答えはひとつではないと思う。

石巻の時計は、今も14時46分を指しているところがあります…

まだ、あの時から時間が止まったままの人たち、あの時の親子のように、時間を失った人たちがいます。

そんな人たちの涙に触れ続ける限り、今の活動を続けていきたいと思います。

JIN'S PROJECTの活動

被災地の状況を確認する

支援活動を行った避難所

映画の上映会を開催した

中村　真菜美（26歳／宮城県石巻市）

大震災後、滞在していたコスタリカから帰国。４月頭初から石巻に入り、現地でのボランティアコーディネートの他、石巻で活動するボランティア団体の連携調整や、地域の催事のサポートなど個人ボランティアとして活動を続けられています。

●推薦者　一般社団法人　石巻災害復興支援協議会●

昨年の4月5日から宮城県石巻市に入り、ボランティア活動を始めてから約1年半が過ぎようとしている。至る所にあった瓦礫も片付き、ヘドロの臭いは消え、街には明かりが灯った。夢物語のように「いつかまた電気が通ったら…」「もし水道が通ったら…」と、話していた日々が懐かしく感じる。メディアを通して、被災地が復興していく姿が日々伝えられているが、果たしてそうなのか。目の前に在る現実とのギャップに、違和感を覚えることが多々ある。

あの日私は、中米の小国であるコスタリカにいた。15時間の時差があるため、東日本大震災発災時は夢の中だった。朝になりテレビをつけると、世界中のテレビ局が津波に飲み込まれていく日本各地の映像を繰り返し流し、各国の首脳たちが次々と声明を発表した。私の実家は茨城県で、家族や友人たちからは状況が落ち着くまで帰国しないよう言われ、しばらくの間は救援活動に動き出した仲間たちとのやり取りに明け暮れていた。そんな折、仲間がボランティアの派遣を新規で開始することを聞き、そのボランティアコーディネートをする為に急遽帰国した。

日本に着いて、まだ状況も分からぬままに聞き慣れない「石巻」という土地に入り、テント生活を送りながら活動を開始した。当初は炊き出しや物資配布、泥出しや瓦礫撤去などのコーディネートだった。当時、石巻専修大学に災害ボランティアセンターが設置され、そこに集う団体や個人が毎晩遅くまで集い、情報交換や次の対応について議論を重ねていた。そんな中、ちょうどGWの頃に地元の方から議長に指名され、その連絡会議の議事進行を何故か私が務めることになった。石巻では、複数の団体が協働する機会が多かったので、自然と私がその連携調整も取る機会が増えて行った。今年のGWまでちょうど一年間、議長を務めさせて頂いたが、その後も当時培った繋がりは現場で生かされている。

現在私は、仮設住宅の独居高齢者の訪問活動や2市1町合同で開催する「おらほの復興市～石巻・女川・東松島～」の事務局サポートをメインに活動中である。発災から1年半に渡り、ほぼ一歩もこの場所を出ることもなく、ずっと見届け続けて来た。私の仕事は、ここに在り続けることであり、伝えることであり、人と人とを繋ぐことであり、それは今でも変わっていない。ここから先、自分がどうこの場所に関わって行くことが出来るのか、2度目の冬を前にして正直答えは出ていない。

これまで、数えきれない程のボランティアがここに集い、それぞれが出来ることを持ち寄って、今日の日を迎えることが出来た。私はその中で、住民とボランティアの間で通訳をして来ただけだと思っている。お互いの想いが、少しでも良い形で通うように。今回の受賞は、そんな「ボランティア」と称される名も無き方々の代理として、そして今でも共に奮闘している仲間たちの代理としてお受けしたい。最後に、この度はこういった形で表彰を受けたことを大変感謝していると同時に、全ての方々に対しこの言葉を贈ります。「ご苦労さまでした。そして、ありがとう」

重機を使って作業中

自衛隊との連携

川開き　地元のイベントに参画

集まったボランティアの全体会

瓦礫の撤去作業

側溝を整備

今村　久美（32歳／東京都杉並区）

NPO法人カタリバの代表として、募金活動を行った後は、継続的な支援に向けて基金を設立。女川町との連携でコラボ・スクール「女川向学館」を設立し、避難所で生活する230名の小中学生に学習指導を続けられています。

●推薦者　山内　悠太●

この度は、栄えある賞をいただき、大変有難く思っております。皆様に、私たちが運営する放課後学校「コラボ・スクール」を紹介させていただきます。

私たちが立ち上げた「コラボ・スクール」は、被災地で勉強する場所を奪われた子どもたちに、学習指導をする放課後の学校です。全国から集まったご寄付で、震災で失業した元塾講師などの地元住民を雇用し、地元教育委員会やボランティアの方と協力して、子どもたちに学習環境を提供しています。

現在は、宮城県女川町の「女川向学館」と、岩手県大槌町の「大槌臨学舎」の2校舎を運営しています。

なぜ私たちは、東北に行こうと思ったか？もちろん、「可哀想な子どもたちのために何かしたい」という想いもありました。しかし、一番の動機は、「この被災地で、たくさんのものを失った子どもたちの中から、10年後に日本を支えるイノベーターが、生まれてきやすいのではないか？」と考えたからです。

たしかに、震災による悲しみは、子どもたちにとって、抗えない現実です。

私が昨年度、大槌臨学舎で受けもっていたクラスでも、26人中7人の生徒が親を失いました。ふとしたことで、家族の話題になると、目に涙を浮かべる子どもが、今もいます。

しかしその悲しみに向き合うのが、彼らの課題でもあります。この現実を受け入れて、自分自身で乗り越えていく。そのために私たち大人ができるのは、彼らに寄り添って、“悲しみ”を“強さ”に変えるための学習機会をつくってあげることです。

「何をやろうとしても、力が出ない・・」震災後は、そんな風に落ち込んだ子どももいました。彼らが、勉強を通じて「できることが増えた！」「昨日の自分より、一歩前に進んだ」そう実感することで、意欲が回復してきています。

学ぶことが、心のケアにもなっているんだと感じます。

また、私が昨年度在籍していた大槌臨学舎で、親御さんたちから喜ばれていることがあります。それは全国からボランティアさんが1週間単位で来てくれて、代わるがわる勉強をサポートしてくれることです。生徒たちは、「はじめまして」「ありがとう」、そして「さようなら」を、たぶん日本で一番多く言う子どもでしょう。

コミュニケーション能力は、確実に育っているでしょうし、なにより、震災前なら出会うことのなかった職業の方々、大学生たちと勉強の合間に話すことで、これまでは身近でなかった、広い世界を見通しながら、大きな未来を、思い描きやすい環境が整ってきています。

子どもたちが、震災の悲しみを乗り越えるのに伴走し、かつては与えられなかったチャンスを提供することで、感謝の気持ち

大槌の中学生と

と明るさ、そして力強さを持って、新しいことに挑戦する人が、この地から生まれるだろう。そんな思いは、彼らの語ってくれる将来の夢を聞いて、強くなりつつあります。

「避難所でやさしく励ましてくれた看護師さんみたいに、将来なりたい」「福祉の仕事でお年寄りの方々のために働きたい」「前は保育士になりたかったけど、病院で働く姿がかっこよくて、震災後、薬剤師を目指すことにしました」「女川町はこのままではいけない。自分が女川町を支えられる人間になりたい」「ここで集中して勉強して、消防士になる夢を叶えたい」

日本中と比較しても、公共心を持って職業選択を目指す子どもたちが、本当に多くいます。私のクラスでも、看護師志望が半分で、福祉の仕事が1/4、自衛隊希望者も2人います。“主体性”そして“公共心”をもった子どもたちが育っていること。この事実は、とてつもない被害と悲しみをもたらした震災の「希望」とも言える一面かもしれません。

実はこれを始めた当時、「この活動は3年間をめどに終わりにしてもよいのではないか」と思っていました。子どもたちが奪われた“学ぶ場”を確保して、失業した地元の塾の先生たちに、“雇用”を提供する。地元の方々の独立を支援して、私たちは徐々に手を引いていけばよいのではないか、と。

しかし今、生徒たちが震災という悲しい体験を“チャンス”に変え、たくましく育っているのを目の当たりにするなかで、この1年間、信じてきたことが、少しずつ現実へとなりつつある手ごたえを感じています。資金や人材など、現実的な問題はたくさんありますが、私は、このコラボ・スクールを3年以上続けたい。今は、そう思っています。

今回の栄誉ある受賞を機に、さらに精進してまいりたいと思います。

今後ともコラボ・スクールをどうぞ宜しくお願いいたします。

放課後学校「コラボ・スクール」を設立し、子どもたちに学ぶ場を提供している今村さん

加藤　秀視（35歳／栃木県日光市）

震災後直ちに大量の支援物資と共に宮城県の南三陸町に入り、炊き出しや温泉への招待等の支援を行う他、仮設住宅に暮らす子供に学習塾「元気塾HAMANASU支援センター」を無償で開設されています。

●推薦者　高橋　芳喜／南三陸町歌津泊浜　契約会長　高橋　才二郎●

3月11日14時46分。私は、千葉に向かう途中で、首都高速の笠井ジャンクション近くの橋の上を走っていました。まるで映画のように道路が縦に揺れ、橋が軋みました。

いても立ってもいられず、仕事の予定を全てキャンセルし、地震のあった翌々日には、被災地に向かいました。

何度も家族や周囲の人に止められましたが、こんなにもたくさんの命が奪われ、また奪われようとしていることを考えると、もう動かずにはいられなかったのです。

被災地の現状はメディアで取り上げているものより圧倒的にひどく、それはもう戦争や原爆レベルの被害でした。そんな状況の被災地を救うためには、私達の力だけではとても無理でした。

そこで、皆様から物資や義援金を募り、本気で被災地支援を行うことを決意しました。物資を何十トンもトラックに積み、何十万食もの炊き出しを行ない、被災地に、東北復興サポートセンター「Hamanasu」を設置しました。

自己資金で被災地の方々を雇用し、現場の声を吸い上げてボランティアマッチングを行い、「はまなす学習教室」を開校して、子ども達の学習と憩いの場を提供しました。

丸1年間、様々な活動を続けていく中で、自分達の活動が、皆様の想いのこもった支援が、確実に被災地の皆様の命をつないでいることを実感しました。

今でこそ、生活は落ち着きを取り戻しましたが、この1年間は本当に過酷な年でした。 これからより一層、皆様の力が必要になってくると思います。

炊き出しの様子

物資の支援

水も提供

今回の震災の被害は甚大で、復興には膨大な時間がかかると思いますが、私は悲観的になる必要はないと思っています。

かつてない大きな災害にも負けじと、みんなで手を取り合って頑張っておられる被災地の方々。少しでも多くの命を救おうと物資や義援金の支援をして下さる心優しい皆様。何か自分にできることはないか、と募金活動やメッセージ集めを行なう学生。こんな時だからこそ、今の日本を支えるんだと、より一層仕事や学業に打ち込む人々。みんな、誰かを支える為に必死で頑張っている。この想いがあれば必ず日本は復興すると、私は思っている。以前よりももっと強く、優しい日本になると信じている。

今は震災から1年ということでメディアでも取り上げられているけど、被災地への関心もすぐに落ち着くと思う。だけど、忘れないで欲しい。地震が起きた時、誰かのために何かをしようと想ったその気持ちを、今を大切に生きよう思ったその気持ちを。

私はこれからも私にできることをしていきます。私にできることは本当に小さなことだけど、皆様の大きな想いを被災地に届けられるなら、それで救われる命があるのなら、ずっと続けていきたいと思います。本当に皆様には感謝しかありません。

最後になりましたが、この社会貢献者表彰を授与して下さった社会貢献支援財団にも感謝の言葉を述べさせて頂きたいと思います。被災地への活動を取り上げて下さり、誠にありがとうございました。

学習の場も設けた

子どもたちを勇気づける加藤さん

理事長　中谷　百里

ＮＰＯ法人　犬猫みなしご救援隊

（栃木県那須塩原市）

福島県の避難区域に残された犬や猫を、避難した住民の依頼で捕獲し、栃木県の那須に2500㎡の土地を借り、現在1133頭以上を保護し、内400頭を保護育成中。被災者の代わりに、理事長が広島から移り住み世話をし、里親を探す運動もされています。

●推薦者　公益財団法人　社会貢献支援財団●

東日本大震災が起きた翌日の3月12日。

その日は私が代表を務めるNPO法人・犬猫みなしご救援隊スタッフの食事会の日でした。

食事会ができるほど平穏な中に居た私は、その席でスタッフたちに言いました。「東北へ犬猫の救助に行きたい」その時私自身、どこまで本気で考えていたか今でもわかりません。ただ、行きたかったのです。何の計画もないけど行きたかったのです。

勤務する動物病院の院長にも同じことを言いました。すると3日間の休暇をくれました。

すぐに、資金と物資を集め、翌3月13日、宮城県仙台市荒浜区を目指しました。そこで怒涛の3日間を過ごし、犬1頭と猫4匹を保護して広島へ戻りました。

広島へ帰ると、私が3日も留守をしたため、スタッフや勤務先の院長たちは思いのほか疲れていました。そんな中「猫6匹の保護依頼」が来ました。3月14日に私たちの仙台での救助シーンがテレビの全国放送で流れたからです。いろいろと気兼ねもありましたが、また3日ほど休暇をもらい、再び宮城県へ入りました。

仙台市は私の想像をはるかに超え、震災後わずか一週間で復興意欲に溢れており、岩沼市で猫6匹を引き取ったその足で「放射能が漏れて近寄れない」とラジオが言っていた福島を目指しました。

福島県南相馬市に入ると、目に入るものすべてが一変し、危険を教えるポールもなく、陥没して水没したまま放置された国道6号線。そのすぐ向うには食べ物を探して彷徨う犬たち。それは今まで見たことのない空恐ろしい光景でした。身震いしましたが、すぐに「ここが私の居場所だ」と思いました。

もう迷うこともなく誰にも気兼ねすることもなく、福島の「福島第一原発20km圏内」と言われているこの場所で彷徨う犬たちを救助し続けよう。

その時の決意は、福島第一原発20km圏内が警戒区域に指定され、なお強まり、置き去りにされた犬や猫を救助し、安定した保護生活を提供するために、栃木県那須塩原市に大型保護施設を建設し、今もそこを拠点に福島被災動物の保護・育成活動を続けております。

この度、社会貢献支援財団から、人命救助ではなく動物の救助活動を行っていた私たちを東日本大震災における貢献者として表彰していただき、言葉では表現できないほど感謝いたしております。

今後は動物愛護団体として名誉ある表彰の名に恥じない活動を続けて行く所存です。

この度は本当にありがとうございました。

NPO法人犬猫みなしご救援隊
理事長　中谷　百里

福島で保護された犬たち

栃木県那須塩原市に建設された大型の保護施設で生活する犬たち

代表　菊地　明美

ハートtoハート

（宮城県仙台市宮城野区）

震災後ペットに係る情報収集のＨＰを立ち上げ、仙台市動物救護対策本部とともに被災動物を保護する活動をされています。

●推薦者　仙台市動物管理センター所長　千葉　茂／仙台市健康福祉局●

東日本大震災においての貢献者として、この度表彰して頂きまして、本当にありがとうございます。改めて、ご推薦いただいた皆さんに感謝したします。

私たちの会は、二つの大きな目的意識を持って活動して参りました。

一つは、ペットも家族の一員として最後まで可愛がってほしいということでした。日本では、年間たくさんの小さな命が、飼い主による何等かの理由で捨てられて処分されています。少しでもそのようなペットを減らしたいと、小学校などで啓蒙活動をしています。

もう一つは家族のように大切にされている方々が、災害などで避難する際に、ペットも同行避難できるようセミナーやイベントなどで啓蒙活動をしておりました。

宮城県地震は、必ず来ると言われてきましたし、新潟中越地震や、阪神大震災の時もペットを飼っていた方たちが苦労なされたお話しや、飼い主と離れたペットたちがたくさんいたという事情を見聞きしておりました。宮城では、少しでもそのような問題を抱えずにペットも飼い主も災害が起きた時に、一緒に避難できるよう活動してきました。

この度の東日本大震災においては、私たちの活動を知った全国の皆様から、ゲージ、フード、シーツなど必要な物資などを送って頂きました。

震災当時、私たちは電気やガスもなく、避難所に集まった方々の中でもペットと一緒に避難された方は、人の物の配給の中からはペットの為に物はあげることが問題視されている避難所もありました。そんな方々へ、必要な物を持っていく事ができました。

当時は、私も被災者でしたが、事務所に一か月泊まり込み物資の管理をしました。そして、スタッフの皆さんには昼間、物資の仕分けをして頂き、ガソリンもない中、気仙沼、石巻、亘理など仙台市だけではなく各避難所へと届けてくれました。

皆様のおかげでペットと一緒に避難された方とペットのフォローはなんとか出来ましたが、やはり自宅へ置いてこられた方の問題の方が、深刻でした。

連れてきても避難所に入れてもらえず、行き場のない方々の問題を解決するのがとても大変でした。ペットと離れ離れになったり、ペットを亡くされた方、飼い主のわからない犬や猫たち・・

その問題が、今もなお残されております。このことからもこれからまた来るかもしれない災害において、ペットと飼い主が飼ってない方々にも迷惑をかけないように一緒に同行避難でき、飼い主とペットが、飼っていない方々にも安らぎや癒しを与えるような社会を目指して、頑張っていきたいと思います。

ハートtoハート
代表　菊地　明美

殺処分されるペットを減らすようにと、啓蒙活動を行っている。また災害時のペットの同行避難などのセミナーも行っている

理事長　齋藤　文江

特定非営利活動法人　エーキューブ

（宮城県仙台市宮城野区）

仙台市と獣医師会と協働し、ボランティア希望者への対応や、市の管理センターに収容された犬猫のための譲渡会などを開催されています。又宮城県全域でペット連れの被災者への支援を現在も継続中です。

●推薦者　仙台市動物管理センター所長　千葉　茂／仙台市健康福祉局●

「人と動物の共生のために」

仙台市内において本会も被災いたしましたが、発災当初は、各会員が自分たちのできることをしようと動き始めました。

市内においては、仙台市被災動物救護対策本部の構成団体として、仙台市動物管理センターに保護された動物の世話（震災以前からの事業）や、ペットフードの支援、ペットを探している飼い主からの連絡対応、けがや衰弱している犬や猫の通報に対する救護活動も行いました。

この活動と並行して、各会員の住んでいる地区の避難所にいるペット同行避難者の状況調査を始めたところ、あまりにも甚大な被害で死者も多く、助かった被災者たちの厳しい避難所生活の実情が浮き彫りになりました。

またフードやペット用品が手に入らないなど、様々な問題もわかってきたことから、発災一週間後の3月18日から、開院している動物病院やペット用品が手に入る店の情報などをブログで発信し始めました。

その発信で、全国から物資が届き始めました。交通ルートも寸断される中、直接遠くから車で持ち込んでくださる方もおられました。

「早く、そしてより多くの方たちに物資を届けたい！」という思いで「チラシ」を手作りし、避難所や様々な施設で配布をして、困りごと相談窓口を明確に伝えた結果、連絡が続々と入り始めました。

支援活動は、宮城県全域にと広がっていきました。物資を届ける中で、ペットの健康相談、飼育相談にも対応したり、車を流された方には動物病院まで送迎したり、専門学校に協力をお願いし、津波をかぶった犬たちのシャンプーをし、ノミ、ダニの駆除も行いました。

被災者が避難所や仮設住宅でペットと一緒に暮らせるように、署名活動をしたり車中でペットと暮らしている方たちにテントを調達したりと環境整備にも努めました。

支援は、仮設住宅に移られた現在も継続して行っています。仮設住宅では、支援物資の他に集合住宅においての飼い主のマナーアップ・トラブル防止のための「しつけ教室」や環境整備、飼育相談を行っています。

エーキューブは、発足当初から仙台市と協働でペット同行避難の啓発に努めてまいりました。

今回の経験から、ペットが避難所で多くの方たちと生活するためには、日ごろから共同生活を想定したしつけの重要性を再確認しました。

また災害による苦難、疲れ、ストレスも「この子がいることにより癒され、この子のために頑張れた」と多くの飼い主の方が言われ、私どもが支援に行くと飼い主さんたちに笑顔がこぼれ、逆に元気をいただきました。

飼い主にとっては家族同様のペットと普段の生活が取り戻せ、心から笑顔になれる日が一日でも早く訪れることを願っております。

今回の受賞は、家事や仕事の合間を縫って支援活動に奮心してくれた会員や、支援物資や支援金を送ってくださった全国の方々と共にいただいく受賞と受け止め、皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

特定非営利活動法人エーキューブ
理事長　齋藤　文江

志津川町仮設にて物資を配布

気仙沼にて物資を配布

気仙沼大島貨物搬送ひまわり号

亘理にて

岩沼市仮設にて物資を配布

仮設住宅周りの糞清掃

トラブル防止、マナーアップの為のしつけ教室

世界一ひとに優しい国をめざして

世界一ひとに優しい国をめざして

公益財団法人 社会貢献支援財団
評議員

中 島　健 一 郎

平成24年度の社会貢献者表彰は、前年の3月11日に日本を襲った未曾有の地震や津波、そして原発事故で人命を救助したり、被災者のため活躍した人々に特化して行われた。

私も5月1日、東京の帝国ホテルで行われた表彰式典の片隅にいた。司会者に紹介された130余人の人が壇上にあがり、大きなスクリーンにそれぞれの素晴らしい行動ぶりが映し出された。「皆さんすがすがしい顔、良い顔をしておられるなー」と感動しながら見上げ、私は以下のようなことを感じ、考えていた。

「これらの人は行政とか国に頼ることなく、自分でやれることをやった人達だ。その意味で自立した人達だ。だからみんな、生き生きとした人が多い。堂々としていてたくましい。ウジウジしていない」

「こうした人たちばかりだったら直接民主制はなりたつのではないか。人を批判したりするより、自分ができることをする人達だし、他人の目を気にして行動するタイプでもない。もし日本がこのような人たちで多く占められているなら国がどんな事態になっても、日本は大丈夫だ」

「今、政府は過去の間違った政策と無駄使いでたまった財政赤字のつけを消費税増税のかたちで国民に支払わせようとしている。それも財政赤字の尻拭いという実態を隠すために“税と社会保障の一体改革”と、まるで社会保障のためであるかのごとく装うずるさだ」

「“このままではギリシャ化する”と脅すが、もし政府がデフォルトしても日本がなくなるわけでもない。国会議員や公務員の給与がストップしたり、医療や福祉サービスが低下する。つまり震災に襲われた東北地方で起こったことが、日本全体に広がるが、その時、今日、表彰されたような人々は黙って弱い立場の人たちを助けるだろう」

「日本はそうしたところからやり直さなければ、明治維新に匹敵する改革は実現できないのではないか。今は政治家や官僚の既得権益を削ることもなしに国民に負担を押し付けようとしているのが実態だからだ。“身を切る努力をして国民に増税をお願いする”と政治家は言うが、政党助成金はそのまま。議員の数も減らさない。公務員制度改革もおざなりだ」

「もういわばエリートと言われている人達に頼るのはやめよう。彼らは特権階級を維持したいだけなのだから。本当に自立した人たちが“今すぐやらなければならない”ことをやれば国の再建は可能だ」

「文部科学省の“産官学連携”担当のエリート官僚の講演を聞いたことがある。かれは第1次計画、2次計画で予算がこれだけ付いたという話ばかり。その政策によって何がどうなったかの話がない。質問には薄く広く予算を研究者にばらまいていて効果が良く分からないような回答だった。赤十字や中央募金会に集まった義援金は配られるのも遅かったが、その配分の結果が見えないのと似た構造だ」

「それに比べ今日表彰された人達は、自分が必要と判断したらすぐ動いて結果を出していた。もう我々はそうした人たちの側に立ちたい。自分のお金も労力もそうした人たちに使ってもらいたい。今回の震災は従来の既成組織・制度が動脈硬化を起こして使い物にならず、更新時期に来ていることを浮き彫りにした」

様々な思いが胸を渦巻き、時には涙があふれ、こんなに刺激的な式典は初めてだった。やはり3.11の大震災は日本の岐路（ターニングポイント）だったのではないか。

そして受賞者を代表して岩手県陸前高田市の八木澤商店の河野和義会長があいさつした。心にずしんと響くものだった。河野会長は地震で価値感が変わったという。「政治家など他人に頼らず、自立しなければいけない」と述べ、三つの基本方針を紹介してくれた。ひとつ、生きる。ふたつ、共に暮らす。みっつ、人間らしく、魅力的に。

東日本大震災は、日本人に生きることの大事さと意味を考えさせたし、ひとりでは生きられず、共に助けあって暮らすことの大切さを教えたのだ。そして生きるにしても共に暮らすにしても、人間的で魅力的だと幸せなのだという思いで、河野会長は基本方針を定めたのだと思った。

式典では「日本一ひとに優しい村」と呼ばれ始めた群馬県片品村も紹介された。3.11直後、人口5,200人の小さな村の千明金造村長が、一億円の予算を専決処分し、被災者1,000人を1か月受け入れる決断をしたというのだ。3月18日にはバス23台が福島県南相馬市に到着、被災者1,000人弱が片品村に迎え受けられた。国や官僚組織が前例やルールにとらわれ硬直化している中で、どうして片品村は柔軟で素早い対応が出来たのか。私は日本再生の原型が片品村にあるのではないかと感じ、是非、訪ねてみたいと強く願っていた。

そんなところに社会貢献支援財団から、記録集用にまとめのようなものを書いて欲しいと依頼が来たのだった。私はナゼ小さな片品村が「日本一ひとに優しい村」という尊称をもらえたのに、日本は「世界一ひとに優しい国」と呼ばれるチャンスを失ったか知りたいと、あの「夏が来れば思い出す。静かな尾瀬」という歌の尾瀬沼を抱える片品村をはじめ13件の受賞者を訪ねた。

決断の背景（片品村）

「日本一ひとに優しい村」と呼ばれるようになった片品村の決断の背景は何なのだろうか。そんなことを考えながら都心から関越自動車道を走り、福島県境と新潟県境に接する片品村に3時間半のドライブで到着した。三方を山に囲まれ、ほとんどの村人が村の面積の約2%の片品川沿いに住む山村だ。夏日に映える緑がまぶしい。福島、群馬両県に広がる尾瀬沼近くの大清水地区あたりは、夏場でも木陰に入るとひんやりした風が心地よい。

尾瀬沼まで行くヒマはなく、村役場に戻り千明金造村長に会った。

「とんでもない災害。何かしなくては。何かしなくては」。3.11の日、千明村長はそう思い続けていた。翌12日の結婚式で来賓のあいさつをしている時も、13日夜、東電から「片品村は停電はない」と連絡を受けた時もその想念は途切れなかった。翌朝、いつも通り山を散歩しながら「とにかく1,000人の被災者を受け入れよう」と決断した。

早速役場で幹部会を開き、民宿旅館組合のトップと村議会議長に集まってもらい、1日ひとり三食付2,500円で受け入れてもらえないか相談した。千明村長の奥さんの実家が民宿を経営していたことから、家族と一緒の内容の食事なら一人2,500円で何とか出来る見積りだったからだ。その時すでに村議会は閉会していたため、被災者を1ヶ月間受け入れる為の予算、一億円を専決処分で決めた。

村長はすぐ群馬県庁に向かった。NHKや上毛新聞が、その日や翌日「片品村！被災者1,000人受け入れへ」と報道した。受け入れは民宿や旅館に手を上げてもらうことにしたが、一般の家庭からも「うちだって5人、10人引き受けるよ」と連絡がきた。

驚いたのは若い独身男性が、「新聞を見た」と百万円を総務課に匿名で置いて行ったことだった。

3月17日深夜、福島県から受け入れを要請された南相馬市に向けて、村の職員数人が先行して出発し、18日午前4時には大型バス1台が役場を出た。多くの観光バス旅行がキャンセルされていたため、民間バスは栃木県宇都宮市の東北自動車道上河内サービスエリアに比較的簡単に集まり、総勢23台が集結し、一路、南相馬市に向かった。

18日深夜、片品村にバスが次々と到着した。若い人は既に他県に自主避難した人が多く、片品村に避難してきたのはお年寄りが目立ち、車いすの人、障がい者の人も抱えられるように降りてきた。

後日、千明村長に被災者から「私には生涯忘れられない日がふたつあります。ひとつは3月11日です。もうひとつは片品村に温かく受け入れていただいた3月18日です」という手紙が届けられた。その3月18日から、村の人口の5分の1近い被災者と、村人との暮らしは9月までの半年に及んだのだった。

まず私は「どうして千明村長はそんなに素早い決断が出来たのですか」と質問した。村長の部屋には「2007年夏、尾瀬国立公園誕生。きらっしゃい。尾瀬の郷　片品村へ」と書かれたポスターが貼ってあった。そんな尾瀬の郷が、想像を絶する災難に襲われた人々を、なぜ積極的に「きらっしゃい」と受

け入れ「日本一ひとに優しい村」になったのか。その訳は、日本を「世界一ひとに優しい国」にする鍵だと私は思っていたからだった。

「昔からこの村は何か困ったことがあったら助け合う風土を持っています。特に私だけがどうということはないんです」と千明村長は村民の気質を強調した上、子どものころの体験を話してくれた。千明村長の両親は、自分より7歳年上の姉さんを里子として育て、学校に行かせ、お嫁に出したし、千明村長の奥さんの実家も奥さんと10歳年上の娘を養女にし育て、学校行かせ、結婚させた。だからそういうことは特別と思っていないのだという。

また千明村長の実家は針山というどん詰まりの山奥にあり、目の見えない人が、ものごいに来ると「もう遅いから家に泊って行きなさい」とよく泊めたのだという。小さい時は「どうして知らない人を泊めるのだろう」と疑問に感じたこともあったが、そういう家が片品村には多いと千明村長は説明してくれた。

「当初予算34億円の村が、思い切ってポンと1億円の被災者受け入れ予算を専決処分出来たのはナゼか」とも質問した。普通なら「村のために使うのなら分かるが、勝手に決めるな」と言われることを恐れて、「やれ村議会にかけよ」とか「手続きを踏んで」となり、なかなか決まらないのが日本の実情だからだ。

実は5年前、千明金造村議が村長になった時、村の財政調整基金は2億4千万円まで減っていた。それを11億円増やしたので財政に多少余裕があったことが、今回1億円の専決処分が出来たひとつの理由だった。「どうやって財政を改善したのですか」と質問すると、自分の月給を関東で一番小さな村（人口約170人）の村長の給料の次に低い額にしたという。群馬県の自治体で5,000人規模の首長は月給70万円レベル。3,000人規模が54万4千円。もっと下げようと思ったが、2度目の報酬審議会で、あまり低いと3,000人規模の村長に迷惑をかけるという理由で、今の給料にしたそうだ。

「よく報酬10％カットなんていうでしょ。金額を下げないで○○％カットなんていうのは有権者をだますようなもの。いずれ元に戻す魂胆なんですよ」と千明村長は喝破した。

3.11後、政治家でも役人でも東電でも期限付きの○○％カットが横行した。

村の公用車はそれまではお金を払って廃車にしていたが、「何年式何型の車です」と写真を撮って広報紙に載せたら、27人乗りのバスが百万円で売れた。村役場の庭木の手入れに年間約280万円払っていたが、職員が剪定して今はタダだ。

「身を切る改革」をせずに、消費税増税を先行させる日本政府。「国会議員が多過ぎますよ。何か集会があると壇上に国会議員がずらっと並び、終わるとさっと帰るのは無駄だと思いますね」。「瓦礫の処理も全国の自治体に引き受けさせるので大騒ぎしているけれど、被災地の地域毎に小さな焼却施設を作って、被災者を雇用して進めるべきですよ。九州まで瓦礫を運んだら運搬賃の無駄。被災者雇用も進まない」

千明村長が震災復興の指揮を取ったら、被災地の現状は違ったのではないかと思った。昭和23年生まれの千明村長は小中を卒業後、家を継ぎ弟や妹を進学させ独立させた。長男は家を継ぐのだから高校に行く必要はないという考えからだった。農業をやる傍ら従業員5.6人の自営業を営んだ。下請けでボタンを作っていたが、「どうやったら1日5,000個のボタンを、2倍の1万個作れるか」とか、「本社はこうやるが、我々ならどうするか」を考える日々だったという。現実に即して問題解決が出来る人は、なぜか今、永田町や霞が関に少ない。

片品村のような被災者受け入れは、群馬県では東吾妻町、草津町、水上町と波及し、県外では箱根町などが実施した。率先して素晴らしいことをすれば、世の中に良い影響をもたらせられるという例だろう。そして私が感心したのは、片品村は半年間の受け入れで1億8千万円を使ったが、最終的な決算は200万円しか村の金を使わなかったことだ。被災者の受け入れ自治体にも災害救助法で、国からお金が来た。途中から観光庁が動き出して被災者ひとり1日5,000円を出すということになり、草津町等は最高5,000円となった。国から南相馬の子ども50人の給食費も払われた。片品村もかつかつだった2,500円を3,000円にし、その分お弁当をつけたりしたという。メディアで取り上げられて支援金もわずかな期間に3,600万円も村の義援金用の口座に振り込まれた。

結果として、片品村は金銭的にはほとんど持ち出しなく、「日本一ひとに優しい村」という尊称を得たのだった。

片品村のケースを考えると、日本も「世界一ひとに優しい国」と呼ばれるチャンスがあったと思う。ところが原発事故の対応を見ても、日本政府は「人を大事に」していたとは思えない。爆発が起きて、住民が避難する際に、放射能に関する情報は充分に与えられず、放射能が流れた方向に避難してしまったのだ。米国が3月18日や20日に二度にわたって知らせてくれた航空機による測定結果は、文部科学省レベルでストップし、生かされなかった。米国政府が半径80キロ圏内からの退避を、自国民に勧告したのは、ちゃんと根拠があったのだが、日本政府は「ただちに健康に影響はない」といったあいまいな発表を繰り返していた。

当時、チャーター機まで派遣して、自国民を日本から脱出させたフランスなどの対応に、私は「なんと逃げ足の速いことだ」と半ばあきれたが、今から思うと、外国政府は、自国民保護という最大の義務を果たしていたのだった。福島の原発事故からの避難者は「家も仕事も故郷も」奪われた。約9万人の流浪の民化した人々への国の対応策は、片品村の素早さに比べ、あまりにもテンポが遅いのだ。

千明村長は10万円以上の義援金を送ってくれた人々に感謝状を持って歩いた。群馬県内のおばあちゃんは年金から3度もお金を送ってくれたが、「これが限界です」と言っていたという。300万円寄せてくれた、石川県の81歳のおじいさんに訪問する意志を伝えると、「私は年だからお金の使い道がないから送った。わざわざ来なくて良いよ」とのことで感謝状を郵送した。すぐ電話が来て「この感謝状はうちの家宝にする」とのことだった。社員旅行の積立金を送ってくれた前橋の会社に行くと、景気の悪化で会社を閉めるところだった。

千明村長は感謝状を贈ることによって、義援金へのフォローアップもしている。ところが日本赤十字社も中央募金会も何千億円もの義援金を集めながら、いつどのように配分したのか、どのように役だったのかの報告もない。人々の様々な思いのお金を集めながら、使途を不明のままにするのはあまりにも心がないのではないか。国と同様、組織ばかりが膨れ上がり「人への優しさ」を見失っているのではないか。

「海外にいると募金活動くらいしかできません。片品村の活動に日本人としてありがとうと言いたい」（オーストラリア在住の40歳代の日本人）、「片品村は群馬の誇りです。群馬に生まれてよかったと実感させられました」（沼田市の30歳代の女性）。沢山の感謝や称賛の手紙やメールが片品村に届いている。

立ち上がった若者たち（片品むらんてぃあ）

片品村の千明村長の決断に呼応した若者たちがいた。地震・津波に続いて、福島第一原発の事故に敏感に反応し、「僕たちも何か出来ないだろうか」と高校の卒業式を終えたばかりの若者たちは考えていた。南相馬市から被災者を受け入れるという村の方針が伝わると、若者たちはメールやFAXを千明村長に送った。「じゃあ、一度集まってくれ」との返事に村役場の2階には、約40人の若者たちがやって来た。

バスが南相馬市から着いた被災者を、出迎えすることになった。「皆さんの安心を共に築きたいです」。そんな垂れ幕を4つ掲げ、若者たちは暗闇の中、雪を踏みしめバスの到着を待ち続けた。「村の人」という意味の「むらんてぇ」という言葉と、ボランティアを組み合わせた「片品むらんてぃあ」と、後に名付けられた被災者支援グループの誕生だった。

バスから降りて来た人はお年寄りが多かった。真っ暗闇に驚いて「もう帰る」と歩き出す人もいたが、ソリに乗せ、おんぶしたりして若者たちは動き出した。「これは軽い気持ちでは出来ないな」。覚悟が決まっていった。教育委員会の建物に事務所が作られ、パソコンやネット環境も整備された。

横浜市とほぼ同じ広さの片品村に点在する民宿、旅館からメールが入る。目の不自由な人、車いすの人の面倒をみる。健康管理センターや役場の書類を届ける。支援物資の配布もフットワークの良い若者たちの仕事だった。

「片品むらんてぃあ」には村内から約100人、村外から約100人のボランティアが登録した。洋服も沢山届き、文化センターで被災者に必要なものを選んでもらったが、遠くのスキー場に宿泊している人は来ることが出来ない。ギターや尺八で元気付けたいという人もいたが、会場への送迎が問題だった。さらに病院通いしなければならない人にどう対応するかは切実だった。そんな時、自動車会社がインサ

イトを2台提供してくれ、NTTも電話を引いてくれた。被災者はヒマでブラブラしている。そこで「片品むらんてぃあ」宛てに来た義援金を使って車の運転が出来る人を雇った。片品村も緊急雇用予算を組んでくれた。

健康管理センターで配車し、病院送迎がスムーズになった。農協に作られた「憩いの場」に支援物資が陳列され、保育所も作られた。「じぇじぇあがっせ」（どうぞおあがりなさいの意味）と「憩いの場」は名付けられ、日替わりで美容やマッサージも。相馬野馬追いの掛け声から「まいれー号」と呼ばれたマイクロバスが南相馬の被災者を雇用して民宿を巡回して送迎に大活躍した。

「じぇじぇあがっせ」の運営は「ゆきえさん」、車の配車は「大久保っち」と分担もきまり、南相馬のスタッフは12人に上った。働くことで自立への道を歩むことや、「世話になって当たり前」という空気がまん延しないためにも役立った。おばあちゃんたちには「箸袋」を折ってもらい、100枚で1000円分の村の商品券が渡された。箸袋は築地の料亭「田村」の料理人がボランティアに来た「ハッピーレストラン」のときにお披露目され、被災者だけでなく、受け入れ側の宿の人も招待された。その後、被災者から宿へのお礼として箸袋の注文をとったところ、3万枚のオーダーがあったので無料で作って収めた。あつれきも起きがちな被災者と宿側の緊張をほどいたのが「ハッピーレストラン」だった。そして「ゆきえさん」と「大久保っち」が共に働いたことが縁で結婚したのは、とてもハッピーな出来事だった。

「むらんてぃあ」の代表、桐山三智子さん（33）は24歳の時に「都会の生活は消費する一方。農村は生みだすところだ」と持続可能な生活を求めて、片品村に移住してきた。「この村はもともと困っている人を受け入れるんです。移住当初、水道が凍って隣家に水をもらいに行ったら“夕飯を食べて行きなさい”“風呂に入っていったら”と優しい。いつも雪道をトボトボ歩いていたら村の人が“車検まで乗っていていいよ”と軽自動車を貸してくれたのです。信じられないような話だけれども別の移住組の女の子もペンションの人に“車乗っていていいよ”って言われたんです」

インターネットで検索して「受け入れてくれそう」と感じた桐山さんの直感通りの片品村だった。炭焼きから麹から作る味噌造りまでお年寄りが教えてくれる。都会では何でもお金に換算するが、お金をかけない工夫が一杯の村だった。

お年寄りは、塩の分量などを聞くと、魔法の呪文のように「いいからかん」という。「適当に。いいかげんに」という意味だが、その日の天候や湿度で塩の量を変える。「いいからかん」はけして「いいかげん」ではなく、全てを熟知していることだった。桐山さんは有機野菜や自然食品づくりをしている自分の屋号を「ＩＩＫＡＲＡＫＡＮ」として、片品村に溶け込み、知り合いが沢山いるという理由で「むらんてぃあ」の代表になった。

最初のころ「浮足立ったボランティア」と「むらんてぃあ」のブログに書き込まれたこともある。批判や大変なこともたくさんあった。しかし片品村の若者たちは批判された分、さらに発奮して成長していった。小学校の卒業式が出来なかったまま片品村にやって来た6人の子どもの卒業式を実現したりした。「ただ言われたことをするのでなく、それぞれが自分の頭で考えて行動していた」と桐山さんは言う。

宿の人の努力（片品村　被災者受け入れをした宿泊施設の女将）

南相馬市からの被災者の受け入れを決めた民宿や旅館の人達は3月18日、バスの到着を待って右往左往していた。玄関にストーブをつけ、スキーウェアを着こんで、いまかいまかと待った。出発が遅れたため、車で迎えに行った主人たちが戻って来たのは、真夜中の12時ころだった。

「弘化の庄　かしや」の女将、入澤真理呼さん（57）は、3月13日に被災者の受け入れを考え、千明村長の携帯に電話した。すると村長からは「今、群馬県知事に協力依頼するため県庁に向けて車を走らせている」との返事だった。だから入澤さんは、村の観光協会から、被災者を受け入れる意志があるかどうかのアンケートが来た時に、真っ先に手を上げた。

「かしや」には6家族が来た。高校生、大学生からおじいさんまで。生活保護を受けている家族から裕福な人まで。ご飯を食べてもらい、布団で寝てもらった後、「これは長期戦になる」と入澤さんは思った。翌日から三度三度違った献立を考える日々が始まった。女性は配膳を手伝ったりするが、男の人はテレビ、新聞にかじりつく。外に出てボーッと煙草を吸っている人も。

3食を用意するのはストレスだったが、近所の人が受入れていることを知り、手打ちうどんを持って来てくれた。そのうちに昼食だけは地区で弁当を作って出すことになり、村が費用を負担してくれるようになっていった。食事代や暖房費、温泉の費用を考えると、ひとり2,500円の支給では正直きつかったが、お金のことは念頭になかったという。

寒暖の差が激しいのでおいしいと評判の片品トマトは、私が訪問した7月末が最盛期だった。真っ赤な大粒の片品トマト。歯ごたえとそのしっかりした甘みが口の中に広がる。まるで「日本一ひとに優しい村」の心を象徴するかのようなトマトだった。

千明村長の決断は、若者たちや民宿、旅館の人々に支えられ大きな赤い実をたわわに実らせたのだった。

犬猫の命も大事——全ては慈しみの心から

栃木県那須塩原市に作られたＮＰＯ法人「犬猫みなしご救援隊」のシェルター（800坪）に到着した途端、沢山の犬がわんわん吠えながら駆けてきた。フェンスを開けると、10匹近くの犬が私の回りを走る。茶髪の陽に焼けた女性が犬たちに大人しくするよう命じると、すぐ静かになり、座ったり、寝転んだりした。

「僕は犬が大好きです」とお土産のドッグフードを渡すと、NPOの理事長の茶髪の女性、中谷百里理事長はニコッと微笑んだ。

以下は炎天下の日陰にしつらえられた簡素なテーブルを囲んで聞いた中谷さんの独白である。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

広島から鳥取に向かうバスのテレビ画面に津波の映像が次から次へと流れたんです。唖然としてその映像を食い入るように見つめ続けました。その日は年に一度のスタッフや家族との食事会で、魚がおいしい日本海を目指していました。家にはテレビがないから、そのバス旅行がなければ、東日本大震災のあんな悲惨な状況をすぐには知らなかったでしょう。

「犬猫も全部死んどるわけはない。私行ってくるからな」と、スタッフと3人で現地に向かうことにしました。エサや水を車に載せられるだけ載せて、ガソリンタンクも5つ積み込みました。ブログに行くことを書いたら「こんな混乱の時に行くな！国がなんとかするだろうから一般市民が行くと迷惑になる」という反応が殺到したんです。

でも構わず行くことを決心して東京経由は駄目だと考え、日本海側を福井、新潟と走り、山形から宮城県に入りました。雪深い山形の国道のガソリンスタンドは2キロも給油待ちの車が並んでいました。コンビニの食料は全て売り切れ。車には犬猫の食べ物しか積んでいなかったので新潟県に一端引き返して、人間の食料も調達してから太平洋を目指しました。仙台空港から北上して「荒浜地区」に着くと50台近くの救急車と消防車が集まっていました。

ふと地面を見ると松の枝ように見えたのはなんと人の足。消防士に「あそこに人の手が出ている」と言うと「上からの指示がないと僕らは何も出来ない」という返事でした。水は水深1メールくらいで瓦礫と遺体が散乱していました。そろいのジャンパーを着ていたことから、私達に「あそこの遺体をなんとかして」という声がかかりました。“いや私たちの背中には犬猫って書いてあるでしょ”とも言えず、泥にうまった遺体が寒そうで「布団をかけてあげたい」と思いました。バレーボールの球のように頭が水面に浮いているのに何も出来ません。「来たのは間違いだったな、私たちが動ける状況じゃない」という思いが頭をよぎりました。

その時でした。「あそこに犬がいる。助けてくれ」という声に、ズルッと滑りそうになりながら前に進みました。犬小屋に鎖と首輪が放置されていました。ここに犬がいたはず。それを見て、なぜかふっきれ、倒れた家の中に入ったり、縁の下を捜索したりしました。

次の日、広島で知り合いのJNNのカメラマンが「何やってんの？中谷さん」と声を掛けて来ました。そこで屋根の上の猫を2匹、網で捕えている模様が放送されたため、4日後に広島に戻るとまるで英雄扱いでした。「自衛隊は人を助けてくれ。私達は犬猫を助ける」と喋ったのが全国に流れ、物資はワーッと送られてきました。

3月19日に再び「荒浜地区」に行くと、避難所の人々はとても喜んでくれました。「相談に乗ります」というビラを貼ると「うちの犬は心臓の病気」とか

「尿石匠でおしっこの出が悪い」といった相談が殺到しました。「1～2週間、クスリがなくても大丈夫」「このように膀胱を圧迫すれば出るよ」などペットの相談に乗る人は珍しかったので、人気者のようでした。避難所の多くはペット不可でしたが、仙台市の一部の避難所はOKでした。

仙台の人々の復興への強い意欲を確認したので、原発の様子を見て帰ることにして6号線を走りましたが、相馬市あたりで道路は水没。仕方がないので山の手を迂回して南相馬市に入ると、宮城とは一変、人の姿が消えていました。交通信号が赤や青に点滅し、犬がうじゃうじゃ道路を走り回っていました。捕まえようとすると逃げます。津波に流されたもののロープが切れて助かったらしい1頭と、肉球が破れて、いたいたしいダックスフントを保護して「来るべきところはここだ」と思いました。

広島に戻り、ワンボックスカーをバスに替えて、3月26日に再び福島県へ。勤めていた動物病院を辞めて覚悟を決めた3回目の被災地行きでした。玉川村のペット霊園にバスを停めて原発の20キロ圏内に通い、犬を保護しました。昼はリードで野外につなぎ、夜は寒いので犬たちもバスに入れて抱いて寝ました。

4月2日、東電がいわき市で住民のために放射能のスクリーニング検査をしていることを知りました。「放射能を浴びていません」という検査済み証がないと、犬を里親に渡せないんです。遠かったけれど、いわき市まで行くと「犬の検査はしていないよ」という。「とぼけたことを言うな。あんたらが放射能をばらまいたんだろ」と粘りました。「今回限り」と言われながら毎回、検査をしてもらいました。

私たちも、人間が検査している時は、申し訳ないと、時間をずらして夕方5時すぎに行きました。「何で犬の検査するの？この犬、売るの？」って聞かれました。結局犬からは放射能は検出されず、反応が出たのは靴底くらいでしたよ。

毎日、20頭くらいを保護して連れ帰る日々。20キロ圏内には登録数で犬が5,800匹、猫が約5万頭いましたが、連れ出せたのは約400匹。20キロ圏を警備する警察官の間では「また来たの――」と有名だったんです。

ところが4月22日には許可のない者は警戒区域に入ってはならないとのお達し。どの検問所でもUターンさせられ4月30日まで保護活動はストップしました。「透明人間になりたい」「地下道が欲しい」と悩んでいた時、「会って話をしませんか」と原発関係者にJヴィレッジに呼び出されました。

「僕は以前、犬を助けてもらった者です。“あの子を助けて”と言ったら“あんた、ガスマスクなんかしていてバカ。あんたも助けなさい。エサあげるから警戒区域で配んなさい”と言われました」。その人が下請けとして20キロ圏内に入れる許可証をくれたんです。あとでその人の携帯番号から私たちが以前に保護した犬の飼い主と分かりました。

5月1日夜、ワンボックスカーをレンタルして、窓際に建築道具を置き作業車のようにして、検問所で許可証を見せると、あっさり通れたんです。うれしかったですね。それから毎日、怪我した犬を重点的に連れ出し、老犬や自宅の敷地から離れない子には「ずっとここで暮らしなさい」とエサを置いてきました。

秋になってドロボーが横行しているということで許可証を持っていても通れるルートが限られるようになってしまいました。そこで今日は大熊町、次の日は南相馬市とエサを配り始めました。すると、そのうち県と環境省が私たちが餌をあげていた犬を軒並み捕獲し始めたんです。捕獲されると狭い檻に閉じ込められるので「うちが育てていた犬だから返してよ」と県の保健所に交渉し、那須塩原のシェルターに連れて行きました。

このシェルターの土地は7月に見つけた荒地の800坪ですが、ダンプで何百台分の砂利と山砂を入れて整地したんです。そのころ結構、支援金が集まっていたので「家族の愛情を与えられないから、せめて居住環境を良くしよう」と思ったんです。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

中谷さんは広島でも犬50匹、猫650匹を保護して、病気や障害で引き取り手のない犬猫を終生飼育している。「ブリーダーの劣悪な所には殴り込みに行く」といい、「相手は生きているから」と年末年始の2日しか休まずに働く。中谷さんの話から動物たちへの溢れんばかりの愛情がビックリする行動力につながっていると感じた。

犬や猫だけでない。スタンチョンという鉄枠に首を突っ込んで死んでいる牛を福島で初めて見た中谷さんは、「日本は家畜福祉も遅れている」と激しい憤りを吐きだした。

「中島さん、安い牛乳は飲まないでね。安くするため、スタンチョンを首にはめられ立ったままでお乳を搾られ一生を終る牛から採るから、放し飼いの牛より安い牛乳が出来るのよ。そんな牛乳は栄養も少ないし、乳を出すように妊娠させられ、子牛を取り上げられた牛は可哀そうよ」

中谷さんは生きている牛には干し草を配って歩いた。牛たちは中谷さんらの車の音がすると一斉に鳴いたという。

「20キロ圏内に入ると、まるで異次元にいるよう。大熊町なんか洗濯物を干したまま避難している。生活臭を感じる洗濯物があるのに誰もいない。民家から誰かが監視しているような錯覚にとらわれ不気味なんです」

扱いに困る使用済み核燃料を積み上げるうえ、すさまじい事故の被害を見せつけた原発から脱しようとしない企業論理と牛の虐待ともいえる安い牛乳の生産には、どこか共通する人間のエゴイズムがある。中谷さんは動物への愛情から、放射能もなんのその、立ち入り禁止もなんのそので不条理に立ち向かうドンキホーテのように思えた。

生きるため、生かすためのとっさの判断

表彰された人々の中で、渥美広実さんの素早くたくましい活躍には舌を巻く。船員である渥美さんは3月12日の出航を控え、大曲浜の山西造船にいたとき、東日本大震災に遭遇した。地震後まもなく海水が1メートルも退いた。「これは尋常ではない」と車で浜を離れたが水道管が破裂して水が車道を覆い始めていた。どうしようと思ったその時大きなトラックが水を蹴散らして走っていた。チャンスだと思い渥美さんはそのトラックにぴったりついて走った。そうしなければ水で車が立ち往生しそこから脱出することが出来ないと思ったからだ。

渥美さんの「とっさの判断」は、このトラックについて走るということから始まり、何度も下され、まず自分を助けた。次の危機脱出は松島基地から石巻方面へ向う道の橋げたが落ちていたことから大渋滞していたためすぐに方向転換して別ルートをとったことだった。ところが赤井駅近くの定川を越える道路も車で渋滞していた。そこは定川が氾濫したため前に車が進めなくなっていたのだった。

そうこうしているうちに前方に黒い波が迫ってくるのが見えた。渥美さんは対抗車線が一台も車が来ていない事に気づきバックで車を入れると、猛スピードで後ろ向きのまま車を走らせた。何台かの車が同じようにバックで逃げたが、渋滞の列に残った車は多分津波に呑みこまれていっただろうと渥美さんは残念に思っている。

渥美さんは私が石巻市の仮設住宅を訪ねた時は、ハワイ沖で操業中だった。留守を預かる奥さんの弘子さん（53）は「あの人は生きる知恵を持っている」と言った。

以下は渥美さんの手記と、弘子さんからの取材をまとめた「とっさの判断の人命救助」の物語である。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

自らの危機を乗り越えて内陸の弟の家にたどり着いた渥美さんは、自転車を借りて連絡が取れない弘子さんと孫を探しに海に近い自宅の方に向かった。北上運河の土手に午後4時頃着いて目を疑った。そこから海側の建物は全て津波に呑まれ、水また水の海と化していたのだった。この状態では妻も孫も駄目だろうとあきらめて帰りかけた時、乗ってきた自転車が盗まれていた。雪の上に自転車のタイヤの跡がついていて、たどって行くと、大勢の人が松林の中に避難していた。そこでたまたま出会った先輩から「松の木に小学生の男の子が2人しがみついている。なんとかならないか」と救助を頼まれた。

浜育ちで、若いころは北洋漁業に行って、船から落ちた人を凍てつくような海で助けた経験もある。上着を着ていると水を吸って身動きがとれなくなるため、渥美さんはTシャツ1枚になって泳いで行った。瓦礫の流れてくる中、抱いて泳いで2人の子を助けた。2人助けてほっとしていると、「助けて、助けて」と何人もの声が聞こえた。薄暗くて良く見えない。車のライトで照らしてもらうと、あちこちの木や家の屋根にすがっている人が見えた。

大人を抱きかかえて泳ぐのは無理だ。「ロープはないか。ロープ、ロープ」と騒いだ。近くの作業員がロープを持ってきた。「誰か泳げる人はいないか」と叫ぶと、若い男性が手をあげた。その男性は泳いでロープを向こうの木に結びに行った。しかしロープ

の結び方が悪かったため「セーノ」と引っ張るとほどけてしまった。渥美さんは船員なのでロープの結び方を知っている。口にロープをくわえ再び水に飛び込み、ジグザグに木々にロープを縛った。

水の上にいくつもパレットを並べた。ロープとパレットを頼りに何人もの人が土手に上がって来た。しかし助けようとしても動かない若い女性がいた。その女性の身体にロープをくくりつけ、水に飛び込むように促したがそれでも動こうとしない。「死んじゃうぞ」と大声で言うと「おじいちゃんも助けて」という。よく見るとおじいさんが水の中に沈んでおり、女性はその襟首をつかんでいた。「おじいさんはあきらめろ」と言って、無理やり手を離させ岸の人達にロープを引くよう合図。女性は土手に引き上げられた。

渥美さんが自分も土手に向かおうとした時、「助けて」というかすかな声が聞こえた。車のライトが照らしている範囲には誰も見えない。「どこにいる」と叫ぶと「木に車がひっかかっていて、その屋根にいる。今にも車が沈みそう」という。声のした方向に泳ぎ出したが、瓦礫に阻まれて前になかなか進まない。やっとたどり着くと、なんと女性2人と生後7カ月くらいの乳飲み子がいた。自分ひとりでは救助は無理と思い「必ず助けに来るからじっと待っていろよ。ボートを探すからな」と急いで戻ろうとした。だが瓦礫に足をとられ「自分も沈んでしまう」と何度も思った。

やっとの思いでたどり着いた土手で「誰かボートを持っていないか。ボートがないと助けられない」と叫ぶと、ひとりの男性が「知っている人が持っている」と探しに行った。15分くらい待つ間がとても長く感じられた。さっそくそのボートに乗り込もうとすると、協力してくれた人に「ずいぶん長く水に入っていたのだから、あとは俺たちに任せろ」と言われた。すでに限界を感じていた渥美さんは、あとを任せてその場を去った。

救助活動の最中に土手に警察官が現れ、渥美さんに「もうやめろ。お前も死んじゃうぞ」と呼びかけた。渥美さんが「そんなこと言うならお前らが水に入って救助しろ」と怒鳴り返すと姿を消してしまった。それから土手に停まっていた高級車の持ち主に「濡れて震えている人を病院へ連れて行ってくれ」と頼むと、「汚れる」と拒否されたこともあった。こんな状況で協力できない人に本当に腹がたった。

翌日の早朝に再び土手に行くと、昨夜の壊れかけたボートを必死に直しているおじさんがいた。偶然にも顔見知りだった。応急修理したボートにふたりで乗って、釜、大街道方面に向かった。先に釜に住むおじさんの家族を捜したが、安否は分からなかった。渥美さんの自宅のところでも妻や孫は確認できなかった。その時隣の鉄工所の社長に「アパートの屋根に女の人と子どもがいる」といわれ、よく見ると近所の奥さんと子どもだった。二人を屋根から降ろしたが、ボートは穴が開いてきて大人2人が乗るのがやっとで連れて行くことが出来ないので近くの2階に避難している人に2人を預けた。

昼ごろ、大街道小学校に避難していた妻、弘子さんと再会した。孫はひと足先に長男が連れていった。無事弟宅に着いている事を願った。弘子さんをボートに乗せ、来た道順を戻る途中、「助けて、助けて」と女の子のか細い声が聞こえてきた。見上げると屋根の上に女の子。その子の脇と近くにいた女性と思われる2人は呼び掛けても応答はなかった。女の子を助けに行こうとブロック塀に上ったが、思いのほか高さがあって屋根に登れない。その時、とび職風の男性が身軽に屋根に上って女の子を降ろしてくれた。そこへ女の子の父親が「自分の子です」と駆け付け「自分は屋根の2人を何とかしなければならない。この子は釜小学校の先生に預けてほしい」という。しかし瓦礫で道路がふさがっているので、「釜小に寄ったら日が暮れてしまう。この子は私の弟宅に連れていくので落ち着いたら迎えに来てくれ」と告げた。ここにも渥美さんのとっさの判断があった。

弘子さんと救助した女の子と歩いていると、知らない女性が駆け寄って来て「おじさん、昨日は助けてもらってありがとう。最後に助けてもらったのは私です」と声を掛けられた。誰を助けたかはその場では覚えていないのでびっくりしたがうれしかった。

翌日、女の子は父親のもとに帰っていった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おとうさんの性格は一本気。その場に居合わせたら“やるしかない”と思うタイプ。でも私は今回の救助活動は偉大だったなあと思っています」

渥美さんの妻、弘子さんは今は荒れ地が広がる場所を案内しながら、そう語った。表彰されるきっかけは、仮設住宅でおばあちゃんが見回り隊の人に「うちの息子はこんなことをしたのよ」と話したことだった。しかし渥美さんは「俺はやるべきことをしただけ」と表彰されることには最後まで消極的だった。

手記の終わりに渥美さんは「あの場に居合わせた知らない人たちが協力してくれた。その方々にも感謝している」「他にも大勢の人が助けを求めていたが、救えなかったこと、流れて来た遺体の上にパレットを乗せて救助活動をしたこと、今思うとそればかりが心残りだ」「17〜18名の救助できた方々の倍以上の助けられなかった方々、本当に申し訳なく思っています」と書いている。

土手で弘子さんをインタビューしている時、偶然、ハワイ沖の渥美さんから携帯に電話がかかった。海の男を感じさせる野太い声が聞こえた。渥美さん一家は仮設住宅から内陸への集団移転を待っていた。流された自宅の土地は買い上げられるが、築13年の建物の補償はなくローンだけが残って、新しい家を建てれば二重ローンになる。不安な事がたくさんある。「しかしまだうちは13年間住んだのであきらめもつくが、建てて間もなく流された方々は大変気の毒だ。また魚市場や水産加工場なども流された。石巻は水産関係に従事していた方が多く、徐々に回復しつつあるが、そこが以前のように活性化すれば石巻の復興への源となると思う」と語った。

夫の命と引き換えに

夏の遅い午後、私は石巻市の津波に襲われた住宅街を訪ねた。ほとんどが更地になっており、1階は破壊されたものの2階が残った家が、津波の猛威を刻印したままところどころにさびしく点在している。その中の1軒で梶原貞子さん（61）は、家の補修工事をしていた。

「夫の勝雄さん（享年69歳）をここに連れて帰りたい」という思いが、二人の思い出がたくさん詰まった家を直すことに踏み切らせた。東京に就職した息子が改修費を応援してくれている。

自転車で40分の距離にある借り上げ仮設住宅に住んでいるが、「何もしないでボーッとしているとおかしくなるんです。ここに通って水に浸かった内壁をはがしたり、庭のヘドロを取ったりして、天国にいる夫に“今、うちを直しているのよ”と話しかけると心が落ち着くんです」

庭にはボランティアが植えていったヒマワリが太陽に向かって黄色い大きな花をたくさん咲かせていた。

「おじいちゃんはどこ？」。夫が助けた4歳だった子がママに目覚めると聞くという。貞子さんは「母子3人が屋根に乗ったアパートが家の前に流れて来なければ、夫は死ななかった」という思いにとらわれることがある。しかし、「助けた子どもが夫の命を受け継いでくれる」とも思うのだった。

3月11日、貞子さんは1階の台所でネギ味噌作りをしていた。地震に流しの縁につかまって立っているのがやっとだった。2度目の地震では尻もちをついた。食器棚が倒れた。隣の奥さんと娘さんと犬で、避難所に指定されている青葉中学に向かった。途中の橋のところで定年退職後、週4回働いている夫が車で戻ってきたので、家にいったん戻った。着替えをしている間に、海水が2階への階段の上段まで上がって来た。

外を見ると、流れに家の前に止めた車が向きを変えて瞬く間に見えなくなった。その時、尋常でない子どもの泣き声と「助けてー」という女性の声。4メートルの物干し竿が届きそうなところに流れて来たアパートの屋根に母親と4歳の男の子、8歳の女の子がしがみついていた。

シーツをつないで投げたが届かない。意を決したように勝雄さんは、2階のベランダから1階の雪で真白な屋根に出た。ツルツルで危うく滑りそうだった。屋根から、家のそばの電信柱に飛びついた勝雄さんに貞子さんが物干し竿を渡す。まず女の子が竿につかまって勝雄さんの方に来ようとしたが、手を離してしまった。勝雄さんはとっさに水に入り、女の子を助けた。

勝雄さんは着替えをしたあと再び電信柱に行き、母親に「飛び降りろ」と指示。「泳げない」という母親がやっと水に飛び込み、梶原さん宅の雨どいを伝わって家の中に。男の子は勝雄さんが抱えて泳ぎ、貞子さんに渡した。

しかしその時、勝雄さんの顔が真っ青になっていた。貞子さんは「来て、来て！」と叫んだ。やっと1

階の裏口に着いたが、戸が少ししか開かない。貞子さんは水に浸かりながら、勝雄さんのベルトをつかんでくるっと回しながら家の中に入れた。勝雄さんの顔は白くなっており、意識はもうろうとしていた。

2階への階段を貞子さんは、勝雄さんを引っ張り上げようとする。1段上げてもズルッと滑り落ちる。「何段か引き上げたが、夫は息を引き取ってしまった。その瞬間は鮮明に覚えている。とても忘れられない」。たんたんと顛末を語る貞子さんの悲しみが伝わって来て涙がこぼれた。

梶原勝雄さんは河北町（現在は石巻市河北）生まれ。鉄工所の溶接工をしていたが、温厚で優しい人だったという。お人よしで物売りが来ても断り切れない人。「この家だってセールスマンが売り込みに来て、断れずに造ったんです」と貞子さんは言い「私達は似たもの夫婦でした」とさびしそうに微笑んだ。

大津波は梶原さん夫婦の生活を裂いてしまったのだが、貞子さんは「せっかく助けた命。あの子たちは人生を大事に生きて欲しい」と願う日々だ。

前向きに、ひたむきに、たくましく

震災の時でも積極的人々を助け、めげずに対応した人は、復興への道もたくましく、したたかに進む。宮城エキスプレスの宇都宮博行代表取締役（62）はそんな人だった。

「とりあえず今回は生かされたから、後世に残ることをしなければと思う」。9億3,000万円もの損害を被ったのに、宇都宮さんはちっともめげていないのだ。宮城エキスプレス社は、北は岩手県宮古、釜石、大船渡、南は相馬港、三陸一円の水揚げされた鮮魚を翌日には北陸、名古屋、関西へ配送することをモットーに商売していた。また山陰、山陽、四国、九州一円へも中一日で配送していた。

しかし津波は、鉄筋コンクリート2階建て陸屋根の本社工場（冷凍・冷蔵庫や配送センター）の延べ3,314平方メートルを呑み尽した。

ところが宇都宮さんは工場を解体し、地元の人も使える5,000トンの冷蔵庫、配送センター、防災避難所、ヘリコプター離着陸場を備えた5階建ての建物の構想を描いた。総工費14億円。2012年3月には地鎮祭を行った。石巻市の基本は水産業だから、復興の「核」を作らなければという熱い思いがあった。

中小企業庁の補助金7億円と無利子融資3億円、日本政策金融公庫からの2億円と地元銀行からの2億円は優遇金利が適用された・・・。とにかく有能な行政書士にめぐりあえたので、使える制度には次々と分厚い申請書を出しまくったのだ。「災い転じて福となす」の格言を信じて、宇都宮さんはあと10年は懸命に働くつもりだ。

漁に出た船が戻ってきても、保管能力、輸送体制がなければ漁業は成り立たない。昨年も今年もカツオ船が戻って来たが、態勢は整っていなかった。だからこそ冷蔵庫と配送センターは復興の「核」として、なくてはならない。宇都宮さんは新工場施設の報告会を盛大に開いた。県知事は忙しくて来れなかったが、市長や県議5人も参加し、関係者の間から「すごいことをやるんだな」との声が上がった。

私が訪れた時、巨大な新工場はほぼ立ちあがり、完成を急いでいた。最新鋭の設備を備えた素晴らしい建物は、被災地の明るい未来を示すかのように輝いて見えた。

3.11の日からしばらく宮城エキスプレスは、被災者のために懸命に動いた。やや高台にあるトラックの駐車場、洗車場、整備場に大勢の人々が津波を逃れて来たのだ。ボー然としている人々に宇都宮さんは気合を入れた。流されて来た人や車の中から助けを求める人を従業員は、一丸となって腰まで水につかりながら20人ほど救い出した。全身ずぶぬれの人たち、けが人、老人、子どもたち。避難者はおよそ200人はいただろうか。事務所の毛布や作業服を着せ、ドラム缶10本程を切断して火を焚いて暖を取るように指示し、怪我した人などはマイクロバスが1台あったのでエンジンをかけて暖かくし、そこで休ませた。トラックの荷台も開放し、冷蔵庫のスイッチを暖房にした。

流れてきたスーパーの食品を拾い集めて配り、大型保冷車に積んであった海産物を放出。少しの米もおかゆにして分け合って食べ、地下水もポンプで汲み上げた。3日ほどで多くの人は避難所に移って行ったが、50人くらいの人が1か月くらい残っていたという。ガソリンや軽油の配給は細々で心も折れかけたころ、地震保険が出ることが分かった。

宇都宮さんは、平成6年4月に役員をしていた会社から分社して宮城エキスプレスを創った。そのころ借金が8億2,000万円ほどあり、やっと会社が黒字になった平成9年に取引銀行が破たんして、それ以来、銀行取引なしで会社を経営してきた。延滞金も含め借金を10年間も支払い続け、やっと会社が安定軌道に乗った時に東日本大震災に見舞われた。しかし宇都宮さんは常に前向きにひたむきに進む。どんな事態になっても、はね返すバネがある宇都宮さんのような人が被災地だけでなく日本の再生に必要だと思った。

目の見えない僕でも

15、6年前から少しずつ目が見えなくなった阿部久さんは、自分も被災者であるにもかかわらず支援活動に活躍した。失明してから事業を大きくした精神力と行動力が震災でも発揮されたのだった。

「五体満足の人はもっと頑張ってください」。阿部さんは取引先など仕事に関係ある電話番号は、全て記憶していて携帯でどんどん話をして仕事を進める。妻、恵美さんがいつも一緒で補助役だ。

阿部さんは青森に本社を置く（株）さ印さんりくを経営し、災害時は同社石巻工場にいた。

阿部さん夫妻は津波が来た後、無我夢中で避難所に逃れたが、寒くて車の中で2晩を過ごした。石巻の自宅が全壊しているのを確認して山形県へ。ホテルで1泊して秋田県経由で、ガソリンを満タンにしながら青森の本社に戻った。電話で段取りしてカセットコンロ、ボンベ、カップラーメン、懐中電灯・・・・等の支援物資を青森と北海道で若い社員に集めさせた。

また水が不可欠と思い、サカナを入れる1トンの水槽を洗わせ、真水を入れた。そうした水槽も14、5個トラックで宮城県石巻市まで運んだ。避難所になっている小学校に「水をあげる」と言うと「プールの水がある」という。「そんなの飲めないじゃない。こっちは消毒した水槽の水だよ」と言うと「あっちに話を通さないと・・・」と、散々待たされた。ところが次の日に行くと1トンの水はスッカラカンになっていた。

恵美さんの実家のある渡波地区にフォークリフトで水を下した後、阿部さんの実家のある十三浜地区に行ったら、大変なことになっていて、恵美さんは運転しながら泣いたという。

仙台のホテルで6月21日に阿部さんの還暦祝いをするために用意していた300万円を支援物資に使うことにした。無理を言って調達したカップラーメン1,000ケース（12個入り）などを大型トラック1台、4トントラック1台で、避難所だけでなく1軒、1軒配った。

その後、「復興阿部企画」という子会社を設立、人々の足として便利な中古バイクを売り、漁民には船を用意した。阿部さんは北海道漁連の入札権を持っているので羅臼、函館を回り、中古船を買ったり、寄付してもらい、函館の造船所で、ワカメを吊ったりするロープの設備や水槽用のカメを設置してすぐ使えるように改造した。阿部さんは今、何が必要かを考える人なのだ。

瓦礫とヘドロの処理も自衛隊を頼りにして自分でしようとしない人が多い中、阿部さんは重機を持ってきて自分の会社で行った。「私も仮設住宅にいるが、失業保険をもらって働かない人が多いから日本は駄目になる」と少しでも自力で立ち上がることが大切だと、阿部さんは言う。

そこで阿部さんは仮設住宅に大型コンテナを持って行って、お年寄りたちに内職をしてもらおうと思った。コンテナの中でワカメの芯を取って葉だけにする仕事をすれば、1日1,000円でも2,000円でも稼ぐことが出来る。生きがいが出来れば健康になる。しかし「コンテナワカメプロジェクト」のような計画には助成金がなかった。阿部さんは霞が関にも2、3回行ったが、大変な分量の書類を書かないと申請できないと分かり、あまりにも煩雑なのであきらめたという。

現金でなければ魚を売ってくれない時期を乗り越えて、宮城県漁連の権利などを取得して、苦労を重ねて事業を大きくしてきた阿部さんは、中途失明というハードルも越えたから、未曾有の震災も克服して進む。だからこそ仮設住宅に住む人たちが内職出来る場を作るといった現場に即した助成制度の必要性が分かる。

先日、地元出身の安住財務大臣（当時）が「宮城県に170億円つけた」と得意そうに喋っているのを聞いて阿部さんは「おれ達から取った税金だろ。自分のカネをつけたみたいに言うな」とむしょうに腹

が立ち言い返したという。

中国人研修生を助けて

2012年夏、尖閣列島をめぐって日中関係がきしみ、反日デモがかつてない激しさと広がりを見せた。しかしそうした側面だけを見ては両国関係の将来を踏み間違えてしまうだろう。

その前年の3月、東日本大震災で宮城県牡鹿郡女川町は死者474人、行方不明者180人を出す悲劇に襲われた。港に近い女川町宮ケ崎の水産加工会社、佐藤水産の専務、佐藤充さん（享年55歳）は、ウニの加工で同社に来ていた総勢20人の中国人研修生を高台の神社に避難させた後、会社に戻り、津波に呑まれた。この様子を研修生が神社への坂道から撮影し、その映像がパソコンを通じて中国のメディアに流れた。佐藤充さんは中国で“英雄”と報道され感謝されたのだった。

山に囲まれた湾の海べりに魚市場や水産加工会社が立ち並び、そのさらに回りに商店街や住宅が建っていたかつても面影は今やない。瓦礫が積み上げられた場所と草ぼうぼうの広場のところどころに、新たな水産加工団地と冷蔵庫の高い建物が建設中なのが復興の兆しを象徴している。約22メートルの建物の最上階や屋上は、同様の津波が来たら逃げる場所として設計されている。

そうした冷蔵庫ビルの脇にあるプレハブの2階に佐藤水産の事務所を訪ねた。佐藤充専務の兄、佐藤仁社長が言う。「3.11の日は金曜日で工場はおやすみ。宿舎にいた研修生の中には、市内に買い物に行った研修生もいた。弟は宿舎の研修生を先行避難させた後、買い物帰りを避難させ会社に戻ったようだ」。買い物帰りの研修生は、中国へのお土産にデジタル撮影機を買っていた。その撮影機で神社の石段から、津波が次々と工場や寮を襲っている様相を撮っていたら、充専務が工場の傍にいるのが見え、その後、工場の屋根に逃げた姿が映ったという。「専務さん」と研修生が懸命に叫んでいる声が録音されている。

「弟は中国に何回も行って冷凍赤貝やその他にシャコ・エビ、生うにを輸入していたから、中国語も何となく喋れた。それで研修生をなにくれとなく世話していたのですよ」。右腕の弟を失った社長は、同社で働いている甥が「弟に良く似ているんだ」と何度も繰り返した。

研修生が撮った映像は中国の友達に送信され、その友達から中国の派遣会社経由で、中国のテレビ局が放送し、「日本人が中国人を助けた」と反響を呼んだ。その放送が日本に伝わり、3月14、15日にはテレビクルー10数人が佐藤水産に殺到する騒ぎになった。

中国では大連の研修生派遣元企業に「日本がんばれコーナー」が設置され、中国大使館の手配で帰国した研修生が女川での写真や千羽鶴を飾り、義援金集めが行われたという。

佐藤充専務が両親や兄の無事を確認したあと会社に戻った理由は判然としないが、救助活動をしていた元消防団員の社員と、会社の戸締りをしていた社員を避難させようとしたのではないかと見られている。佐藤水産では充専務を含む社員三人が犠牲になり、ほぼ1カ月後に遺体で発見された。

工場も事務所も津波に流された佐藤水産は、再建に立ちあがった40数社（かつては60数社）とともに女川の復興を目指す。中国からの研修生も再び来日しており、14年ほどに渡る交流の歴史はこれからも継続する見通しだ。

人間らしく魅力的に自立を

岩手県陸前高田市の八木澤商店の河野和義会長（68）が、社会貢献支援財団の表彰式典で受賞者代表として挨拶された時、その迫力と故郷を思う激しい気持ちに私は圧倒された。ふるさとなまりのある言葉の説得力が、たくまずして生まれた間（ま）の取り方で心に響き、その語り口は私を魅了し、中央集権に対して地方の自立を求める強い意志表明を感じさせたのだった。

「あの河野会長と沢山、話してみたい」と女川町から山道を急いだ。途中でレンタカーのタイヤがパンクしたため、八木澤商店が仮の本社を置いている内陸の一関市大東町摺沢に着いたのはもう夕方近く。しかし待っていてくれた河野会長は、話せば話すほど地元を大事にし、地域の活性化に積極的に取り組んでいる人だった。

政治が混迷し、政治家への期待がしぼんでしまった今、河野会長の言うように「政治家などに頼らず自立する」しかないのだろう。震災は日本の現状の問題点をさらけ出した。後で振り返れば今は日本の転機だったとなるだろう。地方という小さな単位で民主主義が実現すれば、国レベルでも民主主義は可能になるに違いない。震災で価値感を変えた河野会長のような人々が今後、日本人にとって道しるべになると思った。

震災の当日、河野さんは東京にいて3日後に陸前高田市に戻った。家族もパートを入れて40人の社員も1人の幹部社員を除いて助かっていた。その幹部社員は消防団員で水門を閉めに行って帰らぬ人となった。また2月末で辞めた東京農大の研修生が、まだ陸前高田市のアパートにいて流されてしまった。

1807年創業の八木澤商店は、陸前高田の海岸沿いにナマコ壁の土蔵に囲まれた醸造工場があったが、全て壊滅し、値がつけられない土蔵を除いて2億円以上の被害を蒙っており、残ったのは内陸に営業に出掛けていたトラック2台だけだった。

3月中、河野さんは「どうやって200年続いた商店の歴史を閉じようか」とばかり考えていた。しかし陸前高田市は113人の職員を失って住民サービスがストップしていた。戸別配達で地元の事情に詳しい八木澤商店の出番だった。社員のうち25人が家を流され、10人は家族の誰かが亡くなっていたが、建物は残ったものの電気や水が止まった家に社員たちは、水や食料を配って歩いた。高台にあった高田自動車学校の協力で支援物資センターが作られ、全国から物資が送られて来た。社員たちは業務として同センターに出勤して朝から晩まで約1か月半に渡って活動した。

全て流された八木澤商店のそうした活動に「八木澤らしいや」と評価が高まり、感謝されたことで社員に笑顔が戻った。八木澤商店の家訓は「地域に役立つことをせよ」だった。自前の田畑3ヘクタール半で採れた米、野菜をメインに経営者も社員も同じ食事を摂るのが長年の習わしだった。

3月31日夜、河野さんは息子の通洋さん（39）と一緒に2月の残業手当と3月分の給料袋を作り、4月1日から息子に社長を譲ることにした。かたちあるものは流れたが、人は残った。伝統もある。技術もある。息子は「オヤジ、やるぞ」と言った。社員だけでなくパートもアルバイトも呼んで、息子は再起を宣言。採用内定者も呼んでおり「車2台しかない会社に入社する気があるの」と念を押した。採用を取り消さなかったことに息子は「オヤジ、俺に何を教えた。信用を守る、約束を守ることを教えただろ」と言った。

他社に「八木澤ブランド」で醤油を製造してもらい5月2日に営業を再開した。また奇蹟もあった。震災2か月前に釜石市にある岩手県海洋微生物研究センターの人が、八木澤商店から持って行ったモロミが4キロ以上も海水をかぶらずに残っていたのだった。八木澤商店のモロミの酵母菌と海の微生物を合わせるとガンの特効薬になるかもしれないという発想だった。

八木澤商店が再起するというニュースを知った海洋微生物研究センターの職員が、「あのモロミが役立つかもしれない」とセンターの2階のロッカーの一番上に置いたモロミを探しに行ったら、なんとそのロッカーだけが倒れず、海水も上の方はかぶっていなかったのだ。河野さんは「あきらめずに動き出したことが奇蹟につながった。200年の味が復活できる」と、奮い立った。

だからかつて200アイテムあった商品が4アイテムしかなくても「4つも売るものがあるぞ」と思う。品評会でいつも1、2位を争った秋田の安藤醸造も協力してくれた。醤油、味噌、めんつゆ、ドレッシング…と製造のアイテムを増やしつつ地域の廃校となった大原小学校の跡地に立派な工場を建築中だ。

数年、アメリカで勉強した現社長の通洋さんがファンドを立ち上げると言いだした時には、村上ファンドを思い出し、「何もなくなった会社に誰が投資するものか」と反論した。しかし1口1万円で半分が出資金、半分が寄付というミュージックセキュリティーズがマネージャーのファンドには出資金が殺到し、2か月で5,000万円を達成した。サッカーのサポーターのように2、30歳代の若者が1口、2口と振り込んできたのだった。糸井重里さんがブログに「今の日本では、ちょっとおかしくなると大きな会社は人を切る。ところが何もなくなったのに新入社員まで入れた小さな会社があるよ」と書いたのが後押ししてくれたという。

義援金も2,000万円ほど集まり、取引先も応援してくれた。「日本はまだまだ大丈夫だ」と河野さんは実感した。見ず知らずの福井県の書家、笠廣舟さんが「自由に使ってください」と色紙を沢山送ってきた。その書が「和の心」「ゆっくりのんびりと」などという醤油の名前に採用されている。

表彰式典でのあいさつで河野会長は「方言でやります」と言い、地域で読まれている詩（地元の匠印刷社長作）を朗読した。大学の非常勤講師として地元学（楽）を教えてもいるという河野さんの考えの根本は「ないものねだりをせず、あるものをさがして、みんなでつくろう」というものだ。世界中から物を輸入して過剰消費に走りながら、それでも常に欲求不満の現代人の対極にある生き方が地元学なのだ。方言は地元を思う気持ちを表すのに最適だった。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

おらぁやっぱりこごがいい
大津波で全部なぐなっても
地震でぼっこっされでも
やっぱこの街が好ぎだ
やっぱここに居だい
こごぁ一番だ
二度と同じげしぎゃ見れねぁども
二度と同じ建物ぁただねぁべども
おらどの目にぁしっかり焼ぎついでいる
わっせるごどねぁ　あの景色
おらどの街
やっぱりこごがいい

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

故郷を愛するがゆえに河野さんは、故郷に帰れない福島の人に申し訳ないという気持ちになる。「原発が良いの悪いのいう前に人に故郷を奪う権利はありませんよ。想定外なんてよくも恥ずかしくもなく言う。人災ですよ」。原発の電気を使っていると言われないため、河野さんは間伐材でバイオマス発電にも取り組む考えだ。

よし！前を向こう！保育園を再開

死者767人、行方不明者952人を出した岩手県上閉伊郡大槌町。海に近いエリアはまだほとんど復興していないが、津波に襲われなかった山際に仮設プレハブ園舎で再開した大槌保育園を訪ねた。園児113人のうち親御さんに引き渡した70人のうち9人が死亡・行方不明になった。八木澤弓美子園長は、それを悔み悩んだ。引き渡さなかった園児はおぶったり、抱えて山の斜面を登り、全員が命拾いした。

八木澤園長は遺体の検索や安置所を巡る中で、変わり果てた子どもとの再会に「なぜ津波が来る前に返してしまったのだろう。自分がもう少し早く状況を確認しておれば一緒に逃げたはず・・・」と、深い悲しみと絶望に襲われた。

そんな中、バラバラになっていた職員たちと再会し、「園長ひとりが抱えることじゃない」と励まされた。老人ホームで働いている娘さんに「あんたさー。泣いているヒマないんだよー」と気合を入れられた。その時は鬼娘と思ったが、後で聞くとあのころお母さんが本当に駄目になりそうで、どこかに行きそうで怖かったから強い言葉を吐いたという。

カッパを着て、ほう被りし保育園の泥出しを始めた。半月ほどした4月中旬からボランティアも手伝ってくれてあらかたキレイになった時、役場から「1回、津波を被ったところでの再開は駄目」と言われた。川筋を山側に車で15分ほど走ったところの地主が、土地を貸してくれることになった。

日本ユニセフ協会（国際連合児童基金の日本における募金などの団体）からかなり前の4月2日に支援を受けたらという話があったのを思い出し、「もう何か月もたったから無理かな」と思いながらも盛岡の事務所に連絡した。すると東京ではちょうど理事会かなにかをやっていたらしく、すぐ支援OKの返事がきた。難しい申請書類も必要なく「プレハブ施設。机がいくつ、イスがいくつ、パソコン、プリンター」と欲しいものを書いて出せばよかった。

「地元で調達しなさい」ということなので、自分たちで買いそろえた。地元経済の振興にも貢献するというのがユニセフのポリシーで、「東日本大震災の募金は他に流用しない。経費は15％取る。ずるずる援助すると自立しないから1年限りの援助」と明確だった。

6月1日に再開した大槌保育園では、青いユニセフワッペンが援助で買ったものには全て貼ってある。大槌保育園がユニセフの援助を受けたことが、目に見える化されており、「これならまた募金したくなる」と思った。

話は余談になるが、日本赤十字社や中央募金会への何千億円もの義援金はどのように使われたのか、よくわからない。配分に時間がかかり、なかなか被災者に届かないことが問題になり、多くの人が「もう日本赤十字などにはお金を送らない」と怒っている。

9月、毎日新聞に7段分の日本赤十字の義援金に関するお知らせ広告が載っていたが、その内容は全く具体性に乏しく、以下のようなものだった。「被災地の子どもにたちに笑顔を　北海道でサマーキャンプを開催」「安全・安心のために食品放射能測定器を109台整備」「震災によりストレスを受けた高齢者の方の、こころのケア」という3枚の写真付きで、「東日本大震災から一年半。日本赤十字社からあらためて、お伝えしたい感謝と決意です」というタイトル。「義援金」の受付・送金状況などが小さな文字で記載されている。それによると、2012年8月29日現在、中央共同募金会受け付け分を含む義援金総額は3,604億円。被災された15都道府県への送金が3,558億円。被災された方への配付が3,187億円で、手数料などはいただいていないとしている。主な事業内容として仮設住宅居住者への家電6点セット寄贈などが列記されていた。

こういうのをおざなり報告というのだろう。片品村の千明村長は、10万円以上お金を送ってくれた人には感謝状をもって挨拶に行っていた。そこまでしなくても日本赤十字社は記者会見して、被災県に配分したとしても、あとは県の勝手というのではなく、義援金の使われ方を末端までフォローして発表すべきではないか。「人間を救うのは、人間だ」というキャッチフレーズも記載されているが、こんなに多額の義援金を送った人々には、どのようにお金が使われたのかもっと具体的に報告すべきではないか。義援金の受付を2013年3月末まで延長しますとも述べているが、なにか心が感じられない。

日本に寄付文化が根付かないのは、所得税の寄付金控除が認められる寄付先が、日本赤十字社などに数少なく限定され、しかもそうした寄付先が、寄付金がどのように使われたかの見える化を怠っているからと、青いユニセフのワッペンを見て感じたのだった。

またユニセフは複雑な手続きがなく、すぐに大槌保育園にたいする援助を決めた。時と場合によってはスピードが求められる。日本は様々な助成金、補助金の申請書類は大量、煩雑を極める。だから一般の市民や中小企業はあきらめてしまう。国民の税金を使うのに国民の立場に立った制度になっていないのは、義援金の使途が見えないことと共通する問題点があると言えるのだ。

さて八木澤園長は3.11の震災で、子どもたちが子どもなりに一大事と分かっていたことを知った。1歳2カ月の泣き出すと手に負えないわがままな女の子が、まったく泣かなかった。食べ物が足りないとお皿をたたく子がおとなしく、どの子ももらったポテトチップスとポッキーを分けると礼儀正しく1枚ずつ食べた。夕方に一緒に横になって「おやすみなさい」と言う時、誰かが「ママ」と泣きだし、みんな一斉に泣きだすのではないか恐れたが、誰もママとも言わず、泣きもしなかった。

3月11日午後2時46分、小刻みに揺れ始め、だんだん揺れが大きくなった。園庭が地割れ。お昼寝から起きた子らが泣いた。「大津波警報―」といって防災無線がプッと切れた。「これはただごとじゃない」。避難訓練の時にはいつも「足が痛い」「靴が脱げた」などという子どもたちも真剣に走り、先生たちも小さな子をおぶり、カートに乗せて高台にあるローソンに向かった。迎えに来た保護者に子どもを渡していると、遠く沿岸に見える水門付近が砂煙で茶色に変色、並行に並んだ電信柱がゆっくり次々と倒れていくのが見えた。

こうして始まった津波からの脱出。より高い場所へと逃れる時、バキバキという今まで聞いたことのない爆音が聞こえ、国道を走り、子ども背負って山の急斜面を四つん這いになって登ったのだった。山頂の急斜面で足を踏ん張り、子どもたちを囲んで温め合う。余震が断続的に起き、気温が下がっていく。火災が町に広がりプロパンガスの爆発音が聞こえる。

暗くなる前に山を下りたら南部屋産業という棚を作ったり、ストーブを扱う会社が「寒いからうちに入っていいよ」という。中に入ると溺れかけたおばあちゃんが、真っ黒になって横たわり、オェー、オェーと吐いていた。反射式石油ストーブで暖を取っていると、「小槌川の瓦礫を伝わって火事がこっちに向かっている」という。消防車1台、救急車1台が来て、子どもたちを優先に大槌弓道場に誘導することになった。

「後から行くから絶対に離れないでね」と子どもたちを送りだした。南部屋産業が「ストーブ持っていけ」「絨毯も持って行っていいぞ」という。保育園の主任の旦那の軽トラックに積んで弓道場に向かった。

地域の炊き出しでゴルフボールくらいのおにぎりが配られた。「すごくおいしいね」と1個ずつ子どもたちに食べさせた。土の上にビニールシートが敷いてあるだけなのでとても寒い。人肌で温めようと円陣を組んで足の間に子どもを入れた。それでも凍えそうで、更衣室みたいなところを見つけて移動した。ストーブ1台を他の人に残して2台持って行く。アコーデオンカーテンで仕切って、結構、暖をとれた。

余震が来るたびにストーブを消したりして、次の朝はローソンの人にもらったお菓子を分けた。昼ごろお弁当6個が配られ、子どもたちを6グループに分けて、小鳥のエサやりのように食べさせた。「野菜嫌い」という子も食べた。「オカカの海苔弁でタラのフライ、きんぴら、ホウレンソウ・・・よく覚えているでしょう」と八木澤園長は笑った。

1歳2カ月の子がカスを指で集め食べていた光景を見て、八木澤園長は「人ってどんな状況でも生きれるんだなと思った」という。2日目の夕方から父母が迎えに来て3日目には全員がお父さん、お母さんに引き取られて行った。

無我夢中の3日間のあと、八木澤園長の苦悩の日々が始まった。自分の家、職員の家を確かめると、ほとんどが何もなかった。行方不明の子を探しに避難所を回る。「だれだれちゃんが上がったらしい」と聞いて遺体安置所に行くと、何百という遺体がビニールシートの上に並んでいる。その中にズボンが脱げて防災頭巾が横に置いてある子どもの遺体。ひとり亡くなっても大変なことなのにごろごろ寝ているのが信じられない。

5月の連休前に自衛隊がまた遺体を見つけたというので行ってみると、お母さん、お兄ちゃん、お姉ちゃんの3人。でも園児のその子が見つからないので手伝って掘っていると、遠くで手首だけが見つかったという。見た瞬間、爪の形とかでその子だと分かった。ローソンに母親が迎えに来た時に、「こわい。こわい」と八木澤園長の左足にしがみついた子だった。「ほら、お兄ちゃん、お姉ちゃんも乗っているよ」とママの車に乗せた子なのだ。「“城山の避難所に行く”と言っていたが、私がもっと厳しく状況判断をすべきだった」と八木澤園長は悔やむ。

眠れない日々が続いたが、会えなかった職員が無事で「ああ、職員を抱えているのだ」と気付かされた。娘に気合を入れられ、全国の人が何より子どもたちのことを心配し、応援してくれることに大槌保育園再開へと心が定まっていった。今は仮設園舎だが、八木澤園長は「ゼロ歳児から5歳までの大事な期間をお預かりしている」と前以上に強く思っている。2011年10月中旬に親子遠足を企画した時、ひとりの子が「行かない」と言いだした。みんなで話し合うと、子どもたちの口から初めて亡くなった子どもたちの名前が出た。全員で泣きながら「自分たちが頑張ればお空から応援してくれるんだよ」と話した。

八木澤園長と担任は「この子たちと正面から向き合わなくては」と感じたのだった。

郷土を守ろうとした心

「東日本大震災大津波で大人の犠牲者が多く見られるのは、津波はここまでは襲来しないだろう、昔の津波はここまでは来なかった等、思い込みや言い伝えを信じて犠牲になった人が多いのです。この様な大人の犠牲を無くす為にも、大人に対する防災教育は喫緊の課題です。大人はあらゆる自然災害に対し想定外を想定し、自ら生き延びる術を身につけなければならないと強く思います」

岩手県の大槌町消防団第二分団は水門扉門を閉鎖後、老人を救助中に津波に呑まれた第二分団分団長、越田弘さん（63）をはじめ41人の分団員のうち11人が死亡・行方不明となった。「住民が逃げないと逃げられない」という郷土を守ろうという心が消防団には強い。だからこそ子どもたちへの防災教育の重要性を指摘しながらも、大人には「想定外を想定すべき」と訴えるのだ。命をかけて救助活動をした経験は、「想定外」という言い訳の横行を許さない。

津波の浸水域から遠くに作られた仮設の大槌保育園は稲田や畑が広がるのどかな山間にあったが、第二分団第一部長、鈴木亨さんと会った大槌湾岸は、道路脇にプレハブの復興食堂などがチラホラ建っているだけで、まだ津波の猛威を物語る荒涼たる荒れ地が続いていた。

大槌町消防団員は地震が発生し、津波が予想される場合は、水門扉門を閉めに行くことになっている。漁協に勤めていた鈴木さんは「これは津波がくる」と思い、揺れが収まらないうちに近くの水門に行って閉めてから自宅で救命胴着を着て、消防屯所に行った。消防車に乗り、さらに3カ所の水門を閉め終わったのが午後3時4分。住民に避難指示したり、う回路の標識を立てたりしていると、大槌川堤防を越えてくる津波が見えた。消防車に飛び乗ると、真っ黒い津波がバックミラー越しに迫って来ていて、あと何秒か逃げるのが遅れたら命は危なかったという。

鈴木さんは最初に閉めた水門に案内してくれた。頑丈な水門が壊れ無残な姿をさらしていた。「僕は高台で津波が見えた場所に居たから助かったが、堤防や水門で津波が見えなかった人が死んだ。津波から命を守るには逃げるのが一番だ」と、鈴木さんは堤防や水門に依存することの矛盾を悔しそうに指摘したのだった。

堤防の内側で寝たきり者を救助中の5人と避難誘導中の5人の第二分団員が死んだ。もう1人は津波が見えていながら、半鐘を鳴らし続けて亡くなった越田冨士夫さん（57）だった。越田さんについては毎日新聞が報道しているのですこし長くなるが引用する。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おめぇ屯所でサイレン鳴ぁせ」。14カ所ある門扉の1カ所を閉め終わったところで、団員の飛内邦男さん（55）は越田さんからそう指示された。

津波が迫っていた。飛内さんはサイレンを鳴らすため近くの分団屯所へ車で向かった。スイッチは1階。ボタンを押した。鳴らない。地震で町全域が停電し装置が作動しなかった。

間もなくして越田さんが屯所にやってきた。状況を報告すると越田さんは「よぉす」と一声。屯所の屋上に上がり叫んだ。「早ぐ行げ。みんなを避難させろ」その時飛内さんは、越田さんが普段は火の見やぐらから外してある半鐘を手にしているのを見た。これが最後の姿だった。

「カン、カン、カン」大災害時にだけ使用が許可されている特別な鐘。その乾いた音は遠くまで響いた。当時、数百メートル離れた高台に避難していた元分団長、東梅武保さん（72）は「海の様子が見えていたんではないか。何とも寂しい音だった。今も耳から離れね」

——————中略——————

津波が引くと、屯所は建物の基礎部分だけを残し消えていた。変形した屯所のやぐらが、がれきの中から見つかったのは10日後のことだ。越田さんと半鐘の行方は、今も分かっていない。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

鈴木さんによると、越田さんは大工だが、津波当時は造り酒屋に勤め消防団員をしていた。職人気質で真面目。消防活動の時は「きちんと帽子をかぶれ」等と後輩を指導していた。消防団員の身分は非常勤特別職の地方公務員で、市町村が設置・管理する。大槌町の場合は年間の報酬が約2万円で、出動手当が1回1,900円だった。処遇から見るとボランティアみたいで、地域を守ろうという気持ちが強い人が手をあげる。しかし団員になる人が減っているのが現状だ。

「消防署は交代で勤務するけど、消防団は365日24時間待機。もっと身分保障が欲しい。外国なんか消防団員になると、住民税が軽減されたりする。国は装備の充実なんて言っているが、消防団員になる人の気持ちを考えないと消防団は縮小してしまうだろ」と鈴木さんは訴えた。

地域に密着した消防団はいつでも最初に災害現場に駆け付け、最後まで活動することを義務づけられている。東日本大震災でも1年後までに公務災害で死亡と認定された消防団員は252人に上った。

地域社会が崩壊しつつあると言われる現状。自分たちの安全は自分たちで守るという消防団の活動と精神は貴重なものだが、1940年代には200万人を越えていたのが、今や88万人レベル。郷土を守る心をもう一度大切にし、見直すことが日本を素晴らしい国に再生するだろう。

千年に一度の対応を（南三陸ホテル観洋）

全面ガラス張りの5階ロビーから美しい南三陸の海が見渡せる。下をのぞくと岩場に波が打ち寄せ、白く砕け散っている。高台にあったため津波は10階建ての南三陸ホテル観洋（244室）の2階の大浴場まで達し、浴室の大きく分厚いガラスを粉々にした。

大震災の時はロビーにいて、土煙りを上げて町の中心部を津波が襲っていくのを目の当たりにした女将、阿部憲子さんは、震災に負けず立ち上がったアイデア一杯の行動力のある人だった。その女将がいう。

「千年に一度という災害なのだから、国には、千年に一度の対応をしてほしい」

未曾有の惨事だというのに行政の対応は遅く、硬直化していて知恵も搾らないのだ。それに比べ女将は「取れる責任は全て私が取る」と、やれることには全て挑戦していった。

地震では地盤が強固だったので売店の陳列品一つ倒れなかった。客室も宴会場も被害がない。地震発生直後から、地域の人たちがホテルを頼ってきた。若い女性が泣き崩れる。女将は「ライフラインが止まり、この施設は孤立しました。でも心を強く持って。最善を尽くします。おにぎりが1個しかなければ半分にして配ります。あわてないで」とメッセージを発信した。震災当日はお客様と住民と約350人がいた。ホテルゆえ冷蔵庫にはかなりの食材が保管してある。1週間持たせるようにと調理場に献立を考えさせた。

女将が苦労したのは水の確保だった。瓦礫で道が寸断されたり、橋が流されていたものの4日ほどで緊急車両が通れるようになり孤立は解消された。しかし水は止まったまま。4階の予備の、小さなタンクの水を細々と使ってしのぐしかなかった。掃除の水も川から汲み、雨が降るとバケツや桶に貯めた。役場に仮通水を頼んだが無理だという。3月19日になって給水車（20トン）がやっと来た。風呂の重油ボイラーは動いたので、近所の人も招いて喜ばれた。5月初めまで交渉に交渉を重ね、40トン、60トン、80トンと給水を増やしてもらった。

他の地区の公的避難所には自衛隊の給水車が定時で回っていたが、ホテル観洋は民間ということで常に後回しだった。公的避難所にはペットボトルが山のように積んであるので、ホテル観洋に避難していた人が行政へ直接文句を言ったらようやく「ひとり1本なら渡します」となった。

水不足で洗濯は川でしていたが寒い。婦人団体のボランティアが、洗濯袋に入れて仙台まで持って行くと、洗ってくれたりした。

ホテル観洋は5月5日から二次避難所に指定され、それまでインフラ工事関係者と住民350人から500人だったが、被災者600人を受け入れ1,000名が滞在することになった。ホテルは1日300トンの水が必要なので、海水の淡水化装置を6月末から稼働させて80トンを更に確保した。この装置は民間会社が、3月末には30数市町村に「淡水化システムを貸し出せます」と連絡したが、どこも手をあげず利用されていなかったものだ。民間企業や日本財団の応援で、淡水化装置を2基設置することにしたが、行政は「誰が責任を取るんですか。水を民間が扱うのは駄目」という。女将は「責任は私が取る」と押し切った。毎日やっと風呂、トイレが不自由なく使えるようになった。

「公的避難所では当初、新聞紙やカーテンにくるまって寝たりしていた。私達、ホテル・旅館は寝具を持っているし、食糧の備蓄もある。災害時にはホテル・旅館を活かすことをもっと研究すべきですよ。小学校の体育館など公的避難所では、トイレの前や玄関口が割り当てられた人もいる。プレハブ仮設住宅も心がなさすぎ。配管が凍るし、風呂も入っているうちにさめてしまう。私どもから仮設に移動した人が落胆していた」

ホテル観洋に避難していた人々は、人間らしい生活が送れた。部屋にこもりきりになると、精神的に参ってしまう人も出るので、お芝居、歌、コンサート、手芸、お茶飲み会と沢山のイベントを企画したら、避難者の人々の顔の表情が少しずつ和らいでいった。

6月19日にホテル内に寺子屋がオープンし、10月までに受講者が100人を越えた。学業の遅れを心配する親御さんたちはとても喜んだ。9月21日からは無料のそろばん塾も。英語塾はボランティアの大学生や外国人が先生。8月13日には支援された浴衣で15人の成人式。震災から4か月過ぎたある日、被災住民の方からホテルの大きな会場の舞台裏に呼ばれた女将は、幕が上がって、各フロア毎の被災者からサプライズで感謝の色紙をもらって感動したのだった。

そして女将は「あまりにも、地元の民間企業が守られていない」と憤りを感じている。解雇された従業員には失業保険の再延長もあるが、民間企業（経営者）には何の補償もなく、やっと立ち上がったら、すぐ固定資産税を払えという。役場の臨時雇用の待遇が良いので、太刀打ちできない。新規の会社なら5年間無税だし、内陸に作られるので人々はそちらに流れて行く。

「もう町内の100数社が廃業に追い込まれました。行政のミスマッチの制度にはあきれました。国の役割がきちんと果たされていなかったことは復興庁が11カ月もたってから出来たことに象徴されています。千年に一度の対応が求められているのにまるで平時のよう」

商店が再開し、雇用が生まれ人が残らなければ、南三陸町の復興は危ういと、女将は危惧する。4月23日には紙皿と紙コップで食事処をオープンさせた。店舗がなくても納品しますという酒屋、八百屋が出てきた。無理しても動けば、助け合いの精神も生まれ、南三陸町復興へみんなが前を向く。仮設住宅に巡回バスを出し、60歳以上の南三陸町民は月に10日は無料で風呂に招待し、観光客には語り部バスを出して、町内の主な被災場所を回るツアーも実施している。観光客でも外国の人でも実情を知ってもらうことで、人口流出が進んだ南三陸町の交流人口を増やし、地元の一次、二次、三次産業の方々に、再び立ち上がる勇気や希望を与えることが出来る、と女将は信じて一生懸命なのだ。

南三陸ホテル観洋から仙台に向かうバスを、従業員と共に見送っていた女将は、バスが山道で見えなくなるまで手を振り続けていた。

医療崩壊と闘う――箱もの行政への疑問

東日本大震災は被災地に深刻な医療崩壊をもたらした。ただでさえ医師不足に悩んでいた地域の診療所や病院が津波で失われ、医師や看護師が流出しているのだ。しかし被災者のため踏みとどまって奮闘している医師らもいる。宮城県本吉郡南三陸町の鎌田眞人医師（53）は医院も自宅も全壊し、全てを失ってしまったが、被災者に寄り添い続けた人だった。

今回の取材で、時には命をかけて人を救った人たちを訪ね歩き、通常では考えられないドラマを聞いて私はずっと頭がハイの状態だった。だから最後の訪問先、南三陸町字枡沢の「歌津八番クリニック」に夕方たどり着いたときには、くたくたにくたびれていた。

だが鎌田さんの「医師はそこにいる以上はやるんです」と淡々と話す内容を聞いているうちに背筋がしゃきっとしてきた。そして震災が露呈した医療危機の深刻さを思い、鎌田さんのような医師を応援することが「日本を世界一人にやさしい国」にすると思った。

鎌田さんは震災直後、医院も医療機械も無くなったし、薬もないから診療は無理だと思った。かつて勤務医をしていた大阪に行こうと思い、仙台から来ていた薬局の人に「車に乗せていって！」と言ったが、出産日が近い妊婦を診て欲しいといわれ、別の避難所に見に行くと陣痛も破水もなかったので、気仙沼の病院に行くよう指示した。ところがそこではお年寄りがみんな寄って来て「先生診てくれ」という。聴診器、血圧計、体温計しか持ち出せていなかったが、診ているうちにみんな安心した顔になる。そのうち「ここでやるしかない」と決心していた。

知らない顔の人の方がはるかに多く、とりあえず話を聞く。在宅酸素療法などの人は救急隊に頼むしかなく、ヘリで運ばれた。「薬がなくても低血糖より、高血糖の方が安心」などと説明したりした。鎌田さんの目前で亡くなった人はゼロだった。3月15日からは枡沢地区で被災を免れた接骨院を借りて診療所を再開した。薬のストックがある近くの薬局にも移って来てもらった。南三陸町内の病院・診療所7カ所が全壊した中で、唯一の民間診療所の再開だった。

夜は避難所の体育館に戻って当直した。救急隊には「本当に病状の悪い人を判定してください。パニック障害などはこちらで診て」といわれた。「昼も夜も何人診たでしょうか。多少は寝ましたが不眠不休的でしたね。阪神大震災の時に大阪にいたので災害時にすべきことは分かっていました。助かる人からやろう。クールになって、助けたい人からやろう、と決め診療をしました」

3月中は不安障害、神経性ショック、過呼吸症候群の人を多く診た。身内を亡くした人は最初のころは良く分からないから、避難所をぐるぐるまわって気丈に振る舞う。しかし行方不明のままだったり、死亡を確認して次第に精神的に参ってしまうという。4月になって奈良県の医師たちがやってきて「先生も休んでいていいよ」と言ってくれた。鎌田さんがいると、みんな鎌田さんのところに来るので診療所に泊るようにした。

しかし診療所は停電したまま。そのころ被災地にドロボーが出没した。建物が残っているとドロボーが来る。ひとりで診療所にいると怖い。反射式灯油ストーブをつけて、ソーラー懐中電灯とバットを脇に置いて寝たという。5月17日に水道が通じたが、最初の頃水は泥だらけで塩ぽかった。避難所に配られ

たペットボトルを取りに行って飲み水にした。被災しているにもかかわらず看護師さんも1日置きに当直してくれて態勢が整ってきた。7月1日から鎌田医院を「歌津八番クリニック」と改称した。診療所を継いでくれる先生のためには、個人名でない方が良いと判断したからだった。「3.11で医者になってよかったと改めて思った。患者さんが喜んでくれてやりがいがあったからだ」と、鎌田さんは述懐した。

鎌田さんを社会貢献支援財団に表彰に値すると推薦した気仙沼市医師会は推薦状で、鎌田さんが歌津中学校だけでなく地域内避難所（約14カ所、避難者約2,000名）に対しても巡回診療をし、在宅患者等への訪問診療も行ったと指摘している。

物静かな話しぶりの鎌田さんが、それまでの話し方を変え、力を込めて強調したのは、地域の将来への懸念と相変わらずの箱もの行政への批判だった。

「小さな漁港まで壊れた。養殖漁業は港湾整備があってこそ。すぐに元に戻せるだろうか。前のように収入が上がらないと若い人は南三陸から出て行ってしまう。高台移転だって500戸、1,000戸集まらないと小さな移転では限界集落を作るだけだ。将来への希望が見えないため、うつ病、神経症、ストレス過食、不眠症が増え、最初に向き合うのは医者だ。自殺したいとか症状が重い人は気仙沼の専門の精神科に回す。家に残っている人は診療費が3割負担に戻ってしまった。ジェネリック医薬品を用いたり、検査の回数を減らして診療費の負担を軽減するようにしているが、お金のない人は診療に来なくなるかもしれない」。地域の実情をもっともよく知るだけに鎌田さんの心配は募る一方だ。

歌津八番クリニックはレントゲン、心電図、レセプトの機械などを1,200万円で購入した。公的資金の援助は660万円だった。自己負担分は多少の保険金が入ったのと貯金を取り崩した。こうした民間への支援とは違って公立の医療機関には何ケタも違うお金がついた。「公立志津川診療所には30億円、気仙沼公立病院には60億円、石巻市立病院には90億円。立派な建物が出来るでしょう。でも本当に医者や看護師が集まるでしょうか。使われないスペースが目立ちランニングコストがかさむでしょう。巨額の投資が無駄になる恐れが強いのです。私は地域の実態に合わせた小さな診療所で始めて行けばいいと思います。無理な経営になると過剰診療になり、患者にしわ寄せがいきます」。鎌田さんは建設工事会社が儲かり、完成式典で政治家が胸を張って挨拶し、後は知らないという箱もの行政に首をかしげるばかりだ。

週刊東洋経済（2011年7月23日号）の「SOS! ニッポンの医療」という特集では「二重ローン問題などを理由に、再建を断念する民間医療機関が多発か」、「震災を機に医療機関集約化が進むと、医療が手薄な地点が発生する可能性も」、「職場を失った医師・看護師が域外に流出するおそれ」、「医学部志望生の東北離れが起きた場合、中長期的に医師不足が固定化も」などの問題を指摘している。

歌津八番クリニック以外のあと5つあった民間診療所が再開しないのは、建物を再建し、高額な医療機器をそろえ、看護師などを確保するのが難しいからだ。借金すれば二重ローンを抱える。患者数も減った。だが診療所が身近になければ住民は戻らない。残っている高齢者は集約された箱ものの大きな病院に通えるだろうか。鎌田さんのような地域に根ざした“赤ひげ先生”を実質的に応援しないと、被災地の医療は崩壊する一方だろう。

絆の意味（あとがきにかえて）

東日本大震災で社会貢献者表彰を受けた人々を取材して、あらためて「絆」の意味を考えさせられた。人間はひとりでは生きていけない。人という文字は人がお互いに支え合っている形をしているという。だからどんな困難や悲劇にあっても、人と人とが励まし合い、助け合えば希望が見え、勇気がわいてくる。

震災後、被災地の人々が絆の強さを示したと世界中から称賛を浴びたが、今回取材した方々は皆、そうした人と人が支え合う素晴らしさを如実に示してくれた人たちだった。被災者でありながら地域の人々を救援し、支える活動をした人は、自分も家や仕事場を流されるという過酷な状況にありながら元気で明るい。

そしてその元気と明るさが全国からの支援を呼び込み、さらに立ち直りを促進するという好循環を生み出しているのだ。「天は自らを助くる者を助ける」「情けは人のためならず」というフレーズがまさにぴったりなのだ。

9月23日の毎日新聞日曜版に、心療内科医の海原純子さんが「ネットワークと健康」という題の文章を書いておられる。「人や社会とのつながりは心の健康はもちろん、身体の健康にも大きくかかわる」という内容がとても分かりやすく書いてあるので紹介したい。海原さんは、東北大学大学院の辻一郎教授（公衆衛生学）の調査で、周囲の人々への信頼感が高い地域では被災地でも不眠の訴えが少なく心の健康度が高く、一方、見知らぬ同士が隣り合わせに住む仮設住宅地区では不眠の訴えも多く心の健康度が低下することが分かったとしている。

「家族、近所同士、職場だけでなく社会の中で同じ役目を持つ同士、趣味やボランティア、様々なネットワークが個人だけでなく社会の元気を生みだすもとになるだろう」と海原さんは締めくくっているが、社会貢献者表彰を受けた人々は、その代表的な事例と言えると思った。

社会貢献支援財団の日下公人会長は評議員会で、半世紀も社会貢献活動を持続し、東日本大震災でもボランティア活動に邁進した俳優の杉良太郎さんが描いた大きな木の絵の話をした。「大木の絵なんだけれど、根が地中にがっちり張っている部分をとてもしっかり描いてあった。実は目に見えない根の部分が栄養や水分を吸収して、空にそびえる枝や葉を支えているっていうことを杉さんは表現したんだろうね」。この絵の話から評議員会では「まだまだ我々が知らない素晴らしい人々が震災で活動しておられるのだろう」「どうしたらそうした人々を発掘し、表彰できるだろうか」「杉さんの絵をポスターにして、コンビニに貼ってもらい、“隠れた貢献者をお知らせください”と呼びかけよう」など議論が盛り上がった。

今回、私が取材した人々は話を聞けば聞くほど、感動した。多分、取材出来なかった他の貢献者にもそれぞれ大変なドラマがあっただろう。全て取材出来なかったことが心残りだが、評議員会では「今後も視野に入った人からどんどん表彰させていただきたいね」という結論になった。

「日本一ひとに優しい村」と呼ばれるようになった片品村の取材から始まった今回の取材中、いつも頭の隅にあったのは「なぜ日本は世界一ひとに優しい国と呼ばれそこなったか」という問いだった。今回の社会貢献者はそれぞれが自分が出来ることに精いっぱい前向きに取り組んでいた。しかしホテル観洋の女将、阿部憲子さんが言うように千年に一度の対応が求められているのに、復興庁が出来たのは11カ月後だった。箱もの行政の発想は建築会社や土木会社は潤しても被災者に寄り添うものではない。鎌田医師が言うように残されたお年寄りに寄り添う医療は、各地域に根差す診療所が出来るもので、集約された大きな病院の役割ではないのだろう。しかも大きな病院は医者も看護師も集まらず、地域の実情にあったものにはならない可能性が強い。

「福島の復興なくして日本の再生なし」と野田首相は耳当たりの良い言葉を吐いたが、原発の放射能被害にあった20キロ圏内、30キロ圏内の人々は故郷を失い、家を失い、仕事を失い、3重苦、4重苦に苦しみ将来の見通しは今も立たない。

片品村が1,000人近い人を受け入れた南相馬市の市長は「我々の市は、地震の被害を受けた人、受けなかった人、津波の被害にあった人、あわなかった人、原発事故で避難させられた人、避難しなくて済んだ人、地震にも津波にも原発にも襲われたひとなどいくつにも分割されバラバラになった」と嘆いているという。

私の知り合いで、日本鍼灸理療専門学校の生徒の石山ひなこさんは、福島出身なので震災直後に南相馬市に入った。家の窓に目張りして座敷の中心にいて放射能を出来るだけ避けようとしていた人に「避難所はどこですか」と聞いた時に、支援物資を渡そうとしたら「私達はそこまで困窮していない。もっとひどい目に会っている人が体育館にいるからそちらにあげて」と言われた。そのころは放射能を恐れて民間の配送車も支援物資も南相馬市に入ってこない時期だった。目張りした家の人の「他の人にあげて」という言葉に地域の絆を石山さんは感じたという。

しかしそうした地域社会が、南相馬市長の言うように、バラバラに分割され苦しんでいるのが実情だ。石山さんは今も都内の深大寺などの協力で境内でテントを張って、福島の産物を売るプロジェクトを継続している。やはり放射能で避難させられた飯舘村のおばさんたちが作りはじめた「漬物」などを東京の人に売る。失業手当や補償金で暮らすだけでなく、自分たちで作ったものが売れることの喜び。目の見えない「復興阿部企画」の阿部久さんが仮設のおば

あさんたちのために、ワカメの芯取りの仕事を考えたように、何かみんなで仕事をする事が心の健康、身体の健康につながるのだ。

仮設住宅に住む人の自殺や孤独死が伝えられる中、箱もの行政でない被災者の本当のニーズに寄り添う支援に日本国はもっとシフトすべきだ。「被災地の辛い環境の中に残って頑張ろうという人は、地元経済だけでは回らない。日本全国が産物を買うことが自立を応援することになる。でも放射能検査をパスしたものが風評被害で買ってもらえない現実もある」。石山さんは「福島の産物を持続的に売って、その売り上げでまた仕入れて売る」という循環を絶やさない事が自分に出来る支援だと思っている。原発避難区域から、バラバラに放浪している友人を探そうにも、杓子定規な個人情報保護法が立ちふさがるマニュアル一辺倒の行政。日本国が「世界一ひとに優しい国」と呼ばれるためには、硬直化し制度疲労を起こしている政治や行政の在り方を柔軟に変えるしかないのではないか。八木澤商店の河野和義会長が言う「ひとつ、生きる。ふたつ、共に暮らす。みっつ、人間らしく、魅力的に」という基本に立ち戻れば「世界一ひとに優しい国」が実現するだろう。

東日本大震災は日本がどのような国になるかを問うている。今は転換期なのだと思う。

以上、128件の受賞者の中から、1割ほどの人を7月末から8月にかけて1週間程で訪ねさせていただきました。群馬、栃木、福島、宮城、岩手と忙しい日程でしたが、社会貢献支援財団のおかげで比較的スムーズに取材が出来ました。

現地で目にしたのは東日本大震災が発生して、1年半にもなろうとする中で、復興に向けた動きが停滞し、瓦礫も山積みという光景で今も脳裏から離れません。私自身、こうした取材を通じて受賞者の方から多くのことを学び、何か生き方が変わったと感じております。

受賞者の皆様が日本を支える礎だと確信しておりますが、私もその一つになりたいと決意しています。

中島健一郎

1944年生まれ。東京大学文学部社会学科卒業後、毎日新聞社に入り、浅間山荘、金大中、連続企業爆破、ロッキード、慶応不正入試、阪神大震災、オウム真理教事件などの他、殺人事件の捜査本部を57件担当。

ワシントン特派員として、レーガン、クリントン両政権時代を取材し、米軍のグレナダ侵攻、中米紛争など戦地にも行く。警視庁キャップ、ワシントン支局長、社会部長などを歴任。事業担当常務を2006年に退任する。

現在は社会貢献支援財団評議員の他、食の安全安心財団理事、ＮＰＯ日本スポーツ芸術協会理事。大正大学客員教授としてジャーナリズム論を教える他、房総半島の高滝湖近くで、グリーンエネルギーや伝統技術を使った山村住宅開発（土太郎村、10万坪）に取り組んでいる。

社会貢献者表彰分野・年度別受賞者数実績表

表彰分野	1期 昭46	2期 47	3期 48	4期 49	5期 50	6期 51	7期 52	8期 53	9期 54	10期 55	小計
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・ スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
式典月日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	ホテルニューオータニ				笹川記念会館						

表彰分野	11期 昭56	12期 57	13期 58	14期 59	15期 60	16期 61	17期 62	18期 63	19期 平元	20期 2	小計
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・ スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
式典月日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	笹川記念会館										

表彰分野	21期 平3	22期 4	23期 5	24期 6	25期 7	26期 8	27期 9	28期 10	小計	**受賞者合計**
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16	343	**3930**
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	72	**91**
青少年育成・ スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	274	**1626**
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	384	**2385**
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	79	**270**
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	104	**364**
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	298	**1134**
その他	13	7	7	0	0	0	0	0	27	**1658**
小計	337	339	230	104	149	136	139	147	1581	**11458**
式典月日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9		
式典会場	笹川記念会館		ホテル海洋			東京全日空ホテル				

社会貢献者表彰部門・年度別受賞者数実績表

部門	29期 平11	30期 12	31期 13	32期 14	33期 15	34期 16	35期 17	36期 18	小計	**受賞者合計**
第一部門										
緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門										
多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門										
特定分野の功績		4	7	8	8	11	9	9	56	
(海の貢献賞)			2	1	3	3	4	2	15	
(国際協力)		2	2	1	0	2	0	0	7	
(ハッピーファミリー)		0	0	2	1	3	1	2	9	
(21世紀若者)		2	3	4	4	3	4	5	25	
こども読書推進賞					3	3	3	3	12	
小計	20	24	24	28	29	29	28	32	214	**11672**
式典月日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場	東京全日空ホテル	ホテルニューオータニ	東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受け付ける。
平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。
平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する。
平成15年度よりこども読書推進賞を新設する

部門	37期 平19	38期 20	39期 21	40期 22	41期 23	42期 24	小計	**受賞者合計**
人命救助の功績	9	13	11	11	8		52	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		175	
特定分野の功績（海の貢献賞）	1	2	3	5	2		13	
小計	43	50	48	50	49		240	**11900**
式典月日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21			
式典会場	ANAインターコンチネンタルホテル				帝国ホテル			
こども読書推進賞 ※表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル	1						1	**13**
東日本大震災における 貢献者表彰 ※表彰式：5/1 会場：帝国ホテル						128	128	**128**
								12041

※平成19年度より部門名を変更する。こども読書推進賞は最終回。
※平成24年度は東日本大震災における救難活動された方を表彰。

都道府県別受賞者内訳

県　名	平成23年度までの累計	平成24年度の受賞者	受賞者数
北海道	639		639
青森県	176	1	177
岩手県	186	24	210
宮城県	312	54	366
秋田県	123		123
山形県	151	1	152
福島県	166	9	175
茨城県	192	1	193
栃木県	142	3	145
群馬県	239	2	241
埼玉県	454	6	460
千葉県	391		391
東京都	1,115	9	1,124
神奈川県	605	4	609
新潟県	253		253
富山県	143		143
石川県	143		143
福井県	203	1	204
山梨県	132		132
長野県	195	2	197
岐阜県	210	1	211
静岡県	308		308
愛知県	298	1	299
三重県	162		162
滋賀県	97		97

県　名	平成23年度までの累計	平成24年度の受賞者	受賞者数
京都府	195	1	196
大阪府	470		470
兵庫県	498	3	501
奈良県	111		111
和歌山県	142		142
鳥取県	90		90
島根県	111		111
岡山県	305		305
広島県	404	1	405
山口県	271		271
徳島県	173		173
香川県	192		192
愛媛県	150		150
高知県	70	1	71
福岡県	532	1	533
佐賀県	117		117
長崎県	265		265
熊本県	224		224
大分県	121	2	123
宮崎県	70		70
鹿児島県	138		138
沖縄県	154		154
その他	75		75
合　計	**11,913**	**128**	**12,041**

役員・評議員一覧

会　　長	日下　公人	日本財団　特別顧問
副 会 長	内館　牧子	脚本家
専務理事	天城　　一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理　　事	久米　信行	久米繊維工業株式会社　代表取締役社長
理　　事	立石　信雄	オムロン株式会社　特別顧問
理　　事	永嶋　久子	株式会社 資生堂　元取締役、中央区教育委員会　委員長
理　　事	三谷　　充	三谷産業株式会社　代表取締役会長
理　　事	屋山　太郎	政治評論家
理　　事	米長　邦雄	公益社団法人 日本将棋連盟　会長
監　　事	篠原　由宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監　　事	竹内　清治	BORT RACE振興会　元理事
評 議 員	石井　宏治	株式会社 石井鐵工所　取締役社長
評 議 員	尾島　俊雄	銀座尾島研究室　主宰
評 議 員	今　　義男	財団法人 シップ・アンド・オーシャン財団　理事長
評 議 員	さかもと未明	漫画家、作家
評 議 員	重村　智計	早稲田大学　国際教養学部教授
評 議 員	泊　　懋	東映アニメーション株式会社　元相談役
評 議 員	中島健一郎	株式会社 シナプス・サポート　取締役会長
評 議 員	広渡　英治	公益財団法人 ブルーシー・アンド・グリーンランド財団　理事長
評 議 員	藤原　正彦	お茶の水女子大学　名誉教授
評 議 員	三宅　久之	政治評論家

（平成24年5月1日現在）

平成13年から、当財団の理事としてご協力いただきました米長理事は、同24年12月18日、同16年から当財団の評議員としてご協力いただきました三宅議員は同24年11月15日逝去されました。両氏のご協力に感謝申し上げますとともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。

公益財団法人 社会貢献支援財団

設立：1971年5月1日
所在地：東京都港区西新橋1-11-3
郵便番号：〒105-0003
TEL：03-3502-0910
FAX：03-3502-7190
URL：http://www.fesco.or.jp

東日本大震災における貢献者表彰の記録

2013年3月10日発行
発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団
Published by Foundation for Encouragement of Social Contribution（FESCO）
http://www.fesco.or.jp
印　刷：株式会社 総合印刷新報社

Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION